

---

# ほんとにごめんね

りふえいる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほんとにごめんね

### 【コード】

N9301S

### 【作者名】

りふえいる

### 【あらすじ】

とある島国で、少女は竜と手を結び、少年の大切なものを奪った。

少年は憎しみを、少女は後悔を、竜は復讐心を抱き、その島は意図されるままに争乱に飲み込まれてゆく。

その中で少年と少女は、それぞれの『絆』の糸をたぐりよせ、本当の気持ちをぶつけあう。

## プロローグ

夜の帳とばしが降りた、ある島国の高山地帯。  
そこにそびえる城の中。その通路にて。

「ごめんね」

少女は果物ナイフを取り出して、そうつぶやいた。

「ふえ？」

年端もいかぬ女の子を後ろから抱き締め、少女はその首に刃を突き立てた。

「な」

「え」

少女の凶行に、周りの人間の動きが止まる。

「何をしているの？ 片角のドラゴン！」

藍色あいいろの外がい套とうと長髪をなびかせて、少女は通路から声を張り上げた。  
「相解あいわかつたあ！」

天井のない吹き抜けの中庭に存在する、左角が欠けている藍色の飛竜。

その飛竜は二本の脚あしを持ち、前肢ぜんしである翼も折りたたんで、たてがみと尻尾を逆立てている。

鱗は深い青色で、首の後ろに生えるたてがみと両眼りょうめは美しい銀色。  
月明かりに照らされて神々しく見える飛竜は、隙を見せた騎士と兵士に飛びかかった。

「ぬぐええええええ」

「や、やめ………ひぎやあああああああつ！」

金属製の甲冑かっちゆうごとその牙に噛み砕かれ、この場にいる兵士と騎士は半数が殺害された。

飛竜は狂ったように、満月の下で亡骸なきがらをむさぼり食っている。

「あ、あなたは！　なんで、なんでこんな………！」

「さようなら」

女の子の母親が、少女を取り押さえようとした。

少女は冷静に対応し、接近してきた母親のみぞおちにナイフを刺し込んだ。

「あ、うああ」

急所を一突きされた母親は、その場に崩れ落ちる。

近くに横たわる自分の娘を、両腕で抱き締めようとしたが。

「下らない」

その手を少女に踏まれ、母親は思い叶わず息絶えた。

「な、なんだよ……これ」

どこからか、フクロウの泣き声が聞こえる。

少女は冷たい眼差しで、後ろにいる少年を見やった。

母親と妹が殺された事実。

少年は、それを受け止められずに呆然ぼうぜんとしている。

「ほんとにごめんね」

血にぬれる長い藍髪あいがみをなびかせ、少女は中庭に踏み込んだ。

「わ、私の娘と妻をよくもおおおおおおおっ！」

騎士のひとりが、少女に斬りかかる。

「っ」

その長剣をナイフで受けるも、力の差があって少女はひるんでしまふ。

「させんぞ」

「ぬぐああああああああああああああああああああ」

飛竜は火球かきゅうを放ち、その騎士を焼き殺した。

「眼前の敵に背を向けるなど、戦いくさではやってはならんことだ」

ドスの利いた低い声で、飛竜は忠告する。

まだ残っている兵士を見下ろし、飛竜は黒い煙を吐き出した。

「ひ、ひい！」

「お、おたすけるお！」

慌てふためいて逃げ出す兵士達。

しかし、飛竜はそれを許さなかった。

「先刻の忠告が、聞こえんかったかあ！」

今度は火の玉でなく、火炎の息吹で兵士を焼殺した。

「あ、ああ……」

この場に残されたのは、少年ただひとり。

中庭は欠損した遺体が数多く放置され、鼻をつく死臭が充満している。

そこに転がる割れたぶどう酒の瓶。

それから液体がもれて、アルコール臭が漂っている。

常人であれば、ここに長居しただけで正気を失ってしまうかもしれない。

「もう、他にはいないのかしら？」

「おらんようだ。だが」

飛竜は躊躇なく近づくと少女に、牙を突き立てようとした。

「ほう？ 儂に恐れを抱かぬか。肝が据わっているな、小娘」

「ひとつ聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「私が殺そうとしていた王はいずこに？」

質問の意図が解らなかつたのか、飛竜は目を見開いている。

頭を少女から離して、首を傾げている飛竜はこう答えた。

「そやつなら、儂の腹の中だ。もう消化されておるやもしれぬな」

「やつぱりそうだったの。ありがとう」

にこりと笑って頭を下げ、感謝の気持ち伝える少女。

きよとんとする飛竜。

「何故に、礼を言う？」

たまりかねた飛竜は、少女に問い返した。

「あなたが食したのは、偽りの王よ。私はその事実を、つい先日亡くなったママから教わったの」

「ふむ？ だとするなら、お前は何だ？」

「私？ 私は、先代の血族よ」

「王女、だと」

「ええ、そうよ」

言葉の交わしている間、飛竜は少女を警戒する素振りを見せなかった。

「な、なんだって」

その言葉を発したのは、ただひとり残された少年。

信じられないといった面持ちで、少年は少女を凝視（まじまじと）している。

「ど、どうして……どうしてえ!？」

少年の叫びが、城内にこだました。

## 第1話

「ど、どうして……どうしてえ!?!」

近くに落ちていた剣を手にして、少年が中庭に踏み込んでくる。

「小僧。儂に焼かれないのか」

飛竜が口を開いたことに、たじろぐ少年。

少女は両腕を広げて、両者の間に立った。

「何の真似だ？ 小娘」

「もう結構です。食事は終えたのでしょう?」

「フン。儂に指図する気が」

「建国記念日に王を血祭りにできたので、私はもう満足です」

「なんだと？ ほづ。ここで酒を飲んで油断していたのは、祝いの

席だったからか」

飛竜は口を閉じて、足音を立てながら後退する。

「まあ、よい」

翼を折りたたみ、身体を丸める飛竜。

「小僧と小娘。どのような睦言むじこをかわすか存ぜぬが、儂がいることを忘れるなよ」

飛竜は目を閉じて、休息している。

「なんで、なんで生きているんだ？ あなたは、死んだはずじゃ」

少女は果物ナイフに付着した血を振り払い、それを革製の鞘に収めた。

それから羽織っていた外套を外して、裏返す。

両手でそれを広げて見せて、少女は自分の正体を少年に明かした。

「それは……二ヶ月前に亡くなった先代の王ノ口八が描いたとされる、飛竜のエンブレム」

羽ばたく飛竜の紋章。

気高く、大空のように心を広く、青く澄んだままに生きる。

そんな雄大さゆうだいを表現したものだ。

「この外套はパパからママに。それからママが私に授けたものよ」  
少女は外套を羽織り直した。

「私の名は、イウ・ヴォアレスト。セカンドネームはママのものよ。パパは自身の身に危険が迫っていると察してか、事故死に見せかけて、私とママを湖の集落に隠したのよ」

その名前と経緯いきさつを聞いて確信した少年は、思わず剣を落としてしまふ。

「じゃあ。一年前の、落石事故は……」  
「そう。それは先代が私を秘匿ひかくするために行った事よ」

一年ほど前。

イウの父親と母親は、城の地下通路にて別れを惜しんでいた。

「あなた……」

「俺に構うな。お前達のためなんだ」

その娘、イウは無言でうつむいたまま。

イウの父親の左腕は欠損している。

それが彼に戦士を引退させ、王となるきつかけを与えた。

「元気でな、イウ。かあさんと、仲良くやるんだぞ」

父親に右手で頭を撫でられるも、イウは無言で首を横に振る。

涙をこぼし、父親のシャツの裾すそをつかんで、放すまいと力りきんでいる。

「イウ。もう、もう放しなさい」

両親の手に触れられて、イウの手はおもむろに離れた。

「事が済んだら、迎えに行くよ。だから、それまでいい子で待っているんだ」

バイバイと手を振る、父親とイウ。

母親に手を引かれて、イウは城に隠された通路を潜り抜け。

散歩中に落石事故に見舞われたとよそおい、母親とイウは湖の集落に隠れ住むようになった。



その話を聞いて、少年は目を白黒させる。

「じゃあ、やっぱりノロ八王は暗殺されて……」

「詳細は存じません。けれど、あなたたち民の間にそのような風潮があつたのね」

外套だけでは物足りない。

イウは、シャツの中に隠していた首飾りを出した。

この竜の角の首飾りにも、飛竜の姿が刻まれている。

「本物の、イウ王女……っ？」

そうだと確信した少年は、再び剣を拾い上げた。

「私を討つのですか？ オル」

涙目でイウは、少年の名を口にした。

「ぼ、僕の名前を……」

「あなたに殺されるなら本望です。ですが、まだ私は死ねないので。だから、もう少し待って」

「な、なにがだよ！ 僕の両親を、妹を、よくもおおおおおおおおおおおお！」

オルと呼ばれた少年は剣を振り上げて、イウへと斬りかかる。

イウはナイフを抜いて応戦し、その刀身を横から叩いて払った。  
「な」

武器をなくしたオルは、近くに何かないか目で探す。

その隙にイウはナイフを逆手から順手に持ち替えて、オルの左頬に軽い切り傷を負わす。

「ん、んむっ!？」

と同時に、イウはオルの唇を奪った。

壁に押しつけて、イウはオルを強く抱き締めている。

「好き……」

涙をこぼしながら、イウはオルから身を離れた。

「な、な……っ」

イウはナイフと革製の鞘を、オルの足下に投げ捨てた。  
それと、自分がしていた角の首飾りをオルの首にかける。

「情熱的だな。小娘」

「私はイウです。何度言えば覚えるのですか？」

赤面しながらも、イウは飛竜に食ってかかった。

「フン。儂に口答えとは……いや」

「言いたいことがあるのでしたら」

「何でもないとっておろう。くどいぞ。小娘」

「……………」

飛竜が名前を呼ばないことに、不機嫌になるイウ。

イウは飛竜に歩み寄り、満月をあおぎ見た。

「ど、どこにいくつもりだ」

オルはナイフを拾い上げて、イウと飛竜にその刃を向ける。

「そちらの小僧も肝が据わっているな。儂に刃先を見せるとはな」

「くっ」

手足が震えている。

それを見抜いた飛竜は、オルにこんなことを言った。

「勇気と無謀を履き違えるなよ。小僧」

「う、うるさい！ ぼ、僕は、僕はオル。オル・ネスカデイだあ！」

言葉だけで、オルは踏み込もうとはしなかった。

「そうか。覚えておくぞ」

飛竜はゆっくりと起き上がり、イウに背中を向けた。

「何の、つもりですか」

「儂の名はイグノレストとゆう。小娘よ。ネズミの気を引いて儂を

助けた礼だ」

「私はもう、あなたに復讐ふくしゅうの恩義は返したし。これで終わりのはず

よ」

「そう言うな。儂とて簡単に人を乗せるような馬鹿ではない。第一、

血の二オイが濃いと近寄るヤツがいる。特に女はいらぬ危険も付き

まとうからな」

「そうですか。では、お言葉に甘えて。イグノ」

イウはイグノの背中に乗り、ジーンズのポケットから革製のひもを取り出す。

「フン。どちらの意味でも、食えない女子おなごだな」

「よろしいですか？」

「構わん。それがあれば、飛翔する際に小娘のことを気遣う必要がなくなる」

イウはイグノの首にそれを通し、自身の腰にそれを巻きつけた。

「ま、待て！」

「む？」

イグノは翼をはためかせ、すでに地面から浮上している。

「必ずだ。必ず、僕はお前らを討ち取ってやるからな！」

「ほう？ いいだろう。やってみるがいい」

イグノはオルのほうを向いて、舌なめずりをした。

「オル。連日続いた大雨による影響で、土砂崩れが起きて、城下に通じる山道が塞がれています。私は地下通路を使ってここにやってきました。そこを通り、城下へと」

「うるさあい！ 僕に構わず、行くんならさっさと行けよお！」

イウの言葉を制して、オルはふたりに飛び去るよう促した。

「つまらぬな。小僧。自分を呼ぶ時は僕などと甘えず、俺と呼ぶべきではないか？ 子供らしさがぬぐえぬ。そのままでは、僕は恐れようにもそれができん」

その一言が、オルを決意させた。

「お、れは、俺は……必ず、殺してやる。お前と、イウ王女を……殺してやるからなあ！ ここで生かしておいたら、絶対に後悔する剣士になってやる！」

「やれやれ。小うるさいガキで終わらねばいいがな」

イグノはイウを乗せて、この場から飛び去った。

三年ほど前。

『お前もいつか、あの人に仕える日が来るんだぞ』

『きしを、めざしていれば？』

『そうだ。我々が命を張って守らなければならない御方だ』  
オルが九つだった時。

城下町での祝賀会で、オルは初めてイウ王女 of 存在を知った。

建国記念日でのお祝いの席である。

子供であるふたりには意味も解らず、退屈だったよう。

同時に、ふたりはあくびをした。

『あつ』

イウとオルは目と目が合って、たがいにおかしくて笑ってしまっ  
た。

『んっ？ どうした、オル』

『う、ううんっ。なんでも、ないよ』

オルの心臓が早鐘を打っていた。

『おや、手を振っているぞ。誰に向かって……』

オルが大きくジャンプして手を振ると。

イウ王女は微笑みながら、オルのタイミングに合わせて腕を振っ  
ていた。

『オル、どうやらお前は気に入られたらしいな』

『えっ、な、なんだよ、とうさんっ』

一年前、落石事故でイウ王女が死んだと聞かされて、オルはショ  
ックを受けた。

それを皮切りに国内から落ち着きがなくなり。

銀槌の王。隻腕の鍛冶王として名を馳せこの国を繁栄させた、ノ

口八王が病死したのだ。

その事は島国フォジス内を騒然とさせた。

後継の王はライドといい、横暴な手腕が目立っていた。

それまで城を警護していた騎士団をほとんど城下に追いやり、自  
身で組織した一団を城に常駐させたのだ。

『新王は、何を考えているんだ。酸素が薄い高所で、多数の新参者を警護に置くとは……身体を慣らすには、時間がかかるというのに』  
オルの父親だけではない。

その手腕は誰が見ても、乱暴極まりないもの。

城下町でも不穏な噂は流れ、先代は暗殺されたのでは……という噂話が絶えなかった。

オルの父親だけは、未熟な兵士と騎士の指導役として城内に足を運んでいた。

それが、今宵の悲劇を生んだ。

イウとイグノは、満月の夜空へと消えた。

ふたりを見送り、オルは現実を見つめ直す。

「父さん、母さん……ヒュ」

オルは角の首飾りを握り締める。

「なんなんだよ、ちくしょう」

ナイフを革製の鞘に収め、オルは吹き抜けの中庭を見渡す。

倒れている父親を見つけ、涙をこぼしながら歩み寄る。

「父さん……」

しゃがんで両手で揺らしながら呼びかけても、返事はない。

「母さん、ヒュ」

明かりのない廊下で横たわるふたり。

オルが近づいて声をかけても、返事はなかった。

「どうして……」

オルは指先で自分の唇に触れて、その温もりを思い出していた。

「本当に、あれはイウ王女なのか……？」

あの涙は　　なんだったんだ。

悲哀の色に満ちた、あの目は。

『好き……』

好き？　　イウは、俺にそう言ったんだよな？

「違う。俺は、俺は何を……！」

オルの心は、イウの告白によって乱されていた。

「く、そお……っ！」

オルの中で込み上げる怒り。この惨状を見て、殺意がより強くなった。

「もう、思い出すな」

オルにとって、イウは。

「祝いの席に、ドラゴンが乱入しただけでなく……イウまで、現れるなんて」

その場でイグノと手を結んで、大量殺戮たいりょうきつりくをやったのけた殺人者なんだ。

それだけで、殺す理由は足りている。

「地下通路があるって、言ってたな」

耳を澄ますと、奇妙な物音が遠くから聞こえる。

静寂の中でないと気づけない、微かな物音。

「こつちか……？」

オルは自身の聴覚と勘を頼りに、地下通路を探し始めた。

『はっははははっ。元気だな、あの坊主』

『うん。そうだね』

『これで退屈にあくびをしなくて済むなっ』

『あーっ、パパひどいよお』

『しかし、あの坊主は……隣に居るのは、そうか。副団長トルガ・ネスカデイの息子か。腕を振ってるぞ、合わせてやれ』

腕を振って、イウは名も知らなかったオルとコンタクトを取る。

この時からイウは、胸の高鳴りを意識し始めた。

しかし、次第に国政がいそがしくなり、イウは城下に外出できずにいた。

暗い夜。城内の窓から眺める景色が、明るい町が。

オルが生きている。そこにいるんだと、教えてくれた。

イウに乗せたイグノは、空であるものと遭遇していた。

「やはり、か」

「えっ？」

イグノより小型の、中型の猛鳥。

「鳥獣だ。儂と小娘の血の二オイに誘われたか」

その数は五体。

いずれも尖ったクチバシがあり、四肢からは鋭い爪が伸びている。敵は五つで、風もそれほど強くない。

「舌を噛むなよ。これから、あやつらを駆逐する。しっかりとつかまっておけ」

「う、うん」

高高度の夜風は、身を凍えさせる。

イウは歯を食い縛り、外套を強く握り締めた。

「それで、小娘。向かうべき方角はどっちだ」

「湖の近く、その集落へ。このまま森のあるほうに進めば、湖が見えるはずよ」

「この島国、フォジスの地理は詳しい。それだけ聞けば充分だ」

手始めに吐いた火球が、グリフィンの一体を撃墜した。

それを目の当たりにし、その軍勢にどよめきが走る。

「呪うがいい。儂の前に現れた事を、死の前兆として悟れなかった事をなあ！」

イグノが吠え猛った後、一匹が背を向けて逃げ出す。

「戯けがあっ！」

翼で大気を叩いて加速し、イグノは翼爪でグリフィンを背中から串刺しにする。

捕まえたグリフィンの喉に、大口開けて噛みついた。

肉を食いちぎり、イグノは羽ばたくのを忘れて咀嚼する。

「又ハハハハハッ！ やはり、人の肉より美味だな」

息絶えたグリフィンを捨て去り、イグノは体勢を直して飛翔する。

「あいたたたっ」

「小娘。先刻の急加速で舌を噛んだか」

「へ、へいきだよっ」

「そうか。それならよいのだ」

焼き鳥が喰えると、興奮冷めやらぬイグノ。

口直しに鳥肉をいただくために、イグノは火炎を吐き出した。

その頃、オルはというと。

ようやく地下通路を見つけ、安堵の溜息をついていた。

「ここ、だよな」

石の床を手でどかして、オルは顔に冷たい風を浴びる。

「カビくせえな」

指で鼻の下をこすり、オルはハシゴを伝って、そこに降り立つ。

「光る石……？」

この通路の床は発光する石でできていた。

呼吸を整えて、オルは歩き始める。

「外まで、遠そうだな」

最初にそれだけを言って、オルは無言で足を動かし続ける。

小一時間ほど歩いて、オルはようやく外の光を見つけた。

「あれか。ふう。ようやく見えたよ」

くうううううう。

「あ」

祝いの席であまりものを食べなかったせい。腹の虫が騒いでいる。

「こうなると分かっていたら、もっとたらふく食ってただけどなあ  
今は、食欲がない。」

「てか、ここって崖かよ」



風が吹く中、下を見て後ずさりするオル。

脇に下る道を見つけて、大きな溜息をついた。

「下手すると、落下するな」

それは道幅が狭く、もし踏み外せば無事では済まない。  
いざ、その道へ一步を踏み出そうとする。

「何してんだ、お前？」

その時、何者かがオルの肩をつかんだ。

「うわぁ!？」

驚きのあまり飛びのいてしまうオル。

尻もちをついて、恐るおそる声の主を確かめた。

「んっ？ お前は……ネスカデイの」

「えっ、あ、アルセスさん……?」

黒くて艶のある短髪に瞳を持つ、細くて背の高い男性。

ジーンズに白いシャツだけのラフな服装で、右腰に携えている刀  
が目を引く。

前騎士団長で、今では城下町を警護する最高責任者だ。

オルの父親に故ノロ八王、そのふたりの親友でもある。

「そのままじつとしている。落ち着きがないと、ぺっしゃんこにな  
んぜ」

「えっ？ な、何を言って……わぁあぁっ!？」

オルの右手が、地面についてなかった。

それでパニックになるオル。

アルセスはオルを通路のほうに引きずり、溜息をついた。

「落ち着けて言ってるだろ？ ええっと、確かオルだったな。ど  
うして前王やオレしか知らない通路を？ 説明してくれないか」

知っている人に出会い、胸を撫で下ろすオル。

「え、えっと……」

「おい。話を聞いてたか？」

「あ、い、いえ」

「わっつたよ」

再度同じ質問をするアルセス。

「ぐ、偶然見つけたんです。そ、それこそどうしてここにアルセスさんが？」

「偶然？ まあいいや。オレがここにいる理由は、数日前に森の中で姫らしき人を見たって、奇妙な亡霊騒ぎがあつてな。それを個人的に調べてたんだが、オルに出くわすとはねえ」

アルセスはオルの服のあちこちに付着する血痕を見て、いぶかしげな顔をした。

「血の二オイ、だな。説明しろ、オル」

屈んで竹の水筒をオルに手渡し、それから洞窟の奥へと進むアルセス。

「城のほうには、行かないほうが……」

「だから、何があつたんだ！」

振り返らずに怒鳴られて、オルは水筒の中身をこぼしてしまふ。

「あつ、い、その……信じて、くれますよね」

水を一口飲み、オルはアルセスの背中を見た。

「何を疑うんだよ。オレとお前の父、トルガの仲だろ」

オルのほうに戻ったアルセスは、地面にあぐらをかいた。

順序立てて説明しようにも、オルの頭の中は混乱している。

「ふう」

深呼吸して、オルは自分が見てきたことを順番にアルセスに説明する。

「城がドラゴンに襲われ、壊滅？ 薄い大気に慣れていない連中ばかりが集っていたんだ。そんな短期間で慣れるはずはないし、満身に体力作りもしてなかったんだろう」

落城したのには、アルセスはあまり驚いていない。

「宴の警備が飲食に金を使って薄いなって思っていたんだが。下手に声をかけても左遷させんされると恐れて、足を踏み入れなかったのが……

…オレにも、責任はあるな」

頭をかいて、反省しているアルセス。

その表情は、続きを聞いたそうだった。

「トルガが、死んだ？ バカな……いや、だからオルはここから？」  
ノロ八王、アルセス、オルの父親　トルガの三人はともに剣の修行に明け暮れていた。

アルセスが驚くのは無理もない。

「姫が生きていた？　オル、お前は頭でも打ったのか」

右手で自分の頭を軽く叩き、アルセスはオルが正気かと問いかける。

「本当なんです。イウ王女が、城を襲ったドラゴンと結託して……」

「はっははははっ！　姫がドラゴンと悪行三昧だつて？　たとえ生きていたとしても、姫の性格上、そんな暴挙ができるはずあねえよ」

信じてもらえず、オルは地面に拳を打ちつける。

「とりあえず水でも飲んで、喉とボケた頭を潤せ。疲れてんだ。それによる幻覚かもしれないしな」

立ち上がるうとしていたアルセスが、片膝について動作を止めた。  
「そっぴや、妹さん。ヒユは、どうした」

トルガは新王に強く意見はしなかつたため、城で見習いの指導者として働いていた。

オルとその一家は、その労いわいのために宴に招待されたのだ。

「イウ王女に、殺されました」

腕を組んで崖の上に立ち、アルセスは星空を眺める。

「百歩譲つても、気でも狂うか操られでもない限り、姫がそんな真似をするとは思えんがな。まあ、百聞は一見にしかずだ」

「え？」

「オレは城に向かおう。ドラゴンがいるのであれば、それを討たねえとな」

振り返りながら、アルセスは通路の先に目を向けた。

「いえ、ドラゴンはもう城から飛び立ちました。イウ王女と一緒に土ぼこりを払って立ち上がるアルセスは、眉をひそめてオルを見

下ろす。

「ふうつ。今まで話を聞いていてなんだが。オル、お前は正気か？」  
怪訝けげんな面持ちで、アルセスはオルを問い質ただした。

「あ」

オルはそれをアルセスに見せる。

「これが、ありました」

イウからもらった、首飾り。

それをシャツの中から出した途端、アルセスの顔色が変わった。

「なっ、それは……ノロハが姫にプレゼントした。まさか？」

「そうですねっ！ イウ王女は、俺の家族を……」

「まさかお前」

「え？」

アルセスの左手が、右手に持つ刀の柄つかに触れた。

それを目視し、恐れをなしたオルは逃げ出そうとする。

「クギヤアアアアアッ！」

空気が張り詰めていたその時。

アルセスの背後を、何かが墜落つらくしていった。

「えっ、い、いま……なにが」

「グリフィンか？ 火がくすぶっていたが」

ふたりは、その後に上空を飛ぶ影をひとつ見つける。

「あれは、ドラゴン？」

真つ暗な夜空に溶け込む、藍色の飛竜。

それが、遠くの空へと羽ばたいていた。

「あの方角は、湖の集落のほうか？」

「イグノだ。イウも乗っている！」

「本当にドラゴンがいやがるたあな。誰かが乗っていたような気がしたが」

「イウ、だ」

「なんだって？ しつこいぞ」

「うわわわ」

追いかけてしようとするが、オルはここが崖だということを出した。

「落ち着け。真偽がどうあれ、今はここを脱しよう。近くにドラゴンがいるとなれば、城下町の警護を疎かにするわけにはいかない。オル、俺の後についてこい」

「あ、は、はい」

手を引かれて立ち上がるオル。

「そっぴや、オル。お前、高所恐怖症だったか」

「うっ」

凶星。

アルセスはオルのほうを振り返り、深い溜息をついた。

『おい、ノロハっ！ てめえは腕力がありすぎんだよ』

城近くにあるイモ畑で、ノロハに意見しているのは。

『すまんすまん。思いきりやれば引っこ抜けると勘違いしていた』

『徐々に力を入れる。こちらの姫さんのほうが優秀じゃないか』

『うしよっ』

ノロハの親友の、アルセスだ。

『芋づるはゆっくりやらないと、途中で切れちまうんだ。そのへん

は、マイトとイウ姫が言わなくても理解してくれるから助かるぜ』

『あらっ、イウだけ姫呼ばわりして……私だけ何も無いのはイヤミねえ』

『もう姫って年齢でもねえだろうが』

『……何か言った？』

イウの母親である、マイトの迫力におじけたアルセスは。

『なんでも無い。一通り掘り終わったら、焼き芋にしようからそれでチャラにしてくれ』

そんな交渉をして、この一件をないものにしようとする。

『ぶっん。サツマイモだけでなく、ジャガイモまで栽培してるのね

え

『この農園を作っていたアルセスは、得意げに胸を張った。』

『ジャガイモも調理しろってか?』

『そこまでは言っていないわよ』

『そう催促されたような気がしたのは、気のせいじゃないと思うんだが』

『これだけの量、とてもじゃないけど私達には食べきれないわ。城下にも配らないと、ひんしゆくを買うわよ』

『だろうな。まあ、こちらら明日にジャガバターとかグラタンとかやるうかと思っただけだ』

『アルセスって、器用ねえ』

『こつ見えても昔、農業とか調理師とかいろいろとやらされてたからな』

話を聞くだけ聞いたマイトは、今度はアルセスをからかい始めた。

『ふん。これだけできるのに、お嫁さんがいないのが残念よねえ』

『うっせえ！ それより、城下でくつろいでるトルガも呼んどけよ。』

こんな大量のイモを運ぶのに、オレらだけじゃ人手不足だ』

『あら、ウチの旦那を使えばいいじゃない』

『隻腕でも持てる量が限られるぜ。第一、王様にそんなことやらせたオレが後でどやされそうだし』

『そういうのは気にして、お嫁さんは気にしないのねえ』

『だまつとけ!』

アルセス以外、皆が笑っていた。

長く時間をかけて、国として本格的に形になりつつあったフォジス。

イウは、この触れ合いができる時間が楽しいと感じていた。

いつからだろう。この幸せな一時がなくなってしまったのは。

その頃イウとイグノは、壊滅した湖の集落にやってきていた。

そこにある広場に、ゆつくりと降り立つイグノ。

「人気がないな。騒ぎのひとつでも起きるかと思ったが……」  
「もう、ここには人間はいないの」

「……………」

ここにいるのは、イウとイグノだけ。

それに気づいたイグノは姿勢を低くし、イウが降りやすいよう配慮する。

「ありがとう」

ただひとつ、湖に最も近い家屋は無事だった。

イウはその家屋に向かおうとするも、イグノに呼び止められる。

「花畑の近くに墓標がいくつもあるが、あれは小娘がやったのか」

「それ以外にできる人なんて、いないでしょ」

「そう、か」

月明かりに彩りを覚え、夜風に踊るチューリップ畑。

その傍らに、イグノは身体を丸めた。  
かたわ

そよぐ花卉を見て、彼は何かを数えている。

「三十八つか。小娘では到底、殺せる数ではない」

「毒を盛ったの。食事の際にね」

「ほう？　して、どのような」

それには何も答えず、イウは家屋の傍にある倉庫からバケツを持ち出し、湖の水を汲む。

（無口、か。あの人数を殺すなど、毒を放るだけでは不可能だ。何を隠している…………？）

それを家の前に運んでいる姿を見て、イグノはイウを問い質した。  
「さつきから、何をしている。風呂でも沸かすのか？」

「違うよ。鍛冶をするの」

「あんつ？　家事だと…………掃除でもするのか」

「そつちじゃないよ。トンカチ持って、金属を叩くほうつ」

イウは返り血にまみれた外套を投げ捨てた。

着ていた上着とティーシャツを脱ぎ、家屋の扉のノブに引っかけ

ておく。

「んんつと」

イウは倉庫から鍛冶道具一式の入った木箱と、素材を詰め込んだ木箱を引きずり出した。

それから木造の椅子に腰かけて、イウは作業工程を頭の中で組み立てる。

「サラシに、綾織綿布あやおりめんぷの脚覆あしおおいだけか」

「デニムとか、ジーンズって言うの。このズボンに使われている生地も、この島が生み出した名産品だよ」

口にゴムを啜えて、後ろ髪を両手で束ねるイウ。

「ふうむ。いろいろと進んでおるのだな。小僧とかもそれを身につけておったから、流行しているのか」

「……………」

急に無言になるイウ。

髪を留め終えて、イウは唇を噛み締めていた。

「小娘、お前……………」

興味津々な様子で、じい〜つとイウのほうを見ているイグノ。

「なっ、なにっ。もう作業始めたいから、集中を邪魔しないで」

「いいや、意外に色気があるなと思ったんだ」

「え……………」

な、なにいつてるの？

この筋肉質の腕を見て、イグノは冷やかしたのかな。

同年代の女の子と比べたら、胸もないし。

細腕というには、ちよつと太いかもしれないけどさ。

「不満そうだな。無駄な肉がなく、しなやかで美しいと感じたんだ。勘違いはするなよ」

お世辞なのか、本気なのか。

イグノと接した時間が少ないため、イウにはどちらなのか解らない。

あんまりうれしくない。これがイウの本音だったりする。



「ちなみに年齢はいくつだ？」

「十三才です！ もう、静かにしててよ」

それだけ聞けて満足したのか、イグノは大きなあくびをする。

（ようやく、年頃の少女らしさが出たか。城での冷血娘の一面は、何だったのだ……？）

ふと、あることに気づいたイグノ。

「フツ。それ以前に、道具が足らんぞ。鍛冶といえは炉ろだろう？ 火を起こすものがなくてどうする」

「ごもつともな指摘。」

「あるじゃない。目の前に」

それを受けたイウは、イグノを見て平然と言つてのける。

「……………」

その発言の意味を理解したのか、イグノの目が細くなった。

トンカチや鉄敷かなしき 熱した金属を鍛えるための台、ハンドル回転

式の砥石、紙と棒のヤスリ、火を風で育むためのふいごなど。

石炭と水は、木箱にいくらでもある。

炉と型がないぐらいだ。

「儂に火を焚き続けるといふか」

「ダメか。やっぱり。」

イウはどの位置に道具を配置すればいいかを確認し、代用品の完成を急ぐべく立ち上がる。

「そうは言つてないよ。レンガを積むから、ちょっと待つてて」

倉庫からレンガを取り出して、イウは簡易の暖炉を作つていく。

その最中、イウの心には様々な感情が交錯していた。

「ふむ」

「これで、よかつたの？」

後悔は、していないよ。

あるとするなら、そうしなければならぬ自分の運命を、ただ嫌悪するだけだ。

「土塊ニンジンだけでなく、黒ピーナッツまで貯蔵しているのか」

「つちくれ、にんじん？」

「あつ、レンガのことかな。」

「となると、黒ピーナッツは石炭？」

「そう、だね。」

「レンガの簡易炉を作り終えて、イウはその中に小さな壺を入れて置く。」

「火打石を手にして、何か燃えるものはないかイウが探していると種火くらいなら、提供してやろう。それを保持する器具はないのか」

「イグノが見兼ねて、イウの手伝いを買って出た。」

「あ、ありがとう。ちょっと待ってて」

「火打石をジーンズのポケットに突っ込んで倉庫に戻り、イウはそこからちようちんを持ち出した。」

「むう。加減が難しいのを持ってきおったか」

「う、ごめん」

「別に構わんさ。前に出してみろ」

「言われた通りに、イウはイグノの眼前にちようちんを置く。」

「イグノは軽く火を吹いて、中のろうそくに種火をもたらした。」

「につこりと微笑んで、イウはイグノに頭を下げる。」

「ところで、何を作る気だ？」

「ちようちんを持ち、イウはイグノから離れて椅子に腰を下ろす。」

「ナイフだよ。それも二本ね」

「それを炉の脇に置いて、小さな木箱にイウは手を伸ばした。」

「小娘が？ 本当にできるのか」

「バカにしないで。ほら、これで作るんだよ」

「その中から、イウは赤と紫の輝きを帯びた鉱物を取り出した。」

「それらを一見し、目の色を変えるイグノ。」

「火と氷の魔法金属か。名は、グリアンド鋼にフィナンス銀といったな。加工が難しいのではないか？」

「グリアンド鋼とは、赤みがかつた金属の一種。」

鋼鉄に匹敵する硬度を誇りながら、けして酸化しない、錆とは縁遠い特異な魔法金属。

大気中の酸素に大量接触させる事で火をも起こし、炎をまとう武器を鍛造できると期待されていた。

しかし、発火現象が使用者に害を与える上に、また採掘量が少なく希少価値が高い。

それゆえに、加工に踏み出す勇氣を持つ者がいなかったらしい。フィナンス銀とは、紫の輝きを帯びた金属の一種。

これに付着する霜が銀と誤解を招いたという、少し変わった逸話を持つ魔法金属。

大気中の水分を凍らせ、また酸素と水素を結合させ、水を生み出す力も持つ。

ただ、氷結現象が使用者に危険をもたらし、また火や熱に弱いという性質もあるため、取り扱いが非常に難しい。

多くの金属細工師を悩ませたという資料だけが残されている。

「知ってるんだ、イグノはこのふたつの希少金属を」

「当たり前だ。儂ら竜族は、人間より長く生きておる」

「そうでもないよ。ただ、その……ね」

「歯切れが悪いな。何が言いたいのか、ハッキリと申せ」

「あつ、ごめん」

イウは不安に駆られて、本題を切り出せずにいた。

まごまごとしているイウを見兼ねたのか、イグノのほうから声をかける。

「魔法金属だが、それは時間をかけて削ったな？」

イウの脇にある小瓶の粉末を見て、イグノは目を丸くしていた。

「うん。紙ヤスリだね。後はトンカチで叩いて、ナイフの刀身を作るだけなの」

「だが、魔法金属はな。それだけで、国ひとつを買い取るほどの貴重なものだぞ」

「この島国フォジスには昔、魔導物質の鉱脈があったんだよ。それ

の、残り」

「まさかと思うが、小娘が買ったのか？」

「違うよ。パパの、宝物」

いい加減、切り出さないと。

ここでモタモタしてても、何も始まらないんだからっ。

「形見、か」

にらむようにイグノを見つめて、勇気を出してイウは口にした。

「イグノ、お願いがあるの。鱗を二枚、私にちょうだい」

肌を刺激する、痛みとは違う何か。

イグノが放つ、殺気だ。

「……………」

イウは唾を飲む。

呼吸をするのを忘れてしまうほどの、緊張感。

「ぐ、ぐぐ。う、ふうっ。えっとね、グリアードとフィナンスは、

普通のトンカチで叩いてもダメなの。先に工具が壊れちゃうからさ。

その、竜の鱗なら、魔法金属が放つ魔力に耐えられると思うの。そ

の上からトンカチを叩けば、きつと」

「……………」

「ね、ねえ。イグノ、私を信じて」

「……………」

イウが言葉を発するたびに、イグノの目が充血していく。

「もうっ！ イグノ、何か言っつてよ！」

「……………。何か」

その発言の後、イグノの顔がほころんだ。

「どうした？ 何か言えと……………だから、何かと言っただぞ。返し

はないのか」

あっけに取られて、返事をするのを忘れてるイウ。

「やれやれ、鱗を二枚か。ほれ、好きなところ剥ぐがよい」

「えっ、い、いい……………の？」

「お前の父、ノロハへの恩返しだと思えばいいだけの話だ」

「おん、がえし？ イグノ、私のパパについて何か知ってるの？」  
「フツ。作業に集中したいんじゃないのか」

話をはぐらかされて、イウはがっくりと肩を落とす。

溜息をつきながらイウは果物ナイフを手にし、それを鞘から抜いてイグノに接近する。

「それで、どのような形が欲しいんだ？」

「細長い」

「それだったら、翼のほうだ。ただし、二枚だけだぞ。それ以上はやらん」

「飛行に支障でも来たすの？」

「儂も……人間で換算すれば、五十代前半ぐらいだ。体力も衰えているし、鱗を剥がれて風がそこに当たると神経が過敏でな。まあ、心配はするな」

間違つて肉を切らないように、慎重に鱗を剥いでゆくイウ。

イグノの鱗はとつても分厚く、そして重い。

藍色の鈍い光沢は渋みもあって、それを間近で見たイウは息を飲んだ。

「イグノ、平気？」

「……………」

イグノは半目で遠くをじっと見つめ、呼吸を整えている。

うんともすんともないので、痛いのかどうかは解らない。

とりあえず優しくを意識して、イウはイグノから鱗をちようだいした。

## 第2話

アルセスとオルは崖を下り終えて、河川沿いに森の中を歩いていった。

虫と鳥の音が響いており、草花の香りが充満している。

地面は川の近くということもあってか、ぬかるんでいた。

ふたりは滑って転ばないように、近くにある樹木に手をつくなどして、注意を払っている。

「あ、あの。アルセスさん」

「なんだ？」

「今更ですけど。俺の話、信じてくれるんですか？」

「半信半疑だ」

肩をすくめ、アルセスはオルの足下を見た。

転ばないようにと、目で伝えている。

「そ、そんな」

「勘違いすんな。オレはただ、ドラゴンだけでは城にいる人間を全員殺すのは不可能だと思っっているんだよ」

「えっ？」

「単純に考えてみる。ドラゴンほどの体躯たいくで、中庭以外の隙間に隠れている人間を捉え、殺害するなんてな。もうひとりぐらい共犯がないと成り立たない。ひとりでも取り逃がすか、長い時間をかければ、さすがに城下にも感づかれる」

アルセスの推測を耳にし、オルはこう意見した。

「イウが、城の皆を……」

「無理だな」

「ど、どうしてそう言いきれるんですか」

「姫とて、女だ。男とまともにもやりあう力はない。殺害できたとしても、不意撃ちで男をひとりぐらいたろう。オレが知る限りでは、あの城には数十人の戦士がいた。全員を始末できるとは思えない。

後な？ 中庭でドラゴンがいくら暴れたとしても、建物内であることを考えたら不利も承知のはず。人語を話せるほど知能のあるドラゴンが、自決以外の目的で城に長居する理由も解らない」  
「正攻法ではそうでしょうか？ 他にも、全員を殺す方法があるとするなら」

オルの言葉に足を止めて、アルセスは腕を組んで考える。

しばらくして腕をほどき、隣に立ち尽くすオルにこう聞いた。

「毒だつて言いたいのか？」

「そうじゃないでしょうか」

「それも無理だな」

「な、なんで」

「よくよく考えてみる。誰がいつ飲み食いするかも解らないのに、ちゃんと調理するヤツがいるのに、隙を見て毒なんか放れるか。味見された時点でアウトだしな。まあ、オルが何も飲食してないのなら、可能性はあるから少しは納得できるんだがよ」

「う」

「その様子だと、お前も何か食ったな」

うなだれてしまうオル。

考えが浅はかだったと、反省していた。

「まあ、考えるのはいいことだ。ただ、考えすぎるのもよくないぜ。現場見てないからどうにも言えんが、まあオルのことは信じてやん」  
「よ」

「そ、そうですか」

ふたりは再び、森の中を歩き始めた。

「お、見えてきたぞ」

森を抜けた先には、城下町を取り囲む石壁せきへきがあった。

石造りの門があり、そこは木の柵で通行を制限されている。

その先には、家屋からもれる明かりがいくつか確認できた。

「ひい、はあっ」

ずっと歩き通しだったので、オルは疲弊ひへいしている。

「もう少し歩けるか？ 近くに馴染みの店があるんだ。そこで休もう」

「は、はいっ」

膝に手をつき、肩で息をしているオルに比べて。

アルセスは汗ひとつもかかずに、常に周りを警戒して歩いている。「と、その前に。それをシャツん中にしまっとけ。下手な騒ぎが起きるのは好ましくない」

言われたままに首飾りをシャツの内側に隠して、オルはアルセスについていく。

「鍵は、と」

アルセスは木の柵に取りつけられた金属の錠じょうを、鍵で外した。

それを開け放ち、オルを手招きする。

「すみません。足手まといで」

「そうでもないさ。背中を守ってくれて、あんがとよ」  
礼を言われて、オルは照れ臭くて頭をかく。

「うし」

柵を閉めて、施錠しじょうする。

石造りの門をようやく潜り抜け、ふたりは城下町に足を踏み入れた。

「おやあ？」

その時、ふたりはある女の子に呼びかけられる。

「フィアリウ、か」

アルセスは声がしたほうに向き、左手で髪の毛をいじっている。白衣を着た小さな女の子が、ふたりに駆け寄った。

「あ、フィアリウちゃん」

幼なじみの女の子を見つけて、オルは微笑む。

「ん？ ああ、オル君だね。どうしたの？ 左頬に、切り傷があるけど」



「そ、それは……」

オルは手で左頬を押さえて、ふたりに背を向けた。

「見せてみなよ。バイキンが入ったら、危ないからさ」

いつも持ち歩いている救急箱を片手に、フィアリウは背伸びをする。

「背が伸びたねえ。届かないよ〜」

「あ、ご、ごめん」

オルは膝をついて、フィアリウに左頬を見せた。

「これぐらいなら、消毒してバンソウコウ貼ってるだけでよさそうだね」

それに消毒薬を塗布して、フィアリウはオルの左頬にバンソウコウを貼った。

「あいた」

「あ、染みる？ がまんなすって」

陽気に笑いながら、フィアリウはオルから離れた。

「いつも大人にやってる、回復魔法で治してくればいいのに」

「できないよ。ボクは子どもの成長力を壊したくないんだ。回復魔法は治癒を促進するけど、それは細胞の再生を早めているだけだから。老化を進めるだけだよ。自然治癒でじっくり治すのが一番」

えっへんと胸を張るフィアリウ。

「理屈は分からないよ。でもまあ、ありがとね」

「どーいたしまして。さて、ボクはどんちゃん騒ぎでケガしてる人がいないか。探してくるね」

それを聞いて、アルセスは大きな溜息をついた。

「ま〜だ、酒飲んで騒いでるのがいたのか。じゃ、そいつらのこと頼むわ」

「う〜い」

アルセスとオルに見送られて、フィアリウは夜の城下町を駆け抜けていった。

「ここだここだ」

アルセスはオルを酒場に招き入れる。

「おっ、アルセスの旦那だんな」

「ういゝつす。済まねえがマスター、ふたり分の軽食を頼む」

「んっ？ おや、息子さんかい？」

「オレがいつ、嫁もらったんだ」

「あっははははっ。ジョークだよ、ジョーク」

「あつははははっ。ジョークだよ、ジョーク」  
恰幅かつぶくのいい酒場の主人はオルを見やり、何か納得してうなづいていた。

「オル。奥のほうに座っててくれ」

「あつ、はい」

店内を見て、オルは思い出す。

父親のトルガも、この常連だったなど。

「他に客はいないんだな」

カウンター越しにマスターと話し込むアルセス。

「つたりめえだ。今何時だと思ってるやがる」

「とか言いながら、店開いてんのはどこのどいつだ」

「へっ。ここにいろんないらるう？」

自分を指差して、得意げに調理している酒場のマスター。

「アルセスの旦那。その子を連れて、夜回りしてたんですかい？」

「わざと言ってるだろ？ ウェドス」

「あはは。分かってますよ。そちらのお子さんが、トルガさんの子息だということは」

驚いたオルだが、とりあえずマスターに会釈えしゃくする。

「ネスカディ一家は城のほうで宴に参加しているはずですが、お子さんだけ早めに帰宅したんですかい？」

酒場のマスター、ウェドスはオルにそんなことを訊たずねる。

「い、いえ。その……」

オルが何か言う前に、アルセスは片手を背中にやり、人差し指を

立てた。

それを見て、オルは口を結ぶ。

「トルガに言われて、オレが迎えに行つたんだよ」

「おお。そうですね。山道は土砂崩れが起きて、通行不可になっておられるはずですが」

「地下通路だよ。つたく、今日はしつけいな」

「ははは。まあ、積もる話は後で。先にこちらをどうぞ」

「お。飯か」

アルセスはそれが乗った小皿ふたつを受け取り、オルのいる席へと持ってくる。

「は、ハンバーガーですか？」

「なんだ。嫌か？」

「いえ、その」

正直、肉を食べたくない。これがオルの本音だったりする。

「ああ、そういうことか」

「え？」

「いや。オレの配慮が足らなかつた。すまん」

「い、いえ。別にアルセスさんが悪いわけでは」

「そつか。まあ、とりあえず食おうや。腹が減っては、何とやらだ」  
ふたり同時に手を合わせて。

「「いただきます」」

の音頭を取った。

「おお。やつぱうめえな」

アルセスはうれしそうにハンバーガーを頬張っている。

「はむ」

オルもそれを手に取り、一口いただく。

「野菜たっぷりですね」

パンの間にシャキシャキレタスと厚めのパテ、トマトもサンドさ  
れていた。

ソースとしてサウザンドレッシングがかけてあり、トマトの酸味

とドレッシングのほのかな甘みがマッチしている。

城下町では、これを食べないと一日が始まらないという人さえいるほど。

それほど人気のあるハンバーガーだ。

「アルセスの旦那がこのドレッシングの発案者だからな。サービスとして、タダにしといてあげよう」

「ウソつけ。在庫処分だろ、これ。作り方がていねいすぎるぞ」

「おっと、旦那の舌は小細工を仕掛けてもごまかせないか」  
手を額に当てて、困ったように笑う主人。

「まあ、ちよつと賞味期限過ぎてても文句はねえけどな。それに、そのドレッシングはオレの知り合いの女の子がレシピを教えてくれたんだ」

「それは初耳だな。つまり旦那は、その子の許可を取らずにパクったのかい？」

「人聞き悪いぞ。ちゃんと許可は取りつけてある」

「そうか。それならいいんだが」

腕を組んで、ウエドスはアルセスをじっと見つめる。

「疑いの眼差しで、オレのほうを見んな」

「いや、少し血の二オイがしたもんでね。よく見れば、ネスカディんとこのお子さんが、服に血を残しているときてる」

「そこは見逃せ。他に客がいれば逃げようがなくて説明するんだが、生憎ガラガラだ。運の悪さを呪ってくれ」

「建国記念日で常連さんは今頃、ここじゃないところで飲み会して酒さけ浸りびたなんだよ。売上げは上々だとしても、新王のせいで城下も活気がなくなっているときた。迷惑な話だぜ。書き入れ時なのによ」  
ウエドスはコーヒーを注いだカップをふたつ用意し、席に持ってきた。

「オレは酒のほうがいいんだけどな」

「酒おほに溺れる大人つてもんは、子供にゃあ見せちゃいけねえよ」

「反面教師だ。そういう理由で、許してもらいてえな」

「いかんいかん。いくら旦那でも、事情を説明しないで酒をもらおうなぎ、百年早いぞ」

ふたりが駆け引きしているのを見て、オルは困惑している。

「ところで、今何時だ？」

ウエドスはカウンターのほうに戻り、時計を見た。

「ゼンマイ時計だと、午前三時半だ。それよりこんな夜遅くまで、何をしていたんだ？」

「しつげえな」

「話してくれるまで、酒は出さないしサービスもしないぞ。お代は、通常価格で払ってもらうからな」

「ちつ。この店に」

「私と君たち以外、いないぞ。存分に話してくれたまえ」

アルセスのほうが先に折れた。

「解った。じゃあ、肴さかなに枝豆をくれ」

「代金は別だぞ」

「話を聞いたら、その台詞を撤回する羽目になるさ」

「ほう？ それは楽しみだ」

アルセスは周囲を確認して、食べかけのハンバーガーを小皿に置いてから。

オルから聞いた情報を、ウエドスに簡潔に話した。

ただし、イウと飛竜の事は伏せている。

「そ、それは……ホントか？」

「オルから聞いたのがほとんどだが、オレも直接現場は見てきている。信憑性しんぴんせうはあるぜ」

「犯人は誰か、分からないのかね？ オル」

ハンバーガーを平らげ、アルセスは腕を組んだ。

椅子の背もたれに体重をかけながら、その体勢でウエドスの顔をうかがっている。

堂々と嘘をついているアルセスを見て、オルも口裏を合わせた。

「は、はい。俺は、その現場から命からがら逃げてきましたから。」

誰かまでは……」

ウエドスはふたりの証言を耳にして、顔を青くして身震いした。

「少なからず、この件はしばらく黙っといてくれないか。内情的に、今それが表沙汰おもてみになったら危うい」

「あ、ああ。この情報はしばらく秘匿ひかくしておこう」

「いずれにせよ、露見ろけんはするだろう。まだ宴で馬鹿騒ぎしていると伝えれば、数日は城のほうには誰も踏み込まないだろうな。左遷されるか、島外追放があると恐れるからね」

アルセスはウエドスの表情を見ながら、冷静に意見を述べた。

「それよりも、いつものを用意してくれ」

ウエドスはその注文を受け、ハツとなる。

「これは公にしたくないんでな。これ以上は詮索なり、文句を言わないでくれよ」

「あいよ。旦那も飲みたい気分は分かるが、ほどほどにしろ」

ウエドスは苦笑いでグラスを用意し、それに酒を注いでアルセスに届ける。

「そういうもんじゃないさ」

それを一気飲みして、アルセスは。

「この国も終わりが近いのかなと思うと、感慨かんがい深くてな」

「おいおい、冗談はよせ。王がないのなら、アルセスの旦那が引き継げばいいだろう」

「オレは王つて器じゃない。だから、王位継承を拒んだんだ」

おかわりを要求するアルセスだが、ウエドスは首を左右に振る。

「旦那が王になると言えば、注ついでもいいぞ」

王位、か。

イウが生きていることが明らかになれば、自然と継承権はイウのものになる。

させるもんか。

オルの心の中で、憎しみの炎が灯った。

「それは勘弁かんべん」

乱暴にグラスを置き、アルセスは軽く伸びをする。

「ところで、枝豆」

「酒を飲み干しといて、つまみが必要かい？　おすすめに鶏とりのからあげとかあるんだが」

それを聞いた途端、アルセスの表情が曇る。

「おっと、旦那は鶏肉が苦手だったんだな」

ウエドスは額に手を当て、ジト目で抗議するアルセスに酒を注いでいた。

カウンターに戻って枝豆を確保し、それを出してご機嫌をうかがっている。

「んっ。それともうひとつあるんだが、オルに風呂を頼めないか」  
アルセスはオルを一瞥いちへつして、ウエドスにそう頼んだ。

「ウチは宿じゃないんだ　と言いたいところだが、事情が事情だ。  
喜んでお受けしよう」

「服のほうはおれがやんよ。その見てくれで出歩かれたら、こちらも説明に奔走ほんそうするので手一杯になる。落城の一件を調査するに当たって、マスターも一枚噛んでもらうぜ」

「ふっ。やはり敵かたわないな、旦那には」

「言うな。ウエドス、しばらくオルを頼むぜ」

グラスの酒を一気に飲み干して、アルセスは席を立つ。

枝豆をひとつつまみ、それを口に咥えている。

「オル、実家に失礼させてもらうが。いいよな？」

アルセスはオルの瞳を見つめながら、その許可を求めた。

「あっ、はい」

口元をほころばせて、ふたりに背を向けて歩き出したアルセスは「んっ。しばらく一息入れてな」

そんなつぶやいて、この場を後にした。

ウエドスの案内で、オルは脱衣所にいる。

「君も大変だったな。私はホットミルクでも用意しているから、ゆるりと」

「あ、ありがとうございます」

戸を閉めて、ウエドスは酒場のほうに戻った。

「これから先、どうなっちまうんだろうな」

不安を口にしながら、オルは上着の袖から腕を抜く。

次にシャツを脱ごうとするも、その中に隠していた角の首飾りに触れる。

イウ、か。

憎しみが、殺意が、湧いてくる。

ふと我に返り、オルはそれから手を放した。

「な、なんだったんだ」

冷や汗が、頬を伝う。

この角に触った瞬間、心が黒く染まりそうになった。

「ふう。さつさと汗を流そう」

オルがひとり言をつぶやいた、その直後。

「な、なんだお前はっ！ ひっ、う、うぎゃああああああああっ  
!？」

ウエドスの悲鳴。

オルは鞆に収まっている果物ナイフを片手に、脱衣所の戸を開けた。

「な、んだ？ 音が、しない」

不気味な静けさに、オルは身震いする。

「これは」

鼻につく、嫌な臭い。

散々嗅ぎ慣れたものに確信を得たオルは。

「ウエドスさん？」

酒場に繋がる扉を、ゆっくりと開けた。

「え？」

床にこぼれる、桃色の液体。

元を辿ると、カウンターから白いものと赤いものが滴り落ち、そ



れらが混じり合ったものだど解る。

「白いのは大きなボトルからもれる牛乳で、赤いほうは……。  
「なっ」

カウンターが両断されるほどの何かで、ウエドスが。

「し、死んでる……のか」

真ふたつに、斬り捨てられていた。

赤いのは血液だと知り、オルは息を飲んだ。

「まだ、近くに」

いるかもしれないと警戒し、オルは周りを見渡す。

ふと、入口のほうから足音がした。

「おい、ウエドスの旦那。また酒をくれ　って、なっ」

そこに、空のボトルを持った中年の男性が現れる。

彼は現場を目撃して目を丸くし、ハツとなってオルをにらんだ。

「お、おまえ……ウエドスの旦那を、ブツ殺しやがったのか！」

この惨状を見て、真っ先にオルが疑われた。

「ち、ちがう」

「おいっ、誰かいないのか！　クソガキが、ウエドスを　」

一刻も早く、ここから逃げないと。

オルは脱衣所のほうに戻り、扉を閉めた上で鍵をかける。

それから他に出口はないか探す。

「なんだ、酒場で何があった！」

「な、なんだこりゃ。うえ、ウエドスさん!？」

周りが騒々しくなっている。

早くここを離れないと　と、オルが思った矢先に。

「おい、誰だお前は！」

裏口から入った男性が、オルを発見した。

「お前か、お前が旦那を殺したんだな！」

血が染みた服装を見るなり、オルは犯人だと決めつけられる。

「そんな。くそっ」

言いわけのしようがないオルは、すかさず脱衣所に飛び込む。

戸を閉めて壁にかけてあったモップで、戸を開けられないように固定した。

「くそつ、何かで留めやがったな」

「力づくで開けるぞ。体当たりだ！」

オルは風呂場に入り、開け放たれた窓を見つめる。

物音で戸が壊されたと知り、慌てながらも狭い窓に頭から突っ込む。

「く、くそつ。早く、早く逃げないと……っ」

ジタバタと暴れていたら、いつの間にかオルは外に転落していた。

「あいたたたたっ」

すでにオルは、屈強な男達に囲まれていた。

「こいつ、よくも旦那を殺しやがったな！」

「ち、ちが　ぐあっ！」

オルは男達に取り押さえられた。

「おい、こいつどうする？」

「殺人犯として城で裁いてもらうのが筋だろう。けどよお、あそこはどんちゃん騒ぎしてるからなあ」

この人達は知らない。

すでに城が、落ちていくという事実。

「しょうがねえ。牢屋やうごにでも入れて、後で処分してもらうしかねえな」

「違うっ！　俺は、ウエドスさんを殺していない」

「だまれ、クソガキがあ！」

「うぐあっ」

靴で頭を押さえられ、こめかみをグリグリと踏みつけられるオル。だあれ〜が、クソガキだってゆ〜のさ？」

幼い女の子の声がして、男達は声がしたほうを見やった。

「ん？　お、フィアリウちゃん。こんな真夜中にどうしたんだ？」

オルはフィアリウを見つけ、目を見開いた。

「こんだけ騒いでれば、否が応でも起きるよ。で、この子はどうし

たの？」

フィアリウのほうは、オルだと解っていないながらも無視を決め込んでいた。

巻き込まれたくない、のか。

オルも、フィアリウに疑いがかからないように目をそらした。

「強盗ですよ。強盗。ウエドスの旦那が、殺されてたんだ」

「ふうん。で、ケガ人は？」

「いないようですぜ」

「そう。まあ、ボクは再びおやすみするよ」

女の子は冷たい目でオルを見つめ、背を向けてここを立ち去った。

「若いくせに、強盗をするなんざ。しばらく鉄格子の中で反省してな」

「アルセスさん……」

「寝言をほざいてないで、歩け」

何を言っても無駄と察して、オルはおとなしく連行されることにした。

これは十年前の出来事。

高原地帯にある森の奥深くで、ノロハとイグノがやりあっていた。

「ぬおりゃあああああああ！」

イグノが左腕を噛みちぎっても、ノロハは銀の大槌を右腕ひとつで振り回す。

出血は酷く、顔色も悪い。息も乱している。

それでも覇気は衰えず、イグノの火球をかい潜り、ノロハは銀槌を大きく振り被った。

「このおっ！」

「ぬはあああああ！？」

重い打撃を左からもらい、脳しんとうを起こして倒れるイグノ。

その攻撃で、左側の角が欠け落ちた。

『はあ……へえ、ぜえ……っ』

『と、どめ……を』

イグノの言いたい事を理解したのか、ノロハは手で制して口を開いた。

『名前、教えてくれねえか』

『な、んだと……』

『俺の名前は、ノロハってんだ。お前、お前の名前は……？』

『いぐ……の、だ』

『イグノ、か？俺はノロハってんだ。じゃあ、俺の左腕とこの角を交換だな』

『ま、てっ。決着が、ついておらぬぞ』

頭を左右に振り、イグノはふらつきながらも立ち上がる。

ダメージが脚に来ているようで、イグノはすぐに転んでしまった。

『引き分けた。悪いが、俺のほうが先に参っちまいそうだな……』

『白黒は、延期するとゆうか』

『そう、だな……でも名前は知れたんだ。また逢えるさ。きつとな』

……』

『ぐっ』

ノロハの背中を見送りながら、イグノは彼が無事にいるよう祈っていた。

一方その頃、イウとイグノはというと。

湖の集落で、鍛冶を続けていた。

イグノからもらった鱗の端に、イウは手動ドリルでいくつも穴を開けてゆく。

「手先が器用だな」

話しかけてくるイグノを無視して、イウは黙々と作業する。

鱗の強靱さに耐えられず、ドリルが折れてしまった。

予備の部品に交換して、イウは穴あけを続行する。

「無視、か。妖精の揺りかごと戯たわむれていよう」

チューリップの別名をイグノが知っていることに、目を丸くするイウ。

ダメダメっ。集中しないと。

鱗に開けた穴に針金を通して結び、ふたつの鱗を重ね合わせた。

熱した鉄などを挟はさんで持つ工具、やっとここで鱗の型をつまみ、それを石炭が燃えるレンガ炉に突っ込む。

熱した後で型を台に乗せ、ふたつの鱗の隙間をトンカチで叩いてなくしてゆく。

中にふうつと息を吹きかけて風穴に目を凝らし、そこを見つけたら熱して、徹底的に打つを繰り返す。

傍らにあるバケツに鱗の型を入れ、中の水で冷却する。

「ようやく、本命か」

その作業を終えて、イウはグリアンド鋼の塊を手にした。

バケツから引き上げた型に巻かれた針金をペンチで緩めて、グリアンドを中に詰め込む。

それをやっとここで挟んで持ち、レンガ炉に突っ込んだ。

「加減を、知っているのか」

魔法金属は普通の金属と異なり、従来の製法が通じないことがある。

また、加工時にその金属が帯びる属性バランスを壊してしまえば、物質そのものに亀裂が走る。

イウには、ぶつつけ本番で完成させる自信があった。

グリアンド鋼は火属性を持つので、通常より高い温度で熱すれば、その耐性を上回れるはず。

問題は、融点がまったく解らない事ぐらいだ。

そのへんは、勘でどうにかするしかない。

「よしっ」

充分に熱したと見なし、イウは鱗の型の上からトンカチを振るう。ガンガンと力強く叩いて、金属との会話を楽しむ。

「まだ、なんだね」

スコップで石炭をかき混ぜ、ふいごと竹筒で火をあおり、炉内の温度を高めていく。

「火力が足りぬのなら、吹くぞ？」

「うるさい。黙ってて」

流れる汗をぬぐわず、イウは型を炉に突き入れる。

熱したら引き抜いて台に乗せて、トンカチで打ち鳴らす。

これだ、見つけたよ。

いい具合に、トンカチがグリアンドとおしゃべりしている。

「くうっ」

柄にはめ込む茎の部分を形成するべく、イウは勢いよくトンカチを振り下ろした。

ごめんっ。

鱗越しではないから、トンカチが悲鳴を上げているのが分かるよ。もう少しなんだ。お願いだから耐えてっ。

「乱暴だな。しかし、汗を流す女子おなこも美しい」

トンカチが危ないと思ったイウは、それをバケツの中へ放り投げた。

バシャンとしぶきを上げ、水が熱され湯気を立たせる。

やっとここでつかんだ鱗の型を、イウは再び炉の中に入れた。

「替えの金槌かなづちなら、まだあるではないか」

イグノの声はイウには届かない。

彼女はそれほど集中していた。

「ふうっ」

イウは再びトンカチを握り締め、ナイフの刀身を打ち作るために型を叩き始めた。

ペンチで針金をきつく締めて、鱗と鱗の間隔をせばめてゆく。

溶岩でさえも溶かせないという、頑丈な竜の鱗。

これがあるから、創つくらなきゃいけない。

「せええええいっ！」

よつやつとグリアンドが柔軟性を持ち、鱗からはみ出してきた。ペンチで針金を締めようとしたら、針金が切れてしまう。

「あ」  
炉内の熱とグリアンドの発する魔力に、針金が耐えられなかったのだ。

「フツ。どうする？ 腕前を拝見させてもらおうぞ」  
他の針金がどうなのか、具合が知れない。

ふたつの鱗はまだ、そんなにズレていなかった。打った時にそうなってしまうえば、完成が遠のいてしまう。

そんなの気にしてたら、他の針金もプツンしちゃうね。開き直って、イウはトンカチを振るい出す。

「よしっ」  
やっとここで押さえて、イウはトンカチで鱗の型を力強く叩く。グリアンドが型に合わせて、変形してきた。

（純真さが、にじみ出ているな。これが、本当の小娘……か）  
イウの笑顔を見て、イグノは思わず微笑んでしまった。

それを見られていないことを確かめて、再びいかつい顔をする。  
「うん」

その手を止めて、イウはバケツの中にグリアンドを突っ込んだ。バケツの水は熱湯になっており、白い湯気が立ち込める。

それを取り出して台に置き、果物ナイフの刀身を型の間隙に突っ込んで、テコの原理を用いて鱗の型を剥がした。

「型から漏れたデコボコした部分は削り取って、それから研磨か？」  
「そうだね」

ナイフを鞘に収めながら、イウはそう答えた。  
金鋸かねのこで鱗から飛び出た部分を挽き切ってゆく。

途中で折れても刃を交換して、イウは根気よくその作業を続けた。それからヤスリをかけて、ていねいに刀身を形作る。

「あちゃ」  
ヤスリの粗目こまめが溶け出していた。

別なヤスリを手にし、イウは作業を進める。

「予備の道具は豊富だな。それだけ、これの完成を侘びていたか」  
ハンドル式の回転砥石を台の上に設置し、それからイウはバケツの湯を捨てた。

「お水お水」

バケツを片手に、イウは椅子から立ち上がった。

「ふうむ。鞘はどうする気だ？ 魔導具まどうぐで一番困るのが、収納する器具だと聞く。小娘、もはやそれすらも解決済みか」

あつ、忘れてた。

「フツ」

イウの表情を見て、イグノは愉快そうに笑う。

チューリップに吐息を吹きかけていたイグノは、微かな臭いを感じ取り、頭を動かさずに周りを見渡した。

「ん？ どうしたの、イグノ」

「……いいや。気にするな」

湖でバケツに水を汲んで、それを脇に置いてから、イウは椅子に腰を下ろした。

調理器具のおたまで水を砥石にかけて、イウはグリアンドを素手で持つ。

「んっ？ 火傷しないのか」

「グリアンドは通常時では温かいだけだよ。勢いよく振り回して大気に触れさせれば、高熱を発するの」

「ほっ」

イウは右手でハンドルを回し、グリアンドを砥石に触れさせて研いでゆく。

たまに水をかけて、砥石がすぐに壊れないよう配慮している。

「もうちよつとなんだ」

焦らずに、ね。

これほど扱いにくい金属は、加工も苦勞する。

小さい頃、パパの鍛冶を間近で見たり、指導してもらってよか



ったよ。

こうして、金属と談笑できるんだもの。

「これで、できあがったあ」

月が傾いて、朝日が差し込む頃にはグリアンドの刀身は完成していた。<sup>かたむ</sup>

「残りは、フィナンスか」

「そうだね。でもまだ、柄を付けてないよ」

「グリップは、すでに作成してあったのか」

ヤスリでグリアンドの茎を削り、イウは作っておいた柄にそれをはめ込む。

合うことを確認したら引き抜いて、小瓶のコルクを外す。

それから柄の中に、削ってる時に集めていたフィナンスの粉末を注ぎ入れた。

「冷却材だと？ 小娘。ただふたつの金属を、削っているだけではなかったのか」

目を白黒とさせているイグノを横目に、イウは微笑みながら次の工程に入る。

「どれどれ？」

イウは炉の中に放置しておいたもの 液体チタンがある壺を、

やっとここで引きずり出す。

「んんっ？ その光沢は。そのグリップ、何でできている」

「うん。フィナンス銀とチタンの合金、<sup>フリーズレット</sup>凍氷銀っていうの。もうひとつ、グリランド鋼とチタンの合金で<sup>フレイムレット</sup>焰炎鋼があるよ」

火と氷のナイフを作る際、まず第一に重視するべきなのは。

持つ部分、柄が刀身の魔力に耐えられなければならない。

無論、それを握る使い手も保護しなければ意味がないのだ。

「あ、新たな合金だと？ 小娘が自作したのか」

「そうだよ。それが、おかしいの？」

火と氷の魔力に耐え、かつ少女であるイウでも苦としない重量。

それと丈夫さを兼ね備えた軽金属、チタンはよく合金に活用され

る。

反対属性の粉末をそれに加えて、その耐性をより高めていた。これだけでは納得しなかったイウは、これらの柄を、いつか自身を収める金属に常時触れさせてどうなるかを観察していた。

結果、どちらの柄も腐食も酸化もしないことを知る。

(鍛冶の才能が、その年齢でここまで……フツ)

イウはやっとここで柄を押さええて、調理器具のおたまで液体チタンをすくう。

慎重に柄の中にそれを注ぎ入れ、すぐにグリアンドの刀身を詰め込んだ。

隙間なくはまったことを確かめた後、それをゆっくりバケツの中に入れて、水で冷却する。

「これで、後は削るだけだね」

「ひとつは、できあがりか」

問題は、これからだ。

フィナンスは氷を帯びている金属で、簡単な代物ではない。

「うーん」

「どうした？」

「ちよつと黙ってて」

フィナンスに通常の鍛冶が通用するかと問われれば、イウは理論的に不可能だと断定した。

下手に火を当て続けていたら、フィナンスの氷属性を破壊してしまつからだ。

「ふむ。その、グリアンドのナイフ。銘はどうする？」

湯気が立つバケツの中から、イウはその赤いナイフを取り出した。溢れて固まったチタンを、ヤスリでいねいに削ってゆく。

「炎鳥と氷狼<sup>フロンとフロン</sup>」。これが、私が手にしたい夢のひとつなの」

「すでに決めていたか。名付け親になれるかと思つたが、まあよしとしよう」

そのような逸話を昔あつたたと、懐かしんでいるイグノ。

イウは興奮しているイグノを見て、目を丸くしている。

「他にもまだ、夢があるような口振りだな」

「イグノ、静かにしてて」

ヤスリで削り終えたそれに、イウは滑り止めの包帯を巻いてゆく。  
(いい腕だ。液体にしたチタンとフィナンスの粉末で接着剤と冷却材の役割を満たすと同時に、柄とそれで手の火傷防止の保護を万全とする。限りある中で、よくできたものだ)

フランを右手で握った時、イウは手のしびれを自覚する。

「うっ」

思わず、フランを落としてしまった。

「あれだけ金槌で叩いていたんだ。女の細腕では、鍛冶はちときつ  
いだろう」

「うるさい」

弱々しい声で、イウは精一杯強がった。

長時間作業し、飲食もまともにしてないし、集中力も途切れてる。

まだ、私は眠れないのっ。

「まだやる気か？」

イウがにらむと、イグノはこれ以上の口出しはしなかった。  
まばたきを繰り返し、イグノはイウをじっと見守っている。

「急がなきゃ。間に合わないの」

(フツ、小娘め。急<sup>せ</sup>く事情を隠しておるようだが んっ?)

イグノが月を見上げて、首を湖とは反対のほうを向け、鼻をスン  
スンと鳴らしている。

「どう、したの」

「……………」

イグノは怪訝な顔をして、イウのほうに向き直った。

(このニオイ。やはりそうか)

確信を得たイグノは、イウから視線を外した。

「イグノ、あの」

「なんだ」

「さつき、何を嗅いでいたの？」

「作業に集中しろ」

「どうして、ごまかすの？」

そう思いながらイウは、フィナンス銀を加工するべく準備に入っ  
た。

一旦家の中に戻り、イウは自分の部屋からあるものを持ち出した。  
「むっ？ 何やら、甘いニオイがするな」

クッキーを詰め込んだ紙袋だ。

イグノは鼻を鳴らしながら、歩み寄るイウを見つめている。

「クッキーだよ。イグノも食べる？」

「いいや、甘いものはちと苦手だ。僕の胃袋は今、グリフィンの肉  
がたくわえられている」

言う割に物欲しそうなイグノを横目に、イウは一枚を口に頬張る。  
小麦粉にバター、卵やハチミツ、すったゴマなどを混ぜ、その生  
地は冷やして発酵させて。

充分に寝かしたら、食パンを作ったり、あまったらこうしてクッ  
キーを焼いたりする。

ハチミツにゴマと、栄養価のある材料ばかりだから、バカにはで  
きないおやつだ。

「もういつちまあい」

朝食としてクッキーを噛み砕き、イウはゴクンと飲み込んだ。

「悩んでいるのか？」

「えっ？」

「ふっ。すぐにフィナンス銀の加工を始めないのだからな。それぐ  
らいは察するぞ」

イグノの指摘を受け、イウは困惑した表情のまま椅子に座った。  
それから紙袋を脇に置いて、口を結ぶ。

通常より高温にするだけのグリアンド鋼より、フィナンス銀の加

工は一筋縄ではいかない。

フィナンス銀の予備がいくつもあれば、こうして往生もしない。とりあえずバケツに水を汲んで、炉に新しい石炭を入れ、イウは火をつける。

「よしっ」

火のナイフであるフランを握り締めて、準備はしたけれども。

イウは何をどうしたらいいのか解らず、腕を組んで考えている。

「え、と」

フィナンス銀に火を当て続ければ、組織が瓦解する恐れがある。

どのように加工すればいいのか。イウは確信を得られないままに、フィナンス銀の塊を手にした。

「小娘、その盆はなんだ？」

おたまでバケツの水をすくい、クツキーを焼くために使用するトレイに水を張る。

「フィナンス銀は氷属性を宿している。火に当てて熱し、ただ打つだけじゃダメ。水で冷やしながら作業しないと、壊れちゃうと思うんだ」

「だがそれでは、熱が水に吸収されて一度に金槌で打つ回数が減るぞ。余計に時間がかかる」

そうなんだよね。

何か、時間短縮のアイデアが浮かばないかなあ。

それに加えて、フィナンスの冷気を破壊しないような繊細さも求められる。

あー、もうっ。時間がないんだよおっ。

「炉から出るのが熱いし煙いぞ。風向きが変わったか」

頭を抱えていたイウは、そのイグノの何気ない一言で閃きを得た。

「それだ」

「んっ？ どうした、小娘」

「それだよっ！ ありがとう、イグノ！」

「??????」

イグノはイウの言っていることが理解できず、当惑していた。  
「ふふつ。見つけたよ。これなら、できる」

レンガ炉から立ち込める灰色の煙。

それには、熱が含まれている。

じかに火を当てるのではなく、何かを通して熱を伝える方法もあるのだ。

「鍋、鍋はないかな？」

「料理でもするの？」

「そうだよ。これからフィナンスを煮るの」

「……？」

イウの考えていることが読み取れず、イグノは口をあんぐりとさせる。

倉庫で適当な鍋を見つけたイウは、それをレンガ炉の脇に置いた。

「どっこいせ、と」

「フィナンス銀を食べる気か？ 小娘、正気を取り戻せ」

「私は正常ですっ！」

イウが怒鳴ると、そっぽを向いて静かになるイグノ。

炉の上に鍋を乗せるために、イウはバーベキュー用の金網を倉庫から持ち出す。

「よいしょ」

それをレンガ炉に置いて、鍋を上に乗せた。

その鍋にバケツとトレイの水を注ぎ入れる。

これで、ほとんどの下準備は終わった。

「煙、来ないでしょ？」

「むう。それは助かるのだが、小娘。何を策した？」

「フィナンス、頑張ってね」

無視されたことに、イグノは鼻息を出して不満をアピールする。

しかし、イウは気にも留めない。

「ぬ。小娘、もしや鍋で煮立てた状態で打つのか？」

鱗の型にフィナンス銀を収め、ペンチで針金を留めて固定した。

そうしてから鍋に放り込んで、イウはフランを手にする。  
「そうだよ」

自信満々に答えるイウに、イグノは言葉で食ってかかった。

「フツ。それでは、鍋の構造が邪魔して金槌では打てまい。それに熱湯だ。火傷をする恐れもあるぞ」

イグノの指摘はもつとも。

それでもイウの表情は崩れなかった。

「パンやクッキー、その作り方」

「んっ？ 謎かけのつもりか？ だが、甘菓子あまがしの作り方なんぞで、魔法金属が打てるはずはあるまい」

「違つよ。この場合はゴマをするのに使うモノかな」

「……？」

怪訝な面持ちで、イグノは首を傾げている。

金網を持ち出す際にジーンズのポケットにしまっていたそれを、イウは得意げにイグノに見せた。

「すりこぎ、この木の棒で打つの」

「なんだと？ 確かにそれなら、鍋の中にあるものを効率よく打てるだろう。しかし」

トンカチは振り下ろす際に、手を中心に円を描いた軌道となる。

これがあれば、真上から勢いよく力を伝えられるのだ。

「水はすぐに蒸発する。それでは熱が足りぬぞ」

それももう、解決済みだよ。

と言わんばかりに、人差し指を立てているイウ。

「無駄なものなんて、存在しないよ」

イウはフランで近くの草を焼き切りながら、加工する際に金鋸で削り取ったグリアンドの欠片を集める。

それらを鍋に投げ入れた。

「削り取って放置していたグリアンドの破片を、熱源として使うだと？」

「もつたないもん。それに、水を熱する材料としては申し分ない

し」

続けてイウは空になっているバケツを持ち上げ、倉庫を訪れる。地下に通じる床板を外し、そこにたくわえていた氷塊ひょうかいをトンカチと釘を用いて砕き、スコップで拾ってバケツに積んでゆく。

それと、ここに置いていた生地を外に持ち出した。

「氷、だと？ 近くに湖があるから、それで冷やしていたのか」

鍋の水が沸騰ふっとうを始めたので、イウはやっとここで鱗の型を取り出す。

「フツ。もしや、もう打つ気か？」

「そうじゃないよ」

ペンチで針金を緩め、中に入れてたフィナンスを取り出して、触れてみる。

ひんやりとしてるけど、微かに温かい。

フィナンスに帯びてた水気みずけが、少しずつ凍ってきている。

「ちよつともつたないけど、こうするしかないんだ」

イウは小瓶のコルクを外して、グリアンドの粉末を手の平に乗せた。

それを、地下で冷やしていた生地に含ませ、力強くこねる。

「その生地、もしや？」

地下でじつくりと発酵させていた、パンやクッキーの材料である生地。

グリアンドの粉末を練り込んだ生地でフィナンス銀を包み込み、そのまま鱗の型に閉じ込めた。

（なるほど。下準備として、フィナンスをお湯に浸けたのか。冷水だとすぐに凍る恐れがあったからな。それに加えて、グリアンドの粉末を練り込んだ生地で包む前に、フィナンスに霜を付着させる。そこまで、考えているのか）

感心しているイグノは邪魔をはいかんと、口を固く結んだ。

（外からは炉で、鍋の中はグリアンドの破片で水を煮たせ、鱗の型には火の粉末を練り込んだ生地でフィナンスを包む。多段的にして熱効率を上げているだけではない。隙間を生地で埋めて叩く力が逃



れないようにし、短時間で一気にフィナンスを熱するように講じている)

型を閉じる際に飛び出した生地を手でちぎって、それを終えたらペンチで針金を留める。

イウは深呼吸をし、口を開いた。

「後は、勇気だね」

湯気が立つ鍋の中に型を放り込んで、左手でやっところを握り、それを固定する。

(しかも湯の中で作業をする事で、生地の内側に霜を作る事で、フィナンスの冷気を極力放出しないよう配慮している。水と氷の属性は相性がいいからな。小娘、そのような発想を……今この場で、思いついたのか?)

熱が足りないと感じて、フランを振り回して大気に触れさせる。

刀身が燃え盛る発火状態にし、イウはそれを鍋に放り込んだ。

「ええいつ!」

一気に加熱したせいで水蒸気が起きるも、イウはすりこぎで型を叩き始める。

「せいっ! やあっ!」

その際に飛び散る熱湯が、イウの肌に火傷を負わせる。

「はあっ! えええいつ!」

思いきって何度も型を叩いた後、それをやっところで引き上げ、氷で一杯のバケツに突っ込んだ。

その熱によつて、氷が溶け始めている。

「急がないと。せえいつ!」

型を再び湯の中に入れ、作業を再開した。

「あっ」

感触が、あつた。

グリアンドの時と同じだ。

「見つけた、見つけたよっ!」

沸騰するお湯の中で、型をすりこぎで叩き続ける。

取り出して氷で急速に冷やし、またお湯の中に。

その工程を繰り返しながら、バケツの中の溶け水を鍋に注ぎ、空のバケツに再び氷を詰め込む。

せわしなく動き回って、イウはその完成を急ぐ。

（小娘、失敗を恐れていないな。未完成のままできているのを、一番恐れているようだ）

取り出した鱗の型を冷やした後、針金をきつく締めて、また鍋に放る。

「やああああっ！」

精魂込めた一撃が、鱗の型を突いた。

ふたつの鱗がぴったり閉じたと感触で察し、取り出してすぐさま氷で冷やす。

「ふうっ」

と、イウが安堵の溜息をついた時。

バゴンという、鈍い金属音がした。

「わっ」

鍋の底に亀裂が走り、熱湯がもれる。

それはレンガ炉の火を消してしまった。

「鍋自体が、高熱に耐えられなかったか。作業途中でそれが起きていたら、危うかったな」

「そ、そうだね」

イウは緊張の糸が切れてしまったらしく、よろけながらも椅子の近くで尻もちをついた。

脇にある紙袋を開けて、イウは中からクッキーを三枚取り出す。

「イグノ。食べる？」

「甘いものは苦手だと言ったはずだがな？ まあ、あれから時間も経ったしな。小腹が空いている。一枚ほどいただくでしょう」

「素直に欲しいって、言えばいいのに」

「むう。そうしたものは初めてなのでな。どういふものが解らないのだ」

「あ、そうなんだ」

イウはイグノに歩み寄り、舌先にクツキーを三枚乗せた。  
「あむ」

イグノはクツキーをザクザクと噛み砕いている。

「一枚だけだと言ったんだが、なかなか美味だな」

「でしょ？ まだ食べる？」

「うむ。もう三枚もらおうか」

イグノはクツキーを頬張り、満足げだ。

「もうよい」

「そっか。じゃあ」

イウはクツキーを一枚食べて、それから椅子に腰かけた。

「ん〜っ」

脇にある紙袋をきちんと閉めて、ペンチを手にするイウ。

それを用いて、型の針金を外そうとするも。

型に付着していた水分が、フィナンスの冷気で凍りついている。

おまけに生地が、外側は湿っており、中がこんがり焼き上がった。  
ていた。

そのせいで、フィナンスを型から取り出せなくなっている。

「お湯をかける。バケツの氷、フランで溶かせばいいだろう」

「あ、そ、そうだねっ」

完成間近だから、イウは焦っている。

イグノはそれを察して、助言をした。

「ゆっくりでもいいから、落ち着いてやらないと」

深呼吸しながら、イウはやっとここで壊れた鍋からフランを取り出し、それでバケツの氷を熱湯にする。

そこに型を入れて霜を溶かし、生地もやわらかくして、ていねいに取り除いてゆく。

後は金鋸で端を削り取って、ヤスリをかけ、お湯を浴びせながら砥石で仕上げるだけ。

グリアンドの粉末を柄に注ぎ入れて、液体チタンを。

「あ」

あることを思い出して、やっとこを手レンガ炉をのぞき込むイウ。

「どうした、小娘」

レンガ炉にある液体チタンの壺を引きずり出して、中身を確認する。

よかった、無事だ。

冷えて固体化しているだけなので、石炭を交換して点火しないと  
いけない。

「まだまだ、時間がかかりそうだな」

「だったら、手伝ってよう」

「ふむ。黒ピーナッツはもうないのか？」

「数が少ないの。石炭は、島の外から取り寄せてるから……」

「そうか。甘菓子にくれた礼だ。儂が火を提供しよう」

「あ、ありがとう。イグノ！」

その返事に大喜びのイウは、席を立ってイグノの鼻先に抱きつく。

「何か勘違いしておるようだが、儂は竜族だ。人間と馴れ合うつも

りはないのだ。次にそのような真似をすれば、腹の中に収めるぞ」

「っ」

その脅しに、イウはハツとなってたじろぐ。

「フツ。まあ、今はそのような気はない。儂が機嫌のいいうちに、

さっさと仕上げたほうがいいぞ。儂の気は、そう長くはないのでね」

朝日が顔を出してあたりを照らす頃に、ようやくフロンの刀身が  
完成した。

「やれやれ、長かったな」

「うん。ありがとね。イグノ」

イグノはチューリップに息を吹きかけて、イウと目を合わせるの  
を避けた。

「ドラゴンって、皆そうなの？ 愛想がないよね」

「……………」

「あ、ご、ごめん」

「構わんさ。人間と竜族の社会は違う。会話など後でいい。さっさと仕上げる」

「う、うん」

語気が荒くなったイグノを見て、イウはせつせと作業する。

柄に包帯を巻いて、ようやく火と氷のナイフができあがった。

「不穏な」

ふと、イグノが鼻をスンスンと鳴らしてる。

「イグノ、何か気になるの？」

「……………」

視線はイウのほうに向くも、イグノは質問に答えようとはしない。周りを見渡してから、イグノはイウを横目にこんなことを聞いた。

「ここでの用は済んだのか」

「え、ええ。これで、私も一人前に戦える武器が手に入った」

視界にイウを捉えて、イグノは舌なめずりをしながら問う。

「それで、次は城下町を滅ぼそうと言うか」

「…………… そうだね」

イグノは、イウの持つ火と氷のナイフ。フランとフロンに注目している。

そういえば、鞘がない。

そこでイウは鱗の型に着目し、それで鞘を作ろうと考えた。

「小娘」

「な、なに？」

「今更だが。このチューリップ。よく育てられているな」

イウはイグノが何を意図して、その話題を持ちかけたのか。

「誰かに送るため、か？」

すぐに、理解した。

「フツ。その様子だと、あの小僧に送るつもりで育てていたんだろ

「う？」

「だ、だから、なにっ？」

表情で読み取られ、動揺したイウ。

イグノへそう言った後、そっぽ向いて頬をふくらませた。

「いいから早く服を着る。城下町を襲撃するのだろうか？ 儂は、後手に回るつもりはない」

「……………」

イグノが何かを感知したと確信したイウは、無言でイグノの瞳を見つめている。

「朝早い段階なら、奇襲するにはまだ有利な点が多い。敵が目覚めて本調子になる前に、仕掛けるのではないのか」

「それは、ありだと思う。けど、私はフランとフロンをまだ試していないんだよ？」

「なら、すぐにでも実戦で試し切りをすればいい。城下町には、人が多くいるではないか」

イグノはいったい、ここで何を嗅ぎつけたというの。

血走っている目が、今すぐにでも戦いくさをしたいと語っている。

そんな衝動に駆り立てられているのかな。

「鞘が、できてないよ。後片付けもしてないし」

「ならすぐに、支度を整える。それまでは待っていてやろう」

不意に穏やかになって、イグノは首を伸ばして湖の水を飲み下している。

なんだったんだろう。

鼻で何かを嗅ぎ取ってから、急に様子がおかしくなった。

「どうした？ 儂の顔に何かついておるのか」

「う、ううん」

イウは椅子から立ち上がり、自分の部屋に戻り、別なシャツに袖を通した。

「バッグ、と」

他に必要なものといえば、荷物を収めるそれぐらい。

イウは革製の鞆かばんに、果物ナイフ、非常食となるクツキーの入った紙袋に、救急箱も詰め込んだ。

「よいしょっと」

それを肩から提さげて作業場に向かい、ドアノブに引っかけてた上着を着る。

「随分と早いな。鞆と作業場の片付けは、やらぬつもりか」

イグノを無視して、イウは作り置きしていた鞆なめしがわの鞆を木箱から取り出し、それにフランとフロンを収めた。

「鍛冶道具は放置するのかわ？」

鱗の型も鞆に放り込んで、イウは忘れ物はないか再度確認する。

「とりあえず、種火は消してあるし。火災の原因はないわ」

「そうか。なら、戦場におもむくでしょう」

その前に、イウはイグノの傍で咲き誇る花を眺めていた。

「むっ？ チューリップ、か」

口うるさいイグノの近くで屈み、イウは一番元気がありそうなのを探している。

「フッ」

イグノがじつと観察しているので、イウは何だか落ち着かない。

彼女が赤と紫のチューリップを摘み取ると。

「黄と白のは選ばないんだな」

ニヤリと、イグノが笑った。

「知ってて言ってる？」

「さあな」

そのごまかしに、イウはイグノに関心を持った。

「イグノ、ひとついいかな」

「なんだ？」

「愛って、なに？」

募る不安や後悔が、イウにその質問をさせたのかもしれない。

「いきなり哲学的な事を訊ねるんだな」

「イグノでも、答えられない？」

「見くびるな。儂とて、家族はいないが……人間の考えに、一石は投じられる」

目を閉じて考えた後で、イグノはおもむろに口を開いた。

「許す、それが愛だろう」

「ゆる、す？ どう、して？」

「側にいたり、触れ合ったり、それを許すか否かだ」

そう、なんだ。

オルは復讐すると言っていた。

それを思い出し、イウはその手にあるチューリップを強く握り締める。

「恋愛というのは、ひとりでは成り立たぬ。それは理解できるな」

「うん」

「いくら片方が努力したとしても、最高で半分しか育めぬのだ。愛というのは」

「はん、ぶん？ どうしてそう中途半端なの？」

「小娘とて、最初は片思いだろう？」

「そ、そうだね」

「なら、それを両想いにするにはどうしたらいい？」

「こ、告白したり、とか？ まずは相手に、自分の気持ちを知ってもらおうの」

「正解だ。そうして自分と相手の半分ずつの恋を合わせて、ようやくひとつの愛になるんだ」

イグノがロマンチストだと知り、イウは意外そうな顔をする。

「それをどのように育むのかは自由だが、それが永遠だとも言えない」

「永遠、じゃないの？」

「そうだな。いつか片方の恋を失ってしまうから愛が成り立たない。しかし実際、そういうのは愛とは呼ばぬのさ」

「愛とは、呼べない？」

「フツ。最初に許すだと、言ったではないか」



瞳を閉じて、イグノは深呼吸をしている。

目と口を両方同時に開いて、イグノはイウに続きを語った。

「くどいかもしれんが、愛というのは相手の全てを許す事だ。接吻

をしたり、抱き合ったり、たがいの相違を認めたり。そして、相手

が死ぬのを見送る事までを許すのが、真実に愛と言つものさ」

「し、死ぬのを……許す？」

「そうだ。愛した相手が死ぬのまで許せなければ、それは愛とは呼ばん。逆も然り」

きよとんとなっていたイウは、首を左右に振ってこう返す。

「難しくて分からないよ、私には」

「そうか。まあ、儂のような年寄りの言葉など……若い連中からしたら、戯言たわごとにしか聞こえんこともあるうて」

伏し目がちに、チューリップ畑を見つめているイウ。

「何を落ち込んでるか知らんが、戦場で慈悲など無用だ。非情に、冷酷になれ。あの城でやったように」

そんなイウを見て、イグノは自分らしい言葉で励ます。

反応がなかったのが気に入らなかつたらしく、イグノはイウをにらんで、こう宣告した。

「小娘。迷いがあるならば、ここにいてもよいぞ」

「いやっ！ 私は、私のなすべき事があるの」

「愚問ぐもんだったか。儂と小娘は、一蓮托生いちれんたくしょうか」

ほくそ笑むイグノを見て、どこかパパに似てるなあ。とイウは思う。

イタズラが大好きで、本気になると怖くて。

でも、最後は優しい。

「また、その背中に乗せてくれるの？」

「徒歩で行くつもりか？」

「違うよ。簡単には乗せないと、言つてたじゃない」

「フツ。そないなことをいちいち気にする年頃か？」

私がしている事は、間違っているのかな。

その背中に乗るのも、複雑な心境だった。  
また罪を、犯さなければならぬの？

でももう、私は後戻りできないんだ。

「小娘、儂からもうひとついいか？」

「えっ？ な、なにっ」

「乗り心地は、どうなのだ？」

イグノの背中に乗り込みながら、イウは素直に感想を述べる。

「ちょっとゴツゴツしてるけど、特に気になる点はないよ？」

「……そうか」

期待した答えではなかったらしく、イグノは落ち込んでる。

いったいどういふ返答をすればよかったのか。

イウには、皆目見当がつかなかった。

### 第3話

「なんでだよ……」

オルは城下町にある、地下の牢屋に放り込まれていた。

「くそっ」

ベッドに座って、それから格子窓を見上げた。

目線を下ろして鉄格子を確認するも、鍵がかかっている。

「はあ」

脱出は困難だと判断したオルは、横になって天井を見つめていた。

「ん？」

足音が聞こえる。

それに気がついて、オルは上体を起こした。

「よっ」

「あ、アルセスさん！」

ベッドから飛び起きて、オルは鉄格子をつかんで訴える。

「俺は無実なんです。アルセスさん、ここから出してくれませんか？」

「？」

「落ち着け。オレも詳しいことはまだ聞いてないんだが、ウエドス

が死んだのは本当か？」

「は、はい。俺が見た時には、すでにもう」

うつむいたオルを見て、アルセスは何か納得した様子。

渋い顔をしながら、アルセスは話を続ける。

「そうか。まあ、着替えを取りに行くついでに。城のほうを軽くの

ぞいてきたんだが、オル」

「え？ し、城のほうにも？」

「ああ。この町中にも、地下通路はあんのさ。そこを通って確かめ

ただだけだよ」

「は、はい」

「遺体なんて、どこにもなかったぞ」

「えっ？」

そんなバカなと、オルは鉄格子を揺り動かす。

「お、俺の父さんに母さん、ヒユが……」

「城をくまなく探したが、血痕はあれど骸はひとつもなかった。まあ、血の跡だけで何があつたかは推測できる。酒場のほうも見てきたが、あんな芸当、お前には無理だ」

「で、でしょう？ だったら」

「かといって、お前をここから出してやるこたあできねえ」

「な、なんで」

冷たくされて、オルは鉄格子から手を放す。

「オレは城下町の責任者なもんでね。疑惑が完全に晴れていない人間を、下手に外に出してはやれないのさ」

「あ、アルセスさんも、やっぱり俺を疑っているんですかあ!？」

「違う。オレがオルを信じていても、他のヤツの腹の中がどうなのかは知らないさ。少なくとも、お前を解放したら……オレにも、疑惑の眼差しを向けられるんだ。そんなぐらひは察してくれや」

「あ、そ、その」

「頭の血が下りたんならいい。しばらくここで頭を冷やしている。

「この看守にや、ついさつき話は通しておいた。オレの許可がない限り、オルには手出しするなと。妙な真似をしたら、ただじゃおかないとも釘を刺しておいた。安心して寝てな」

「あ、ありがとうございます」

「問題は、誰がやったか、だ。それが見出せない限り、オルの疑いは晴れない。まあ、ここにいるお前にはそいつあ探せないわな。面倒だが、地道に探してやんよ。トルガには、いろいろと恩義があつたからな」

そう言いながら、アルセスは背中に隠していた長剣をオルに見せた。

「……………」

「トルガの愛用していたもんだ。こいつあ、お前が引き継げ。鞘は

ちつと焦げついていたが、作りが頑丈でな。こいつあ、看守のところに預けておく」

手を伸ばそうとしたオルだったが、アルセスの表情を見て、息を飲んでそれを止めた。

深呼吸してから、アルセスはオルに質問をする。

「ところで、オル」

「はい？ まだ、何かあるんですか」

「姫が本当に生きていたとして、お前は姫をどうしたいんだ？」

「え……？」

「話を聞いた限りでは、姫が殺戮者のひとりだったんだろ？ 家族を奪われたお前は、姫をどう思っているんだ？」

アルセスの言葉を耳にして、オルはうつむいた。

「少なくともオレは、姫が残虐非道な真似をするとは思えない。それには何か、理由があるはずだ。まあ、オレも姫が刃を向けてきたら……容赦するつもりはないがね」

「っ」

オルの反応を見るなり、アルセスはある確信を得た。

「やっぱそうか。オル、お前は姫に恋情を抱いてんな？」

「ち、ちが……」

「聞くのは野暮やぼだったな。家族を奪った人間を前にして、恋だの愛だのぬかしている場合じゃないよな」

アルセスはオルに背を向けて、こう告げた。

「まあ、オレは姫が敵対しても、なるべく生け捕りにするからよ。安心しな。そうした後で、姫をどうするかはお前に任せる」

その背中を見送るしかできないオル。

「……………」

再びベッドに腰かけて、オルはシャツの中に隠してある角の首飾りを表に出した。

「俺は、俺は、イウをどうしたいんだ……？」

自分の両手を見つめて、オルは心の中で自問自答しようとした。

その矢先に。

「て、敵襲だあっ！ ドラゴンが、町を襲いに来たぞ！」

「総力戦だ。ドラゴンを撃ち落とすぞお！」

ドラゴンだって？

まさか……いや、もうそれしかないだろ。

「アルセスさん、無事だろうか」

ドラゴンと聞いて、オルはイウとイグノを思い浮かべていた。

「そう簡単に、この城下を落とせるもんか」

かつて城にいた精鋭たちがここにいる。

アルセスもいる以上、イウとイグノだけで城下町が落とせるはずはない。

「大砲を持ち出せえっ！ 矢も、<sup>いかり</sup> 錨もあるだけ出すんだ！」

しかし、オルの心には不安が募っていた。

上にある格子窓から差し込む、日の光を見て。

オルは無意識に、首飾りを握り締めていた。

「イウ王女、どうか」

俺は、イウがやられないように祈っているのか？

あいつは、人殺しだ。

けっして、許されない罪を犯したんだ。

父さん、母さん、妹。

家族を、殺したんだぞ？

なんで、なんでだよ。

俺は彼女の唇の温もりを、思い出しているんだ。

「わかんねえよ」

泣いてた理由は、なんだったのか。

もしイウが死んでしまったら、それが聞けなくなる。

好きだった人、憧れだった人、事故で死んだと思っていた人。

淡い恋心を抱いて、いつか触れ合いたいという望みは……オルにもあった。

しかし、昨晚オルの目の前に現れたイウは、もはや彼の知るイウ

ではなかった。

「復讐、か」

その一言をきっかけに、オルの心が黒く染まる。

「ふふ。あゝははははは！」

ゆっくりと立ち上がり、オルは鉄格子へと歩いていった。

……あの日の夜。

城の吹き抜けの中庭にいたイグノは、イウを目にする前に首を傾げていた。

『なんだ……？ 儂の届かぬところで、暗躍するのがおるか』

宴の最中に何者かに襲われたのか、周辺には赤黒いものが飛び散っている。

それはぶどう酒、血液、どちらも含まれていた。

『……儂の近くだけか？ 息があるのは』

イグノの近くにいる人間は、逃げられないように両足が潰されている。

周りを警戒するイグノだが、中庭以外に人の気配は感じられない。それに気づいて、イグノは溜息をつく。

『……………』

イグノをこの場に誘った、うるさいフクロウが上のほうで鳴いていた。

『おい。儂が来る前に、この城で何があった』

城のやぐらに止まっていたフクロウが、イグノのほうを向く。

『あなたはここで待っていていればいい』

『儂がおとなしく言うことを聞くとでも？』

満月を背にしたフクロウは、イグノを前にしても臆していなかった。

『逢いたくないのかい？ 銅色の外套を羽織った、銅色の盾をふたつ持つ女の子に』

『なんだとっ!?!』

怒鳴ったことに驚いたのか、フクロウは飛び去ってしまった。

『……………。なるほど』

この城中を包む、ぶどう酒と血の芳香。

どうやら、儂をはめたらしいな。

『先にやるだけやっておいて、その罪を儂に被せるとは。実に周到な』

『た、たすけ…………て』

イグノの眼前には、必死で廊下に逃げようとする騎士がひとり、ふたり。

『貴様、ここで何があった』

城主たる王は、血みどろで生きていた。

いいや。生かされていた、というべきか。

『たすけて、たすけてくれえっ!』

『証言すれば助けてやろう。何があった』

『ひっ! ど、ドラゴンが、ドラゴンが襲って来たぞあ!』

イグノはその人間に見切りをつけて、翼爪に引っかけて口に放り込んだ。

それから中庭で生き抗<sup>あひが</sup>う人間を、その脚で踏み潰し。

『儂も、潮時か』

そのような愚痴をこぼし、イグノは決戦は近いと覚悟を決めた。

空を飛翔するイグノの背に乗り、イウは冷たい風に身を震わせていた。

『どうした? 今更、恐れでも抱いたか』

違つと、イウは無言で首を振る。

しかしそれは、イグノには見えていない。

『すっごいね』

森と川を越え、城下町が見下ろせるところまでやってきた。



太陽が海の彼方から顔を出し、島全体を照らしている。

「小娘。まずはどこに火種を落とす」

イグノの首と自身の腰に巻きつけた革製のひもをつかんで、イウは身を屈めた。

「そうだね。とりあえず、人が出入りする城下町の門。主要な三つを破壊する」

声を張って、イウはイグノの耳へと意思を伝えた。

「なるほど。敵の位置を城下町だけに限定させるのか」

「港、山道、森林。大海、城、集落への道を閉ざす。イグノ、敵の退路を断つよ。いい？」

「承知した。舌を噛むなよ」

歯を食い縛り、ひもを強くつかむイウ。

垂直に急降下して、イグノは手始めに森林へ通じる石造りの門を踏みつけた。

両脚のしびれを感じて、その上に静止するイグノはこころもらす。「頑丈に造られているな。鉱物資源が豊富な、フォジスなだけはある」

半壊したアーチ門から飛び立ち、イグノは高度を上げつつ旋回しよつとするも。

「もういいよ。他を優先したい」

その一言で両翼をはためかせて、上昇していく。

「そうか。小娘には何か策があるようだしな」

「うん。これからは、手で叩く合図にしたがつてね」

「案ずるな。覚えている」

「次は、山道への門を完全に潰すよ」

翼を羽ばたかせて、イグノは半壊の門に見切りをつけた。

「飛ばすぞ」

ものの数秒で加速し、イグノの姿は肉眼で捉えるのは難しくなる。目標を確認して、イウは合図した。

「楽しみは、これからかあっ！」

山道の門へと火球を連続で吐き出し、イグノは飛び蹴りも見舞って、それを崩壊させた。

その破片は熱を持って赤く発光しており、あたりに白い煙が立ち込める。

警鐘が鳴り響き、イグノはその煙の中を通り、イウの合図にしたがって高度を上げた。

「どうした？ 恐れでもなしたか？」

「違うよ。今の城下町は、パパが王様だった頃の精鋭たちが集って守っているの」

「甘くは、見れないと？」

「うん。侮あなごっちゃダメ」

すでもう、弓兵きゅうへいが何人か目視できる。

地上にいる彼らは、イグノへと矢を撃ち込んでいたが 届かないと見るや、高台に移動し始め、再び狙いを定めている。

低い高度で飛べば、矢の雨にさらされるだろう。

「んん？」

スンスンと鼻を鳴らして、イグノは何かを捜していた。

(いるな、ここに。儂が捜し求めていたのが、ふたつも)

口元を歪ませて、イグノは眼下の獲物に目を凝らす。

(しかし、妙に酒くさいな。兵の動きもやや鈍いようだが)

「ど、どうしたの？ イグノ」

「フツ。小娘、次はどこだ」

「う、うん。港への門を破壊して」

「承知。小娘、儂のもうひとつの目となるのを感謝する！」

翼で大気を叩き、イグノは急加速する。

城下町を見下ろしながら飛翔するイグノは、イウの指示が的確であることを確信した。

人の流れは、明らかに海のほうに向かっている。その先には港があり、船があった。

「又ツハハハハハッ！」

飛び蹴りで門を崩した後、イグノは振り返りざまに火球を乱射する。

棧橋さんばしと木造の船舶せんぱくは、瞬く間に火の海に包まれた。

「これで退路は空以外になくなったな。さあ、この狩獵場しゅりょうばを翔かけようではないか！」

血眼のイグノは、よだれを垂らして興奮を抑えられない様子。

黒い吐息を繰り返し、翼をはためかせて停空ていくうし。

逃げ惑う人々を見下ろしながら、大きな咆哮ほうごうを轟とどろかせた。

高度を上げ、イウとイグノは城下町を一望する。

「大きなレタスだな。一つもらえば、地に伏すのが必然的。どうする、小娘」

地上から射出される砲弾を左右に飛んでかわし、イグノはさらに上昇した。

絶え間なく飛来するそれを見下ろし、イグノは嘆息たんそくする。

「目視で見える限り、七門だね。隠されたのもあるだろうけど、今は各個撃破しよう。その周辺に弓兵と砲手がいるだろうけど、極力無視して」

「姿をさらしている以上は、砲門が向くのを覚悟せねばならない。

僕は、そのようなりスクの高い攻撃はする気はないぞ」

「だいじょうぶ。一度、海に出て」

「ほう？ いいだろう。小娘の策を信じるぞ」

翼を羽ばたかせて、港を越して海の上を翔けるイグノ。

合図を出して急旋回させて、イウはイグノにこう告げた。

「海に向けて、火炎を吐いてちょうだい」

「なんだと？ 僕に無駄に紅蓮くれんを散らせとゆうか！」

「お願い。これは、私たちの姿をくりますために必要なの」

「フン。相解った。僕も能弁を垂れておる場合ではないしな」

港の近くにある灯台を目視し、イウはこうも言った。

「それからあの灯台を迂回して、そのまま直線で山のほうに全速力で翔けて」

「何か、する気だな？」

「ええ。山の近くに到達したら、転回して森と町を焼きながら、私を拾いに来てちょうだいね」

「承知した」

イグノは口から炎を吐きながら、海面を温めている。

白い湯気が、徐々に発生してくれた。

「なるほど。これを狙っておったか」

「高度を下げて、灯台へ。石壁で海面すれすれは見えないはずだよ」  
「うむ」

海面に触れそうなぐらいを意識して、イグノは低空飛行する。

（むっ。正面の太陽がちとまぶしいな。それを背後にする目的もあったか）

口を閉じて高度を上げつつ、灯台を過ぎて折り返してから、イグノは下降していく。

まず最初に目に入った大砲に向けて。

「あれだよ！」

イウは合図して、イグノに火球を撃つよう命じた。

「ブツハハハハハハハハアッ！」

「うああああああっ!？」

高速で降下しつつ放たれた火の玉は、見事に大砲一門を沈黙させた。

「じゃあ、またね」

「ああ、小娘」

イウは腰に巻いてあるひもをほどいてから、飛行するイグノの背から飛び降りた。

着地寸前で右手にフラン、左手にフロンを引き抜き、重ね合わせる。

火と氷の魔力による反応

水蒸気爆発が、着地の衝撃を緩和し

てくれた。

と同時に、イウの姿を隠してくれる。

「な、なんだあ!?!」

「て、敵だ。あの煙ん中に、誰かがいるぞお!」

近くにある火砲を指して、イウはフランとフロンを手首のスナップで振り回し、活性状態に移行させた。

「ごめんね」

「ひぎゃあああああああああああああ!」

白い霧に身を隠しながら、ぼんやりと映る影を頼りに騎士へと斬りかかる。

火傷と凍傷を与えて、ひとりずつ燃やしまたは凍らせていく。

白い霧を断続的に発生させてイウは、ただひたすらに砲台へと駆けていった。

「あのドラゴンから、少女が舞い降りてきたぞ!」

数でも力でも、イウのほうが不利。

私服の騎士達を相手に、長期戦は禁物。

イウにできるのは、霧に隠れてやる不意撃ちと一撃離脱ぐらいしかない。

「な、なんだありやあつ!?!」

「う、うわあああああつ!」

剣を振り回す騎士の懐に飛び込んで、ふたつのナイフの特性を活かしながら、ひとりひとりを無力化し。

時折、ふたつを合わせて水蒸気爆発を起こし、白い霧を維持する。

ただ、その爆発によるダメージが一番大きいのは、イウ自身だ。

「まだ、まだあつ!」

気力で踏ん張って、イウは大砲を指して駆け抜けていく。

「見つけた」

霧に潜みながらイウは、飛び去ったイグノに気を取られている砲手に接近できた。

「やああああああつ!」

「な、なにっ？」

フランで斬りかかるも、それは後退されてかわされる。しかし、その周囲に火の粉が散らばった。

「あ、危ないだろ！ 爆発したら、どうする気だっ！」  
男がイウを捕らえようと手を伸ばす。

すかさず屈んだイウは、フロンを地面に滑らせ。

「う、うわあああっ!？」

凍った氷面ひょうめんで砲手を転倒させた。

「い、いたぞ！」

「相手は女の子ひとりだ！ 力でなら勝るぞおっ！」

周辺を警戒していた騎士が、ここに集う前に。

「えええいつ。やああっ！」

砲身をフランとフロンで連続して叩き、熱と冷の反作用による爆発を引き起こして、破壊することに成功した。

「これで、ふたっ！」

その反動でよろけながらも、イウは薄い霧の中へ逃げようとしたが。

すでに私服騎士に取り囲まれていた。

「可愛い顔して、やるのがえげつねえな。覚悟しなあ！」

「いいから、さっさととっつかまえろっ！」

彼らより早く、イウに踏み込んだ者がいた。

「わっ」

「……やるな」

アルセスは刀を収めたままの鞘で、イウに殴りかかった。

かろうじて反応できたイウは、フランでその鞘を弾いて、アルセスから間合いを離す。

「アルセスさんだ。いけるぜ」

「よし。一気に追い詰めるぞ！」

「お前らは手を出すな！ この少女は、ノロハの娘だぞ！」

アルセスはイウを見据えたままで、そう叫んだ。



転ばされたイウは、鏢<sup>けし</sup>迫り合いをするオルとアルセスを見て、悔しそうに齒<sup>は</sup>噛みする。

「いいから。お前らもさっさとここから離れろ！ ドラゴンが来るぞお！」

アルセスは空をあおぎ見て、飛来する影を目視した。

「イウを、イウを殺すのは俺だあ！ お前らなんかに、邪魔なんかさせねええええっ！」

「ぐ」

よそ見したアルセスを突き飛ばし、オルはイウへと突撃する。

「きゃっ」

イウは目を閉じて、オルの刃をその身に受け入れようとした。

「な、なんだ……何をするんだよっ!？」

が、その刃は女の子によってつかまれ、止められた。

「いい加減にしなよ。君も、丸焦げになりたいのかい！」

フィアリウが、オルの凶刃を押さえていた。

彼女はオルを蹴飛ばしてアルセスに受け止めさせ、イウを一瞥した後で、手の平に癒しの光を紡いだ。

「まだまだ倒れるわけにはいかない。“リカバー”」

フィアリウは傷ついて倒れている騎士へと、暖かな光を降らせた。

「……………」

イウはオルに襲われたことにショックを受けて、涙をこぼしていた。

そのイウを目指して、紅蓮の大河が迫り来る。

「う、うわあああああっ」

「焼け死にたくなあああい」

遠方から、火炎を吐き散らしつつ飛来するイグノを目の当たりにし、騎士達はこの場から散っていく。

「……………ふっ」

命拾いをしたことに安堵しているのではなく。

まだ何も成し遂げていないことを思い出し、奮い立つイウ。



イウはフランとフロンを、急ごしらえの革の鞘に収めて立ち上がり。

「イグノおおおおおおおおおっ！」

右手を空に掲げて、思いきり跳躍した。

「あいよおおおっ！」

イグノは火を吐くのを止めて、咆哮しながらその姿を捉える。

「っ」

耳の痛みを我慢してイウは、イグノの左脚につかまり、上空へと逃れた。

城下町上空を離れてから、イウが落ちないようにイグノは速度を緩める。

「尻尾を伝って背中に戻れ。立ち直りが遅いと、狙い撃ちにされるぞ」

イウは差し出された尻尾に両腕で抱きついた。

それがむずかゆかったらしく、イグノはイウを軽々と持ち上げ、器用に飛行時の定位置に戻した。

「あ、ありがとう」

「フン。結果はどうだったのだ」

「ひとつ、破壊したよ」

手と腕に革製のひもを巻きつけながら、イウはそう報告した。

「フツ。レタス砲をひとつやったか。だが、もう白兵戦はできんな。今のは向こうが予期していなかったし、二番煎じが通用するほど甘い相手ではなからう」

うなづくしかできないイウ。

イグノはイウの様子がおかしいことに気づくも、特に追及はしなかった。

「さすがに、非戦ひせんの人間を長居はさせんだろうな。ククッ、いったいどこに逃げようというのだ？」

下を見て、避難を開始した人が大勢いる。

山道、森林、港。

いずれの道も断たれ、混乱する人々。騎士達は森林火災を食い止めようと、人員をそちらに割いている。

「小娘の策は、それなりに有効なようだ」

「私は、ここに住んでいるからね」

「フツ。そうだったな」

攻め込む場所が、故郷であるから。

イウはこの島国の弱点を、隅々まで熟知している。

「軋轢あつれきとはいえこの国は、敵が空から来る想定をしていないのか？」

「そうでもないよ。地対空攻撃の要かなめである、山と海を封じたんだ。

本来そこで用いるべき兵器を運び出せないから、手をこまねいているの」

「合点したぞ。門を破壊したのは、人の流れを制限するだけでなく、敵側が自由に攻撃できないよう……位置取りを制約するべく、か」

高度を上げて、イグノは大砲の射程外から逃れた。

「家屋に被弾しているぞ。よくまあ、己の領地を炸裂たがやレタスで耕せるものだ」

ふと、イウはあるものを見つけて、イグノに合図した。

「どうした？」

「早く、早く上に！」

イグノの眼前を、あるものが通過した。

「な、なにっ？ 鎖……？ いや、先端が、金属の塊だと？」

「射鉄槍アンカーだよ！ もう、その発射準備が終わってる」

「なんだと？ くっ、あんなものがかすったら無事では済まんぞ！ 急いで上へと飛翔する、イグノ。

もうひとつ、ふたりの下をアンカーが通り過ぎた。

「あの黒アスパラガス。民が姿を消してからは、住居が壊れても構わんように撃つんだな」

ふたりは灯台の近くへ飛び、金属の塊がどこから飛来するのか注

視している。

「この豪快な戦法。確かにノ口八に通じる部分はある」

「アンカーは、再発射に時間がかかるから。当たらなければ、問題はないよ」

「火攻めしておるからな。そう時間がかからず、ここは落ちるだらう」

ふたりは、油断していた。

「あんなものを受けようなら、たちまち大地との婚約が確定するな。転落死を、やんわりとした表現で言うイグノ。」

どこからか、風を切る音がする。

「え？ い、イグノ」

イウは背後を振り向き、日光に目を細めながらも、イグノに合図を送る。

「ん？ どうし　っ!？」

せめてイウに直撃はさせまいと、イグノが身体を反転させる。

「ぬうおおおおおおおおお！」

イグノの脇腹に、灯台の頂点から放たれたアンカーが命中してしまつた。

「きゃああああああああああああつ！」

ふたりが落ちるその先は、燃えている森林だつた。

激しく燃え盛る森林内に、イウは倒れていた。

「うっ………?」

私は、助かったの？

上半身を起こして、ぼやけた視界で周囲を確かめると。

赤い火と黒い煙、それしかなかった。

「う、うぐ」

イウは両手で口元を押さえるも、熱と煙はどうしようもできない。この暑さをどうにかしようと、フロンを引き抜こうとしたら。

革製の鞘が凍結しており、刀身を表に出すことができない。

「げほっ、ごふ、ごほっ！」

炎が燃焼することで酸素が薄くなり、煙と熱も相まって。

イウの意識が、朦朧もうちゅうとしてきた。

「あ、うう……っ」

イウは不思議なほど冷静に　死を、覚悟した。

腹に鈍痛があり、身動きができないでいるイグノ。

激しく燃える森林の中で、イグノは首だけを動かしてイウを探している。

「見当たらぬ、か」

急がねば、あの世に誘われるだろう。

竜であるイグノは火中にあっても平気だが、人間はここでは呼吸が続かない。

「む？」

揺らぐ業火の中で、ひとりの男が突っ立っている。

「……………。ノロハ、か」

銀槌は握られているものの、イグノはあることに気づいた。

「死んでおる、のか」

左腕はなく、肌の色や顔をうかがう限り、血は通っていない。

「久しぶりだね。藍王竜あいはりゅう、イグノレステ」

その隣に、黒幕である幼女が姿を見せた。

……………二百年ほど前の出来事。

雲の上、高山地帯にある竜族の巢。

すでにそこは、血なまぐさい痕跡を残し、廃滅はいめつしていた。

「な、なんとゆう……………」

生き残ったのは、イグノも含めてわずか数体。

『どうしたんだい？ 竜族が、数分でほぼ全滅だなんて』  
数百、数千といた翼竜、飛竜の軍勢が。

ひとりの幼女に、あつという間に滅ぼされた。

『顔を仮面で隠しおつて。その武器から、扉の娘と呼ぼう』

『ふうん？ 君が、この長かい？』

イグノの子息である、その亡骸の上に立つ幼女。

扉の娘と呼称された幼女は、悠々（ゆうゆう）とイグノを見下ろしている。

『脆弱ぜいじやくだね。竜族は、高みにいたことで弱化したのかい？』

『だまれええええええつ！』

家族を踏みつけられ、怒髪天どはつてんのイグノが突進する。

幼女はそのイグノを跳び越え、別な竜の頭を踏み潰した。

『こ、この、ぼうとくしゃがあああああつ！』

『よわつち』

幼女は両腕につく扉のような形をした盾を、打ち鳴らして轟音ごうおんを放った。

ただそれだけで、大気と大地が震動するほどの破壊力が生じる。

至近距離で受けた竜は口から泡を吹き、鼓膜が破れたのか。

耳から大量出血し、気を失い……もう、絶命している。

『ふん。こいつも大した器じゃないね』

その肉塊にくかいを踏み締め、幼女はイグノを一瞥する。

『藍色の竜王、名は？』

『な、なんだと？』

『質問返し。一体殺す』

幼女は脇にいた竜の頭を指弾しだんで貫き、脳髓のうずいを外気にさらした。

『残りは五つだね。藍色の竜王 めんどくさいから、藍王竜。君

の名前は？』

『い、イグノ……レステだ』

『ためらいがあったね。またひとつ、さようなら』

イグノは幼女が何をしたのか、理解した。

右手の親指で、大気を叩いて空気の弾を撃ち出しているのだ。  
『ふうっ。藍王竜、イグノレステね』

こやつは、紛れもない破壊者だ。

簡潔かつ、最大の殺傷力を持つ攻撃手段の数々。  
もはや勝ち目など、一片もありはしなかった。

ふたりの姿を見て、イグノは安堵した。

「扉の娘。ノロハを操り人形とするとはな」

ノロハの隣に立つ、銅色の外套を身にまとい、銅色のやや長い髪に瞳を持つひとりの幼女。

「それが、貴様の素顔か。もう道化をよそおうことは止めたのか？」

「道化だよ。ボクは、その運命からは逃れられない」

「何をほざいている？」

扉の娘　ファイリウは、答えなかった。

「フン」

同時にふたつに出逢えるとは。希有な。

湖の集落で、奇妙なニオイがあるなと思ったら。

このような巡り合わせになるうとは……な。

「そういうことか。腑に落ちたぞ」

「何がだい？ ああ、なるほどね。やっぱりイグノ。君は頭がいい」

「貴様ほどではないがな」

なるほど、扉の娘。

それで、脅したな。

でなければ、清浄無垢な小娘が、殺戮などの冒険に走るはずがない。

「クククッ。儂は運が良いのやら悪いのやら」

いずれにせよ、好都合だ。

過去の清算を、一度にふたつもできようとは。

「これで、新しいユイフェヴが創れそうだ」

「フン。何をするつもりか知らんが、儂がやられたままでいると思  
うなあっ！」

イグノは身を起こして、フィアリウへと火球を放った。

一方、その頃。

アルセスはイウを見つけて、安堵の溜息をもらした。

「まだ、生きているよな？」

倒れているイウを背負うアルセス。

「しかしまあ、あそこまで城下町を追い詰めるたあな」

上を見ると、枝に引っかかっている鞆があつた。

それがあつたおかげで、落下の衝撃が緩和されていたのだ。

「さて、さつさと脱しないと……オレも危ないな」

耳を黒い羽根を散らす翼に変え、アルセスは空を目指して羽ばた  
く。

「イウ。オレが、守ってやんよ」

ぶら下がってた鞆を回収して、アルセスはさらに上へと飛翔する  
。

イウとオルも誕生していない、十五年ほど前。

まだノロハに左腕がある頃のことである。

「おい、ノロハ。こんな島に国を作るだつて？」

「ああ、そうさ。開拓つてのもおもしろそうだろ？」

「そんな安易に夢想を語るんじゃねえ。湖の集落の住人が何て言う  
か」

「説得するさ。俺は、この島の豊かな自然を守りたいんだ」

ノロハとアルセスは、その島の砂浜で言い合っていた。

この島には貴重な動植物が多く、それを狙っているのが大勢いる。  
また、ここはどの国にも領有されておらず、法治が整っていない

ので、悪党が何をしでかすか解らないという不安もあった。

『あらあら、いいじゃない。男は常に、夢を熱く語って欲しいものよ』

『マイト。お前はノロハの夢物語に賛同するのか？』

『ええ。困っている人がいるのに、それを助けられないなんて男の風上にも置けないわ。そう思うでしょ？』

アルセスからトルガのほうに一瞥をくれるマイト。

紅一点ではあるものの腕っ節は強く、ノロハとトルガ、アルセスの三人をまとめるリーダーのような存在だった。

『しかし、こちらが一方的に持ちかけてもダメだろう。きちんと筋と話を通さなければ』

『どいつもこいつも、頭ガツチガチねえ』

マイトはトルガの返事に頬をふくらませている。

も、彼女もそう簡単に通る話でないのは承知していた。

『何よりも、行動あるのみ。そうだろう？』

ノロハのその一言に、他の三人は肩をすくめながらも、うなづいていた。

集落の人達を説得して、この島の自治を整えようとした矢先に。

この島を賭けて、泥くさい戦争をしたという事実がある。

相手は国だったり、無法者だったり、いずれにしても数での不利は否めない。

ノロハ側は傭兵を雇ったり、有志を募ったりして、どうにか数をそろえて迎え撃てた。

その最中に頭角を現したノロハ。

一騎当千の彼の存在があったおかげで、いつしかこの島には悪者が近寄りなくなつた。

そして、彼に感銘かんめいを受けた人々が、国作りのためにとボランテイアを申し出て、この島に住まうようになった。

ノロハの人徳があつて、このフォジスという島国が誕生したのだつた……。



イウを背負ったアルセスは、燃え盛る森を抜け、人気のない石壁裏に降り立つ。

耳から生えた黒い翼を消失させ、普通の耳を戻してから、半壊の門を目指して歩く。

「お、る……」

うわ言、か。

それほど、あいつを想っているのか。

やれやれ、好かれた男は……どうして鈍いんだろうな。

「もう、見ていらねえよ」

アルセスは白のシャツの内側に隠していた、虹色の羽根の飾りを表にさらす。

これをイウにかけてやろうと、彼女を一度背中から下ろした。

「アイリス。この娘を、守ってやってくれよ」

もうすでにこの世にいない、アルセスの伴侶が残した形見はんりよ。

アルセスがイウを、身をていしてでも守ってやりたいと思ったのは。

イウがどこかしら、彼女に似ていたからだろう。

「アイリス。オレは、もうすぐお前の下に逝くかもしれないぞ」

イウを背負い直したアルセスは、その瞳に涙をにじませながらゆっくりと、歩みを進めていった。

イウが城で行動を起こす、少し前の出来事。

『パパ……？』

不死者と化して操られるノロハは、片腕で銀槌を振り回し。

イウの眼前で、湖の集落の住人を無残にも撲殺ほくさつしてしまった。

『ママ、ママあー！』

『う、うあ。い、イウ……に、にげなさ……』

マイトだけは、まだ息があつた。

後頭部を強打され、そこから大量に出血しているが、意識はある。

『う、うぐうあ……っ！』

『もう、もうやめてよお！』

銅色の外套を羽織った仮面の幼女が、マイトの頭を踏みつけ、靴のかかとでこめかみを刺激してる。

『これ以上近づかないほうがいいよ。君のお母さんを長生きさせた  
いならね』

『ママを、ママを助けて。お願い、ママを殺さないでえっ！』

『話は最後まで聞けよ』

イウは恐怖して、その場に屈した。

『ふふっ。おとなしくなったね』

『うあああっ！』

『ま、ママ……』

立ち上がるうとするイウを、フィアリウはその目だけですくませ  
た。

『助けてあげてもいいよ』

『えっ？』

『でもね、ひとつ条件があるんだ』

『な、なに？』

フィアリウは不死者と化したノロハを横目に、こう言い放った。

『助けたい人をひとり選べ。そして、それ以外の人間を殺すんだ。』

この島にいる、人間全てをね』

『い、いや……っ』

その時、イウにはひとりの顔が思い浮かんでいた。

『ふうん。イウ、君はその男の子を選ぶんだあ』

イウの心は、表情だけで読み取られた。

その反応を見て、フィアリウは確信を得たようだ。

『じゃあ、君のおかあさんとさよならだね』

『ぐう』

足に込める力を、少しずつ強くしている。

『だ、ダメえ!』

『あれあれ? いいのかなあ。ボクは、男の子を殺しちゃっても』  
『二者択一を、イウは強引に迫られた。』

迷っているイウを見兼ねて、マイトが大声で叫ぶ。

『イウ、私を選ばないで!』

その言葉に、ハツとなるイウ。

マイトは、死を覚悟していた。

『勝手にしゃべるなよ』

『ぐっ。イウ、あなたは……生きなさい。自分の選んだ人と、未来を生きるのよ!』

『だから、黙れって言ってんだよ』

『イウ! あなたは、あなたの思うように生きなさい! 私に構わず、あなたは』

『聞こえないのかい?』

マイトは腹部を蹴られたことで、咳き込んでいる。

『どうするんだい? イウ、君は誰を生かす? 指で数える間に決めなよ』

勝手にカウントダウンされ、イウはパニックに陥<sup>おちい</sup>っていた。

ママも、名前も知らない男の子も助きたい。

でも、でもっ!

どうして私が、誰かを殺したり、見捨てないといけないの?  
なんで、そんな残酷な条件を、あなたは笑顔で突きつけるの?

誰か、助けてよ。

『イウっ! また逢えるわ。きっと、また逢えるっ!』

マイトは、涙ながらに微笑んだ。

『ちっ。永遠に黙ってなよ』

フィアリウは我慢ならず、マイトの頭を踏み潰した。

『ま、ま……っ』

目の前で起きたことが信じられず、イウは目をそらした。

「イウ。君は男の子を選んだと見なすね。ただし、君が勝手にこの件を話しちゃったり、城にいる人間をちゃんと殺さないと……ふふつ。どうなるか、解るよねえ？」

大粒の涙が、イウの頬を伝ってこぼれ落ちる。

「ボクもこの島国にいる人間の掃除を始めるよ。現在の王 偽りの王は、君に譲るとしよう。もうすぐ宴をやるようだし、血祭りにあげるのも一興だ。適当なのを残しておくから、君は城に残された全員をやればいい。ま、君だけじゃ不安だろうしね。君と同じく、ボクに敵意を抱いている者をひとり派遣しておくよ」

母親を殺されたことが許せず、イウはフィアリウをにらみつける。

「ここでやるのかい？ それでもいいよ」

その不敵な笑みを見て、イウは悔しくて唇を噛み締めた。

「竜の角、か。それは君が君だと示す証だもんね。男の子に出逢えたら、渡せばいいんじゃないかな？ 男の子はそれを大事にするだろうよ。君の温もりが感じられるんだからさ」

ノロハを一枚のカードに戻して、フィアリウはイウに背を向ける。死体は全部、頭を潰しといたから。もう不死者にはできそうにないねえ」

意味深い一言を残して、フィアリウはこの場を飛び去った。

涙を手でぬぐって、イウはおもむろに立ち上がる。

「もう、私は……」

角の首飾りを握り締めて、イウは自分の心を黒く塗り潰した。

時は戻り、オルはというと。

彼はアルセスによって気を失わされ。

その後、騎士達に運ばれ、牢屋に放り込まれていた。

「ぐ、うう」

今は意識が混濁しており、オルは自分がどういう状況にあるのか理解できていない。

「こいつ、どうやってあの鉄格子を……」

「あんな曲がり方してるんだぜ？ どう考えても、力づくでとしか騎士達は会話を止めて、この場にやってきた誰かに一礼する。」

「どうしたんだ？」

「あ、アルセスさん」

「おや。派手に鉄棒をへし曲げたな。こいつあ、誰がやったんだ？ アルセスはイウを抱え直して、看守に声をかけた。」

「さ、さあ。それよりも、空いているのがそこひとつしかないんです」

「うっは。マジかよ」

「そ、その娘は……」

「姫だよ。とりあえず、城下町襲撃の件で関与しているから、どうしたものかと思つてな。まあ、そこに入れておくのがいいだろう」

アルセスの指示で、看守は牢の鍵を開ける。

床にうずくまるオルを一瞥して、アルセスはそこにあるベッドにイウを寝かした。

「ふたり仲良くしとけよ。さて、オレは人命救助に回らないといけない。人手不足なんぞな。ここにいる連中も、ここの鍵閉めたら手伝つてくれや」

「は、はい」

看守が鍵をかけた後、外へ出るアルセスを追う騎士と看守。

この場にはオルとイウ以外、誰もいなくなった。

「う、く」

しばらくして、オルはおもむろに起き上がる。

「ごほっ、げほ。こふっ」

イウも同じく、ゆっくりと目を開く。

「わた、し……は？」

「こ、の」

オルはベッドに近づいて、イウの顔を見下ろす。

「お、オル……？」

力ない声で、イウはオルの頬に触れる。

「っ」

オルはイウの首に、両手をかけていた。

最初は驚いているみたいだったが、イウは。

「……………。いいよ」

それだけで、オルが何をしようとしたのか察していた。

「ごめんね」

泣きながら、うつろな笑みを浮かべているイウ。

「私は……オルに、ひどいこと……しちゃって」

泣いている理由が解らなくて、オルは苛立いらだっていた。

「最期にね、ひとつだけ。お願いしていい？」

「なんだよ」

「キス、して」

その言葉に、オルの心臓が跳ねる。

「今だけでいいの。私を、夢見る女の子でいさせて」

うれしいのかさびしいのか、複雑そうな表情をするイウ。

涙をこぼしながら、イウは身を震わせていた。

「だったら、なんで」

「……………」

力を入れて、オルはイウの首を絞しめる。

「あっ、うう…………っ！」

オルの両手首を強く握って、イウは苦し紛れに笑みを浮かべる。

「すき……………いつ」

ただそれだけを伝えて、イウは抵抗を止めた。

ふざけるなよ。

俺の家族を殺しておいて、今更なんだよ！

自分が助かりたいから、俺を惑わそうってか？

そんなのにだまされるもんか。

死ねよ、死んじまえっ！

「おる、…………っ」

イウの瞳から光が消え、彼女の手はオルの腕から放れた。

「や、やった……………のか？」

彼女の首から手を離して、オルは力尽きたイウを見つめている。

「は、はは。ははははっ」

手の震えが、止まらない。

復讐を果たして、震えながらもオルは笑っていた。

大粒の涙を、イウの頬に落としながら。

## 第4話

『悪いな、オル。お前のためなんだ』

返り血のついた黒の外套を、酒場の屋根上に放棄して。

アルセスは、声のやりとりだけでオルが捕まったと察した。

『お前は牢屋にいる。外にいたら、危険すぎる』

フィアリウが何かを始めようとしている。

そう悟ったアルセスは、耳から黒い翼を生やして、空へと飛び立つた。

高山地帯にある城の、吹き抜けの中庭に降り立つアルセス。

『どういうこった？』

あたりを見回すが、血痕や腐臭にぶどう酒の臭いはあれど、人の亡骸はひとつもない。

『……………。もうすでに、集め終わったな？』

自分が見当違いの場所にいると確信したアルセスは、飛び立つ前にトルガが愛用していた長剣を見つける。

『土産として、何か持ち帰らないと……………来た意味がないよな』

それと鞘を拾い、アルセスは再び夜空へと羽ばたいていった。

「イウ、イウっ？」

泣きじゃくりながら、オルはイウを揺さぶっている。

……………反応がない。

もう、手遅れなのかと。絶望していたオルだったが。

「げほん！ う、はぁ……………うっ」

イウが生きてると知り、安堵する。

「お、オル……………？」

苦しそくに呼吸を繰り返すイウ。

真っ青だった顔は、徐々に血色を取り戻してゆく。



「お、俺は……」

ふと、オルは気がついた。

「イウが、オルが身につけていた角の首飾りを引きちぎっていることに。」

「はあ……はあ、オル……っ」

「オルは、あやまちを犯しそうになったことと、イウが無事だったことに安心してしまった。」

「全身から力が抜けて、オルは床に尻もちをつく。」

「どう、したの」

「嫌いになんて、なれねえよ。」

「オルは、弱々しい声を上げるイウから離れた。」

「壁を背にして、うなだれて自分の両手を見つめている。」

「「ごぶ、ごほっ！ けほっ、お、オル……？」」

「名前を、呼ばないでくれ。」

「うつむいたままでオルは、首を左右に振った。」

「「オル、どうしたの？」」

「「呼ぶな」」

「「え？」」

「「俺の名前を、呼ぶなあああああああああっ！」」

「「オルは頭を抱えて、狂乱する。」

「「イウは家族を奪った仇敵。」

「「イウは憧れで、大好きだった人。」

「「自分にとってイウはどちらなのか、オルはそれが解らずに混乱している。」

「「オル」」

「「ベッドから下りたイウは、オルの手にそつと触れた。」

「「ごめんね……」」

「「それからイウは、オルを抱擁する。」

「「なっ」」

「「優しく抱き締めて、イウはオルの耳元でささやいた。」

「ほんとに、ごめんね」

イウの瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

「ほんとに、ごめんえ」

しゃくり上げて、イウは何度もオルに謝る。

「……………。もう、いいよ」

オルもイウを離すまいと、力強く抱き締めていた。

「よく、ないよ。まだ、私はあなたに報むくいることができない」

「え？」

その言葉の意味が解らず、オルは腕の力を弱めてしまった。

イウは身を離して、おもむろに立ち上がる。

「ありがと。オルから……………勇気を、もらったよ」

にこやかに微笑むイウ。

無理をして笑う彼女の胸元には、虹色の羽根が輝いていた。

「さよなら、だね」

その一言が、失意していたオルを突き動かした。

「きやつ」

イウの左手をつかんで、オルは彼女を引き寄せる。

それから、オルはイウを抱きすくめて。

「お、オル んんっ！？ むっっ！」

戸惑う彼女の唇を、強引に奪った。

「んんっ」

最初は混乱して、オルの胸を両手で叩いていたイウだったが。

オルのシャツを握って、そのキスを受け入れていた。

「ぶはあっ」

重なっていた唇を離して、たがいに息を吸う。

見つめ合う視線、高鳴る鼓動に逆らわず。

「んんっ！」

再度、口付けをした。

何度もキスをして、息苦しくなったふたりは……………身を離して、深呼吸を繰り返している。

「えほっ！ はあ……うう……い、いきなりなんて」  
「行かないでくれ」

オルはイウを抱き留めようとしたが、イウはその手を拒んだ。  
「ダメだよ。オルは、ここにいて」

「なんでだよ！」

「だって、私はもう……ここで、死んじゃったから」

言っている意味が解らず、オルはイウの瞳を見つめ直す。

「私はここで、あなたに殺された。今日の前にいる私はもう、私じゃないの」

「どういう、意味なんだよ。何があつたんだよ！」

「ありがとう。短い間だけど、夢を見させてくれて」

何も答えず、イウはポケットから鍵を取り出す。

「それって」

「アルセスが、私の服に忍ばせといたみたい」

にこりと笑顔を見せて、イウは開錠して牢屋かじょうから脱出した。

それから自分の荷物を回収しようと、あたりを物色している。

「あつた」

鞆を見つけたイウは、それを肩から提げる。

そこから火と氷のナイフを収めた革製の鞆を取り出し、腰に装着した。

「えっと」

鞆の中から赤と紫のチューリップを手に取り、イウは牢屋に立ち尽くしていたオルに。

「オル、だあいすきっ」

満面の笑みを浮かべて、その花を告白と同時に手渡した。

照れくさいのかイウは、すぐにそっぽ向いてしまう。

「じゃあね」

それからイウは、自身の長い藍髪を 果物ナイフで切り捨てる。

「な……」

牢屋内に自らの髪を捨てて、イウはオルに背を向けて立ち去った。

髪を切って、清々しい気持ちで外に出たイウ。

吹っ切れたのかな。

運命の赤い糸も、切れちゃったのかな。

「あれ？ これは……」

日差しがまぶしくて、イウは手で日光を遮る。

その時、胸元にある羽根に気づいた。

「もしかして、アルセスが……？」

虹色の羽根を、イウは両手で優しく触れてみる。

心地のいい、優しい温もりが感じられた。

「あれ？ なんで私は、これの持ち主がアルセスだって……」

過去に一度も、イウはアルセスがこれを所持しているのを見たことがない。

「でも、もしかしたら……」

アルセスのことを心配したイウは、物陰に身を潜めながら周りを見渡す。

「まだ、警戒態勢は解かれてないんだね」

私服の騎士の姿を何人が確認し、火と氷のナイフを強引に引き抜くイウ。

刀身には、革製の鞘の破片が付着してしまった。

「やっぱり、専用の鞘じゃないとダメだね」

イウはフランとフロンを地面に突き刺し、鞆の中からクッキーを取り出し、それを頬張る。

「ぐ、うあああ……」

「え？」

軽くお腹を満たしたイウは、物陰から声がするほうをのぞき見た。

「お前は……」

「た、たすけ……て」

「えっ」

イウの近くに、私服の騎士が数人倒れている。

それも、じんましんが出た異様な状態で。

「発疹ほっしんが？ ど、どうしたの？」

イウは火と氷のナイフを引き抜いてから、彼らに歩み寄り、屈んで様子をうかがう。

「し、しにたく……な、い」

イウはひとりの騎士の手を握り、無事を祈っていたが……彼はもう、事切れていた。

「な、なに。どういうことなの？」

その騎士の目を手で閉じさせて、イウは周りで苦悶している人を数える。

「きゃ」

すると、イウの膝元にあるものが投げつけられた。

「こ、これって……」

道化の仮面。

顔を上げると、イウの眼前にはフィアリウが立っていた。

「いい実験台になったよ。彼らはね」

「何を……もう、あなたの好きにはさせないんだから！」

犠牲者はまだ出ると確信し、イウは意を決して立ち上がる。

「こっちだよ」

フィアリウは城下町の中心へと走り去る。

その後を追おうとしたイウだったが、冷静になって考えていた。

これは、罠だよね。

「確か、この先には噴水が……」

フィアリウを追跡しようとした、その瞬間。

「うぐあああああっ！」

「ひういひういひういひういっ！」

絶え間ない断末魔が、城下町にこだまする。

「な、なにが……？」

イウは足を止めて、周辺を見回す。

ついさっきまで立って歩き、警戒していた騎士達が……昏倒して  
いる。

それも、全員がじんましんを発症していた。

「もしかして、疫病……？」

その類だとするなら、自分も危ない。

胸に手を置いて深呼吸をしてから、その元凶を探そうとイウは歩  
き始める。

「実験台……？ ととなると、やっぱり」

犯人は、フィアリウしか考えられない。

「あの子は、どこに」

「だ、誰だ。お前は！」

「あ」

騎士のひとりに発見され、イウは火と氷のナイフを構える。

「や、やる気か？ く……」

騎士の男性は倒れた仲間が気になり、戦に集中できないようだ。

「一刻も早く、処置をしないと危ないよ」

それに気づいたイウはナイフを鞘に収めて、近くで苦しんでいる  
人に駆け寄った。

「む。き、君は医師なのか？」

その騎士はイウが敵でないと判断し、剣を収めて悶える仲間に寄  
り添う。

「違うよ。でも、こんなに苦しんでいるのに……」

父親の同胞である騎士の皆が瀕死なのに、何もできないでいる。

そんな自分に、イウは怒りを覚えていた。

「まだ、ここにもいたんだね」

「む？ あなたは、フィアリウ殿。皆が苦しんでいるのだ。助けて  
やってくれないか」

イウはその声を聞いて、騎士のほうを向いて叫んだ。

「逃げてええええええええええええっ！」

「“ヒール”」

イウの声は、空しくこだました。

「な、何を言っているんだ？ 君は、どこに逃げると言っただ」

フィアリウが放った癒しの光を浴びても、平然としている騎士。しかし、症状はすぐに現れた。

「あ、ぐあ……っ!？」

その皮膚は赤く腫れあがり、息を乱した騎士は地面にのたうち回る。

「ど、どうにかしないと」

「もう無理だよ。間に合わない」

苦悶していた騎士は、口から泡を吹いて絶命してしまった。

「な、なんで……」

「これで、あらかた片付いたかなあ？」

フィアリウは近くの噴水広場に、急ぎ足で向かっている。

「……っ」

イウは無言で、フランとフロンを引き抜いた。

もう、私は腹を括ったんだ。

あなたとともに、奈落へ逝くと。

「やああああああああっ!」

叫びながら駆け出し、イウはフィアリウへと切り込む。

「ん？ おや、仕掛けるつもりなんだね」

振り返らずに、フィアリウは右足を浮かせた。

「仕方ないね。そっちが、その気なら」

地面でトントンと靴を整えて、フィアリウはほくそ笑んだ。

「姫えええっ!」

「きゃあ!」

勢いに任せて斬りかかろうとしたイウを、何者かが蹴飛ばした。

「う、く」

半壊の家屋の前に倒されたイウは、落としたナイフをすかさず拾い上げる。

「あ、アルセス……? その子に、味方するの?」

顔を上げてイウは、黒の外套を羽織ったアルセスをにらみつけた。  
「遅かったね。待ちくたびれたよ」

両腕を広げて喜ぶフィアリウの傍に立ち、アルセスはイウを見下ろしていた。

「……死にたいのか？」

「え」

「それなら別に、構わないんだがよ」

黒い外套を風になびかせて、アルセスはフィアリウのほうを向いた。

「どういつつもりだ。フィアリウ」

「んー？」

右手に持つ刀の柄に、左手を添えながら聞くアルセス。

その動作に、フィアリウは血相を変えた。

「本気、かい？」

「でなけりゃ、オレは抜かないぞ」

冷や汗を額にかいて、フィアリウは噴水のほうへ後ずさる。

「そっか」

腕を組んで、フィアリウは銅扉どうひの首飾りを握り締めた。

「お前も、ちったあ本気のようにだな」

「当たり前だよ。君が刀を抜くのなら、こちらもそれ相応に応えねばならない」

アルセスとフィアリウは、火花を散らしている。

イウはふたりの放つ殺気に触れて、身がすくんでしまった。

「わ、私は……？」

「姫。お前は下がってたほうがいい。見た目はガキでも、フィアリウは侮れないぞ」

「それは知ってるよ」

「ほう？ やっぱ、何かしやがったな。フィアリウよ」

イウの発言を耳にしてアルセスは、抜刀の構えを取りつつ訊ねた。  
「さあねえ」



肩をすくめて、知らん振りをするフィアリウ。  
対するアルセスは、隙の見当たらないフィアリウを前にして、呼吸を整えている。

「私のパパを利用して、脅したことを忘れたとは言わせないよ！」  
おもむろに立ち上がったイウは、肩から提げた鞆を、腰に巻いて動かないように固定していた。

それからナイフを握り締めて、アルセスの隣に並んだ。

「ノ口八を、利用した？ 何となく想像がついたぞ」  
舌打ちして、フィアリウはイウをにらむ。

「口外するなど言っただけどね」

「もう、もう私はあなたの言いなりにならない！ 何をするつもりか知らないけど、ここであなを討ってみせる」

「へえ」

不気味な笑みを浮かべて、フィアリウは首飾りから手を放した。

「まだ、その気にはならねえか。なめられたもんだな」

アルセスは腰を深く落として、出した舌を甘噛みしている。

「フィアリウって言ったよね。あなたは、騎士たちに何をしたの？」

「答えなさい！」

「そいつあ、オレも気になってたところだ」

イウの問いかけに、フィアリウは腕を組んだ。

「八チの毒って、知っているかい？」

余裕の笑みを浮かべるフィアリウは、ふたりに説明を始めた。

「そ、それが、それがなんだっていうの」

「ボクは回復魔法をかけた。あの症状が出たのは、少なくともボクの回復魔法を二回以上受けている生命体のみ。まあ、ただの回復魔法ではないことは……想像できたでしょ？」

八チの毒。二度以上の回復魔法。

そのヒントで、イウはある答えを導き出した。

「アナフィラキシー過剰免疫反応……？」

「ピンポン　ボクはね、アレルギー反応を起こす不治癒を、こ

の城下町にいた住民全員にかけてあげたのさ。もう、ずっと前からね」

八手に刺されても、一回目は大した影響はない。

その反応が起きるのは、毒に対する抗体ができた二回目以降。

生物の免疫とは、ウイルスや毒などの外来抗原がいらいこうげんを受けた際に、それに対する抗体を生成する。

その抗原が体内に侵入しても、以降は抗体が反応し、また体温を上昇させて、それを除去または中和するのだ。

風邪にかかった際に体温が上がるのは、ウイルスの活動を弱めるためで、その間に抗体がウイルスを迎撃しているからである。

しかし、一部の抗原は免疫を錯覚さうかくさせた上で、その抗体を逆手に利用してしまう。

一度目で生成された抗体は、二度目以降にその抗原に過剰に反応を示し、生物に全身痙攣ぜんしんけいれんによる呼吸困難、体温の異常な上昇による意識障害をもたらす。

生物の生理機能を暴走させ、あわよくば絶命させる。

これが、フィアリウの行使した不治癒だ。

「因子いんしは前から植えつけていた。後は、発作を引き起こすだけ。さすがにイウやアルセスは、情が動いて鈍る可能性もあったからね。

だったらついでに、実験台として利用すればいい。どうだい？ ポクの研究していた不治癒はさあ？」

「えぐい真似しやがる」

フィアリウの歡喜を、アルセスはその一言で片付けた。

悔しそうに齒噛みしていたアルセスは、静かに黒い刀身をさらしてゆく。

「一度目はちゃんと癒してあげたんだ。不治癒ふちゆは、いい具合に整ったよ」

それを脅威と見ているようで、フィアリウは語りながら後ずさる。近くに倒れていた男性を蹴飛ばし、フィアリウは両腕を広げてみせた。

「回復魔法はね本来、反射以外のほとんどの防御干渉を無視するんだ。しかも、ダメージ源はその生命体の持つ免疫だから軽減のしようがない。不死者を浄化する回復魔法があるなら、生者に苦痛として働く回復魔法もできるはず。これでもまだまだ未完成なんだけどね」

仲間を足蹴にする行為に、アルセスは憤激ふんげきしていた。

しかし、感情に任せて動くことはせず、深呼吸を繰り返す。

「未完成？　フィアリウ、申し開きは聞き飽きた。これからオレは、お前を殺す」

「ボクを殺す？　アルセス、君にできるとでも？」

「さあな。可能性はゼロじゃないぜ」

「君をここに派遣し、十五年もかけて島を手に入れようと画策かくさくしていたのに。ここで自身に、終止符を打つつもりなんてねえ」

ふたりが通じていたことを知り、イウはアルセスから離れる。

「ごちゃごちゃとうるせえな。フィアリウ、何を考えていやがるんだ？」

それを暴露はくろされても彼が動じなかったので、イウはアルセスを信じることにした。

「何も考えてないよ。めんどくさいからね」

手を開いたり閉じたりして、準備運動を終えたフィアリウは、複雑そうな目で、イウとアルセスを見つめていた。

「姫、最初に言うておくぞ。あいつの足技は絶対に防御ガードすんな」「えっ？」

「忠告はしといたぜ。一応な」

アルセスは刀を鞘に収めたままで、近づきながら抜刀のタイミングを計っている。

「邪魔だね、肉クスは」

死んだ騎士を足で払いながら、フィアリウは誘うように道を作っ

た。

「こなくそがぁああああっ！」

かつての仲間をあしらわれて怒ったアルセスは、鞘でフィアリウへと殴りかかる。

フィアリウは噴水から離れ、その攻撃から逃れた。

「まだ、抜かないのかい？ その黒刀を……」

「黙ってる。そのうるさい口を、すぐに閉じさせてやんよ」

フィアリウはイウのほうを見ていない。

その好機を逃さずに、イウはフランとフロンで斬りかかった。

「ふふんっ」

「きゃあ!？」

フィアリウは右手で軽く空を叩き、その衝撃波でイウに尻もちをつかせる。

「くっ」

すぐに飛び起きて、イウはふたつのナイフを逆手に握った。

「衝撃波？ そんなの、もう通じないから」

「火と氷の短刀ね。ただそれだけで、ドアに刃向かおうなんて考えたのかい？」

踏み込もうとしたイウだったが、フィアリウが右足を浮かせたのを見て、思い留まる。

「とりゃあー!」

「む」

アルセスの鞘の振り下ろしに、フィアリウはただ後退を繰り返すのみ。

それに違和感を覚えたのか、アルセスはフィアリウとの距離を開けている。

「何を企んでやがんだ。フィアリウ」

「さあね」

肩をすくめて、微笑むフィアリウ。

「オレらにも、その不治癒とやらを使ってみろや!」

その挑発にハツとなり、フィアリウは瞳を潤ませている。

我に返ったフィアリウは、首を左右に振り、キツとふたりをにらみつけた。

「迷いでも、あるのか？ 今のお前にもよ」

「……………」

無言でフィアリウはイウを見据えて、不気味に笑っている。

「跳べえええっ！」

フィアリウが右手の親指を立てて、人差し指の先をイウに向けた。アルセスが言ったように、イウは思いきりジャンプする。

「きゃあああああっ！？」

イウの真下を、地面をえぐる何かが通過した。

直後、突風が襲いかかり、そのせいでイウは着地を失敗してしま  
う。

「あいたっ。な、なにが……？」

浅くくぼんだところで転倒したイウは、そこから見たもので、フ  
イアリウが何をしたのか察した。

空気だ。

大気中の物質、それを親指で射出したんだね。

「ちっ。おしゃべるなアルセスめ。黙っててちょうだいよ」

「だったら、まだ見せてねえ手の内を明かしゃいいだろうがあ！」

「おおっと」

鞘による薙ぎ払いを後退してかわし、フィアリウはアルセスのほ  
うを向いている。

「背後からなら」

額の冷や汗を手の甲でぬぐい、イウはフランとフロンを振り回し  
て活性状態にした。

「やああああああああっ！」

声を上げながらイウは、フィアリウの背中にフランとフロンを突  
き刺した。

「ふうん」

活性化したナイフが外套を貫通し、その背中に、肌に、触れているはずなのに。

「気は済んだかい？」

フィアリウは、涼しい顔すずをしていた。

「ひっ」

左足が上がったことを視認し、イウは思わず両腕で防御しそうになる。

アルセスの忠告を思い出し、反応が遅れたのが幸いした。

「うああああ！」

蹴飛ばされたイウは、半壊した家屋にぶつかってしまふ。

「い、いた……」

落としてしまったフランとフロンを拾うために、イウは再びフィアリウへと接近する。

「へえ。まだ立ち上がり、挑む勇氣があるのかい」

「よそ見すんなよ！」

「っ」

フィアリウは油断していたらしく、アルセスの鞘を顔面にもらった。

「ちい」

今のは効いたようで、フィアリウは噴水のほうへ跳んだ。

口から垂れる血を手でぬぐい、フィアリウは顔をしかめている。

「オレが教えた通り、足技を受け止めなかったな。えっらいぞお！」

こびりついた木片を手で払い落としてから、イウは落ちていたナイフを回収した。

もし、あの時に防いでいたら？

無防備な状態で受けても、あの威力。

あの小さな身体のいったいどこに、そんな力があるというの……？

「アルセス。口が過ぎるんだよ」

噴水を背にして、フィアリウはアルセスをにらんでいる。

「女の顔を傷つけるのは、男として恥だがよ。今はんなことにこだ

わってられねえのさ」

真顔でそう答えてアルセスは、肩をすくめていた。

「君をそうさせるほど、ボクは強く美しいってことでしょ？」

「ち。別にオレあ、お前に女を感じたことはないんだぞ」

「それは、ちよつちシヨツクだね。ボクも一応、女の子なんだよ？」

「この有様をもう一度振り返ってみな。これが、淑女しゆくのやる暴挙かよ？」

ふたりの会話を耳にして、イウは息を飲んだ。

命のやりとりの中で、ふたりは普段の調子を崩していない。

手足が震えている今のイウは、命を賭とすことに迷いが生じている。

「ふつ」

私ひとりじゃ、あの子には勝てない。

それを痛感し、イウはアルセスを補助することを考えた。

「仕方ないね。ちよつとだけ、本気でやるよ」

「今までがそうじゃなかったか？ 何十年とお前を監視していたんだ。虚勢を張るのだけはよしな」

「きよせい？ ふふつ。アルセス、去勢してあげよつか」

「てめえ、どういふ見で言ってるよ！」

感情的になりこそしないアルセスだが、フィアリウの言動を受けて、その黒い刀身を外気にさらした。

「っ」

それを目の当たりにし、フィアリウは思わずたじろぐ。

「はああっ！」

抜刀と同時に放たれた黒い気刃きじんを、フィアリウは横に動いてすれすれで避ける。

それは家屋のひとつを寸断する途中で炸裂した。

「あつぶないなあ」

冷や汗だらけの顔のフィアリウを見て、イウはアルセスの持つ黒刀に興味を抱いた。

フィアリウは、黒い刀を恐れている。

なら、私にできることは……フィアリウを牽制すること。

「本気で、ボクを殺すつもりなんだね」

「腹あ決まってたんだがよ。どうにも非情になれなんだ。それが、オレの弱い部分ってこった」

「ふふ。美徳でもあるけどね」

大きく息を吸ったフィアリウは、右腕を振り上げて、右の掌底で空を叩いた。

「な、に　げほん！　がはあっ！」

アルセスが、膝を崩してむせた。

「ど　ごほっ！　えっ、うええっ！？」

彼に駆け寄ろうとしたイウも、声も出せず、呼吸もできず、その場に倒れ込んだ。

ふたりの反応を見て、フィアリウは微笑みを浮かべている。

「さようなら、おふたりさん」

左手と左足を後ろに引き、手首をひねりながら、フィアリウは旋風を撃ち出した。

それがアルセスに迫る　刹那。

「うらあああああああああああああああああああああ  
！」

物陰から飛び出したオルが正面から、長剣を振り下ろして旋風を斬り裂く。

も、完全には無効化できず、オルは吹っ飛ばされてしまった。

「ちつくしよ」

激しく転がされ、あおむけに倒れていたオルは飛び起きて、長剣を両手で構え直す。

切れた唇から流れる血を手の甲でぬぐい、不敵に笑っている。



「なに？ そんな、ありえない！」

対するフィアリウは、オルを見て愕然がくぜんとしていた。

イウとアルセスも、窮地きふちから救い出してくれたオルを振り返り、目を見張っていた。

「へへっ。まだ、まだ俺は、ふたりから真実を聞いてねえんだ。死ねるかよ、ボケっ！」

オルの全身から、白い気が微かに現れている。

（気流を込めた剣で、旋風を相殺そうさいするなんて。もしか、竜の角が…  
…？）

傷だらけになりながらも、威勢よく剣先をフィアリウへと向けるオル。

その首には、ひもを結び直した角の首飾りがあった。

それはにごりのない、神々しい白い光を放っている。

「……っ！」

フィアリウはオルを前にして、歯を食い縛っていた。

「横から突っ込んで、風を打ち消すとはな。やってくれるぜ、オル  
「よ」

「はあ、ちい。唇を切っちゃったぜ」

流れ出る血を舌でなめとった後、オルは奇妙な発言をした。

「すつげえ濃い銀色出してんじゃねえよ！ どういうつもりだあっ  
！？」

ほんの一瞬、フィアリウの顔が歪んだ。

「ちいっ！」

また、手で空を叩こうとするフィアリウ。

「息を止めるお！」

オルの指示にしたがい、イウとアルセスは口を結んだ。

しばらくして、ふたりの前にいるオルが親指を立てて合図を出す。  
「ば、バカな。見えているっ？」

その技はもう通じない。

その事実にはフィアリウはたじろぎ、ポケットに手を突っ込んでい

た。

「そうやって銀色を網あみのように広げて、何かやって咳き込むようにしてるんだろ？ そんなのは二度と通じるもんか！」

「なるへそ。オル、お前は波動オーラが見えてんだな？」

「んん？ オーラ？」

アルセスの一言で、イウはフィアリウの技の原理を理解した。

「そうか。気を放つことで、大気に何かしら干渉してたんだね。だから、呼吸ができなくなったんだ」

呼吸に必要なのは、空気中にある酸素。

その酸素を、何かしらの方法で流動を停止させるか、その場からなくせば。

呼吸における吸うという行為を封じられるため、本来入るべき酸素が来ないから、身体が混乱してむせたり、えずいたりしてしまうのだ。

「へえ。姫、やっぱり頭いいな。マイト譲りか？」

「……っ」

「そうか。マイトは、もう」

この世にはいないと確信し、アルセスは涙をこらえている。

と同時に、胸から沸き立つ怒りを必死で抑えていた。

「肉眼で、ボクの放つ気の色を認識してるなんて。ふふっ」

ついさっきまでオルの存在におびえていたフィアリウは、もう笑う余裕を見せている。

「よかったよ。君たちを生かしておいて」

「なんだって？」

「希望は、まだあるんだね」

「フィアリウ。さっきから何をほざいてやがる！」

アルセスの叫びを聞いて、フィアリウは不気味に微笑んでいる。

彼女は足踏みをして、皆の声に耳を傾けていた。

「フィアリウちゃん。君が何者かは知らないけど、ここで全てを白状させてやる」

「私はあなたを討つ。ママの仇を、ここで。ここで必ず！」  
大きな溜息をついて、フィアリウは足に力を込めた。

「ふうん。だ、か、ら？」

不意に、地震が起きた。

「く、地面に銀色を広げやがった！」

オル、イウ、アルセスの三人は直立できず、膝を崩された。

体勢を乱したオルに狙いを定め、フィアリウは再び旋風を繰り出そうとする。

「今度こそ終わらせてあげるよ」

しかし、その挙動は何かひまに妨げられる。

「わわっ!？」

「わりいが、オレを忘れんなよ」

アルセスはフィアリウへ鞘を放り投げている。

上体をそらしてかわしたフィアリウは、敵意を込めた視線をアルセスに向ける。

「く。相も変わらず、狙いは正確だね」

狙いこそ外したものの、鞘は噴水に突き刺さり、水の流れをせき止めていた。

「よつと。言う割には、軽々と避けやがって。覚悟しろよ」

立ち上がり、黒刀を正眼で構えるアルセス。

その刀身に黒い気をまとわせ、気刃を放てる状態を保っている。

「本当にボクを殺す気なんだね、アルセス。ナイトクローク暗闇外套まで羽織って、バイオリズム生体律動を夜の状態に維持してさ」

「……………」

アルセスは空をあおいで、真上にある太陽を見て安堵していた。

「ふたりとも、無事か？」

「は、はい」

「うん」

オルとイウも立ち上がり、アルセスの隣に位置する。

「多勢に無勢か」

「はん。本気でやると言っておいて、まだ武器を手にしなないとはな  
アルセスはフィアリウの足下に注目し、影が色濃くあることを確  
認していた。

「オレらなんて、その手で軽くひねり潰せるはずだ。なのに、どう  
してそれをしない？ いつまで遊んでいる気だあ！」

アルセスの挑発に、フィアリウは眉をひそめた。

「本気で来いよ。あの時みたいに、本当のお前を見せてみる」

その発言で、まだフィアリウが本腰を入れていないと知る、イウ  
とオル。

戦慄したふたりは、武器を強く握り締めて、フィアリウを見据え  
た。

「ふ」

鼻で笑い、フィアリウは外套内で短パンのポケットをあさる。

「待て。今、今は踏み込むな」

それを好機と見てイウとオルが動くのを、腕で制したアルセス。  
左手を宙にさまよわせていたフィアリウは、それを見て舌打ちを  
する。

「ち。おとなしくこっちに来ればよかったのに」

ポケットからカードを三枚手にしたフィアリウは、声高らかに宣  
言した。

「現れよ、奈落より帰した亡者よ！」

それらのカードをにこやかに、フィアリウは目の前に投じる。

フィアリウが放ったカードから、光とともに三人が現れた。

「あっひやはははははは！」

「……………」

「きゃうきゃう」

イウ、オル、アルセスは息を飲んだ。

「な、トルガ！」

「母さんに、と、父さん？ ヒユまで……………！」

「そ、そんな……………」

フィアリウの暴挙により……亡くなっているはずのオルの家族が、不死者と化して目の前に立っている。

それも、耳から鳥の翼が生えていた。

「ちゃんと頭を潰さないと、こうなっちゃうって遠回しに言っただのになえ」

フィアリウはその三人の後ろで肩をすくめ、唇を歪ませている。

あの時のつぶやきの意味を知り、涙目のイウは首を左右に振った。

「こいつぁ、やっべえな」

イウだけでなく、眼前の事実を受け止めきれず、オルもアルセスも動揺していた。

「フィアリウちゃん……いや、フィアリウ！ どうして、俺の家族をこんなにしたあ!？」

「どうしてって、君たちがボクを殺そうとするからだよ」

「マジかよ。ヒウラまで……生物兵器ユイフェウにしゃがったのか。オレでも荷が重いぞ、こりゃあ……」

トルガの耳からは、灰色がかった羽根先の黒いグリフィンの翼が。オルの母親　ヒウラの耳からは、茶色い模様が目立つ黄土色のフクロウの翼が。

そして、オルの妹であるヒユの耳からは、黄色の濃淡が鮮やかなカナリアの翼が発現していた。

「ふふふふ。あのおんなよ。あのおんなが、わたしを、このことを、あっひゃあやや……っ」

広げられたヒウラの翼から、羽根が舞い落ちる。

それつが回らないのは、死後硬直がまだ抜けてないため。

ぎくしゃくした三人の動きは、召喚後から少しずつほぐれてきている。

「ありゃ、やっべえな。目がイツてるぜ」

ヒウラとヒユは何も所持していないが、目に見えないものが武器だろっ。

そう確信したアルセスは、漆黒の刀を振り鳴らして、長剣を握り

締めたトルガを見やる。

「もうそろそろかな？ ボクは、失礼させてもらうよ」

銅色の髪と外套をなびかせて、フィアリウは半壊の家屋の上に飛び立ち、屋根伝いに山のほうへ姿を消した。

アルセスは心配そうに、イウとオルのふたりをちらりと横目で見  
る。

「この場合は、俺に任せて。ふたりは、あの子を追いかけてください」  
「なに？ いいのか。相手は、お前の」

「アルセスさんに、イウに、苦しい思いはさせられない。成仏できない俺の家族は、俺の手で始末をつけます」

意外な申し出に、アルセスのほうが尻込みしている。  
動揺を隠しきれないオルの手に、イウの手が触れていた。

「アルセス。ここは、私とオルにゆた委ねて。あなたは、フィアリウを  
お願い」

「い、イウっ！ ここは俺がやるって」  
「元はといえば、私がいけないの。私が、オルの家族を……っ」

イウの決意を知り、オルは静かにうなづいてみせた。

溜息をついたアルセスは、遠くに見える山を見つめながら、深く  
膝を曲げた。

「ふたりの揉め事は、ふたりで解決しな。オレも、あいつとの問題は  
自身でどうにかする」

そう告げた後にジャンプして、アルセスも屋根伝いに山のほうへ  
と向かっていった。

それを見送ったふたりは、改めてオルの家族である三人を見定め  
る。

イウの手が、震えている。

それを見てオルは、深く呼吸してから叫んだ。

「イウ、お前はさっさと逃げろ！」

「嫌だよ！ 私は、私は絶対に逃げない」

オルの手から離れたイウの手は、地面に落ちていた火と氷のナイ

フを拾い上げる。

力強くそれらを握り締め、イウはオルに微笑んでみせた。

「ふっ」

頑固なイウを目の前にして、オルはおかしくて吹き出した。

「な、なんで笑うの？」

「いいや。ほんとに、イウは父親そっくりだな」

「え？」

「なんでもない。俺が、俺が守ってみせるよ。イウ！」

ドキッ。

たくましいオルの横顔を見て、イウは恐怖を忘れてときめいてしまった。

「ゆるさないわ、ゆるさない！ あなたを、ならくへといざなつてあげる」

ヒウラはイウだけを見つめて、両腕を広げて不気味に微笑んでいた。

オルのことは見向きもせず、憎悪を心のうちにたぎらせている。

「母さんっ！ 俺の声が聞こえないのか？」

声を張り上げたオルは、ゆっくりとイウに近づくとトルガを注視する。

「……………」

トルガは長剣を片手に握り締めて、無言でイウだけを見定めていた。

甲冑かっちゅうではなく、擦りきれた衣服をまとったその肉体には、火傷の跡が残されている。

生気のない眼差しは、まばたきされることなく一点を見据えていた。

「俺は、認識されていないのか……………」

オルも負けじと長剣を構えるも、手が震えていた。

不死者と化した家族を前にして、迷いを吹っ切れずにいる。

「きやつきゃあ」

その妹のヒユはふたりになど眼中になく、トルガとヒウラの周りを駆けていた。

無邪気に笑うその表情には、血の気などない。

イウが与えた首の傷跡は縫合ほいつうされており、激しく動き回ることで、そこからどす黒い血が流れ出ていた。

「ふふっ。あのおんなが、わたしとこのこをやったのよ。あなた」

「……………」

ヒウラのささやきに、トルガは振り向かずになづいていた。

その意味を、オルはすぐに理解した。

「く、父さあん！」

トルガの切り込みに、長剣を合わせたオル。

罅迫り合いになるも、トルガはオルに目もくれない。

「イウ、イウー！」

「な、なに」

「無理は、するなよ……………」

オルとトルガに力の差はない。

今になってトルガは斬撃が止まったことに気づいていた。

「ようやっと、俺に気づいたのか……………」

トルガの視線は、イウでなくオルに向けられていた。

「いくよおー！」

イウは唇を噛み締めて、右手にある火の力を、左手にある氷の力を活性化させた。

側面から接近し、イウはトルガの右腕に火の刃を刺し込む。

「……………」

火を恐れたトルガは、その場から飛びのいた。

「へえ。イウ、珍しい武器を使ってるな」

「話は後にしよう。今は、今は……………」

イウは胸が張り裂けそうで、息を乱していた。



「ど、どうしたんだ」

「私、私は……また、オルの家族をつ」

それが嫌でたまらなくて、イウは泣きじゃくっている。

「そうか」

オルは安堵した。

今ここにいるイウが、嘘偽りない本当のイウだと確信できたから。

「イウがどんな思いで、どんな理由で、あんなことをしたのかは知らないけどさ」

オルは前に立ち、イウを庇う位置取りをした。

「俺は、君を好きになってよかったよ」

「え？」

「けどさ、俺はイウを許せない。俺の家族を、奪ったから」

「……っ」

「でも、それはおあいこさ！」

オルは切り込んできたトルガに、気の込められた斬撃を浴びせた。迷いなき一閃。

トルガの左腕を裂いた剣には、どす黒い血が付着した。

「やっぱり、もう生きていないのか」

トルガは後ずさり、左腕が切断されていないことを、目の前で動かして確かめている。

それから剣を下段に構えて、再びイウとオルに接近していた。

「でも、やっぱり父さんだ。あの構え、動き、全部がそのままだ。敵を至近距離に近づけさせない、下段の構えを……くっ」

オルは正眼の構えで、トルガを迎え撃つ体勢になった。

「お、オル」

「俺がしくつたら、その不思議なナイフで援護してくれ。俺と父さんが打ち合っている間に、母さんとヒュが何もしてこないとは限らない」

イウはトルガの後ろにいるふたりを見つめて、たまらず目線をそらした。

ふざけているヒュを捕まえて、ヒウラはイウのほうをじっと凝視している。

イウがふたりに与えた致命傷は縫合されてはいるものの、完全に止血できていない。

「ど、どういう意味なの？ あいこつて」

「へ。言わせんなよ。決意が、揺らぎそうだ」

オルは、神妙な面持ちでイウに覚悟を打ち明けた。

「俺も、イウと同じ罪を背負うよ。ここにいる皆を倒せば、イウだけにつらい思いはさせずに済むだろ？」

「えっ……」

それを聞かされて、イウはナイフを落としてしまった。

「い、イウ？」

「だ、ダメだよ。そ、そんなのって」

「来るぞ！」

再び打ち合う、オルとトルガのふたり。

剣が刃こぼれしようが関係なく、トルガは何度もオルの剣へと打ち込む。

「父さん。俺が相手でも、容赦がないな」

上下から激しく打たれ、オルはトルガの剣筋を思い出しながら、隙をうかがっている。

イウはナイフを拾い、オルに加勢しようとした

刹那<sup>せつな</sup>。

「ひゃっはははははは。すぐにしなせてあげる。“フォトン”」

「きゃあ！」

足を止めて、ヒウラが両手から放った光線を伏せてかわす。

それに気を取られたオルは、下から斬撃を腹にもらってしまった。

「お、オルっ！？」

「かすっただけだ。致命傷じゃない」

オルはトルガから離れて、身をていしてイウを庇いつつ、トルガとヒウラを視界に収めていた。

ふたりはトルガから距離を置き、呼吸を整えている。

「ど、どうしたら……?」

「なんとかなる。俺を信じろ」

長剣を両手で構え直し、オルは息を吐いて気合を入れる。

「ふふ、うふふふっ」

不気味に笑うヒウラに、その周りを飛び交うヒュ。

ふたりは両手を前に合わせて祈っている。

「え?」

「なんだ」

そのヒュに、白い光が集まっていた。

陽光から抽出した、白マナだ。

ヒュはそれをヒウラに分け与えて、光魔法を唱える補助をしていた。

「さあ、いくわよ。ひかりでつつみ、やきころしてさしあげて!

“フォトン”」

ヒウラが両手に集めた光は、地面を焦がして進む熱線となる。

まだ制御ができていないのか、それはふたりではなく家屋に命中して火災を引き起こす。

ヒウラへ魔力供給をしているとヒュを見つけて、オルとイウはたがいを目を合わせて、うんとうなづいた。

「……………」

「おっと!」

そのふたりを守ろうと、トルガがオルへと下からの斬撃を放つ。

重い一撃を長剣で受け止めて、オルは声を張り上げる。

「父さんは俺がやる! イウは、イウは……ふたりを牽制してくれ!」

足でトルガの長剣を踏みつけて、オルはその胴体に刃を下から上に走らせる。

しかし、トルガはひるみもしない。

続けざまに長剣を振り下ろそうとしたが、トルガの拳が見えたため、オルは後退した。

冷や汗を手の甲でぬぐってから、オルはトルガの拳動を注視する。  
「わ、分かった」

トルガを警戒しながら、イウはふたりへと接近する。

イウを歓迎するかのようになり、ヒウラは笑顔で両腕を広げていた。

「うふふふう」

「あう」

走り回っていたヒユは、石につまづいて転んでしまう。

しかし、ヒウラはイウに夢中でそれに気づいていない。

「あゝははははははっ！　すぐにみをこがしてあげる。“フォトン

”

ヒウラは両手で育んだ光を、イウへと放射する。

イウは横に動いてそれをかわし、後方の家屋が被弾して燃えていることを視認する。

「さつきよりも、弱いような……」

ヒユの支援なしでは“フォトン”の威力は落ちる。

それを確信したイウは力強く息を吸って、フランとフロンを再び活性化させた。

「おなじいたみを、いたみをおおっ！」

「わわわわっ」

両手で光を凝縮し、ヒウラは熱線を照射し続ける。

驚いたイウは屈むも、火災が広がりがつつあることを懸念けねんしていた。

「このままじゃ」

あたりが黒煙と熱気に包まれている。

それに気を取られていたイウは、接近されていることに気づかなかった。

「イウっ！」

「え　あぐっっ！」

左側面からトルガに斬りかかれ、イウは左腕に裂傷を負ってしまふ。

「う、くっ……っ」

そのはずみでフロンを落としてしまったイウは、追撃を恐れてその場から離れる。

「このお！」

「……ッ」

オルはトルガに背後から斬りかかり、その右耳から生えた翼を切断した。

片耳を失ったことで重心が狂ったのか、トルガはよろけながら飛びのく。

「だ、だいじょうぶか？」

「な、なんとか」

「くそ。俺が、俺が、もっと鍛練してれば」

「オルのせいじゃないよ。私が、私が……っつ」

左腕を庇いながらイウは立ち上がり、オルとともに三人の動向を注視する。

ヒウラは、トルガが後退したことに ではなく、イウが傷を負ったことに歓喜していた。

「あゝはははは！ そうよ、そうして、もっとちをながすの。いたみをして、そしてねばいいの」

大笑いするヒウラの前に立ったトルガは、剣を下段に構えてふたりに歩み寄ってくる。

「う、うう……」

「イウ。逃げる」

「いやだ」

左腕から走る激痛に、イウは涙をこらえきれない。

オルは身をていしてイウを庇いながら、トルガとヒウラを視界に収めている。

「このままじゃ、俺らも危ないんだぞ？」

「オルを置いて、逃げるのはやだあ！」

涙ながらに、イウはフランの炎を強くする。

「な、何をする気だ」

「もう、皆は死んでる。だから、燃やして灰にするしかない」

「それはいいけど、俺らも巻き込まれるぞ」

火災は拡大するばかりで、次第に退路がなくなってゆく。

火中にありながらも、イウはあるものを見つけて、勝機を見出した。

「だいじょうぶ。私を、信じて」

ドキッ。

自信に満ち溢れたイウの横顔を見て、オルはほれ直してしまった。

「し、……信じるって、何をするつもりなんだ」

「足下、だよ」

「え？」

イウの言う通り、地面がぬかるんできている。

アルセスの鞘が噴水の流れを止めたことによって起きた、液状化現象。

地下水を汲み上げていた噴水の機能に障害があるため、地下水路が破裂したのだ。

「オル、フロンを使って。それが、切り札になる」

「そ、そうか」

うなづいてからオルはトルガを警戒しつつ、屈んでフロンを拾い上げようとした。が。

「やっべ。もう凍りついてるぞ！」

「え、ええ？」

すでにフロンが凍結していることに、ふたりは動揺した。

そこを、トルガは見逃さずに踏み込んでくる。

「この」

オルもその動きに合わせ、トルガの剣に重い一撃を打ち込む。

鏝迫り合いになってから、オルは声を張り上げた。

「早く、そいつを拾ってくれえ！」

「む、無理だよ。完全に、凍ってるもん」

フロンの熱を長く触れさせてしまえば、フロンの刀身が瓦解する

可能性がある。

そう考えて、イウは躊躇ちゅうちゆしていた。

ほんの一瞬だけ触れさせて、水蒸気爆発を起こしても。

一番の被害を受けるのは、イウ自身だ。

「どつしたら……」

周りの氷から溶かすことを考えても、時間がかかってしまう。

その間に、何もされないとは限らない。

「あっはははは！ さあ、くるしみながらしぬのよ」

ヒウラは不気味に輝く羽根を、耳の翼から大量に放った。

それは広範囲に散らばり、風に乗ってイウとオルの周囲を舞う。

「な、何をするんだ。母さあん！」

「リフレクトフェザー魔鏡羽根”！」

両手の指先から光を放ち、ヒウラは自身の羽根を撃ち抜く。

その光は羽根に触れることで、軌道を変えた。

「えっ」

「な、これは」

多角的な攻撃に、イウとオルは混乱する。

トルガはヒウラの光線に構わず、オルを力で押し返す。

「んなるお！」

負けじと踏ん張るも、オルの身体に光線がかすってゆく。

「敵味方、関係なしだよ」

光線はトルガをも射抜き、見境なしに飛び交っている。

「きゃあ」

「イウっ！」

光線を受けて、イウが転倒する。

その様子を見て、ヒウラはうれしそうに笑っていた。

脇にいるヒユはヒウラの服の裾を引っ張っているが、当のヒウラは意に介していない。

「くそっ」

オルはトルガを突き飛ばし、相手がひるんでいる隙にイウの下へ

と走る。

そこを逃すまいと、ふらつきながらもトルガが踏み込んだ。

「な、この……っ」

激しい打ち合い。この窮地に、オルは再び秘められた力を発揮した。

「じゃまだあああああああああああああああああ  
っ！」

オルの首にあつた、竜の角が光る。

刹那。オルの放った斬撃が、トルガの剣をバターのように滑らかに斬り落とした。

「……ぐ、ああ」

その剣閃は、トルガの左腕すらも断ち切った。

「あ、あなた!？」

肘から先を失ったトルガは大きく後退し、ちらりとヒウラを見た。右翼と左腕を失ったことで、重心が安定したらしい。

「……ッ」

「な、なんだ?」

怒り狂うトルガは残された右手と両足を、グリフィンのものへと変えた。

手足から伸びる鉤爪かぎつめは履いていた靴を破り、動きにくさにトルガは靴を捨てて、裸足になる。

刀身が欠けた剣を捨てて、右手の爪を舌なめずりをしていた。

「マジかよ。あれが、あれが父さんだって? もう、完全なバケモノじゃないか」

「お、オル……」

もはや人間の姿をしていないトルガを前にして、イウとオルのふたりは深く息を吸い込む。

「無事か? イウ」



「な、なんとか。軽い火傷だよ」

左腕の出血が激しく、イウの顔色がよくない。

背後にある火の手も、徐々にふたりへと迫っている。

それに気づいたオルは、より強く気を放出した。

「力が、みなぎるぜ……」

「あ」

イウはさっきの光線で、フロンの周囲の氷が溶けていることに気づく。

それを拾い上げて、イウは満面の笑みを浮かべた。

「いけるよ。オル！」

「え？ そ、そうか。信じてるぞ。イウ！」

オルは気流を込めた剣で、半身がグリフィンと化したトルガに斬りかかる。

「ッ……」

狂乱するトルガは、オルへ跳び蹴りを見舞う。

対してオルは冷静に左手で足首をつかみ、長剣でトルガの左胸を貫いた。

「見える。すげえよ」

「……ッア」

右手の鉤爪が迫っていたが、それはオルに到達する前に力なく垂れた。

オルは身動きをしなくなったトルガを蹴飛ばし、ヒウラに受け止めさせる。

「あ、あなた？」

「……」

「ご、めん、よ。父さ、ん」

震える手で剣を握るオルは、歯を鳴らしながら父親に謝罪した。歯を食い縛り、深く呼吸してオルは迷いを吹っ切る。

「まだ、現世に繋ぎ止められているなら。すぐにとどめを刺してやるよ」

かつて家族だった人を討つ。

それから生ずる心の痛みに負けず、オルは剣に気を集中させる。

「やだああ！ おとうさああああああああああん！」

が、ヒユの泣き声にその気が乱される。

「やだ、やだああ」

トルガに泣いて寄り添うヒユ。

ヒウラは怒りに震え、トルガを投げ捨てた後、オルへと光線を放った。

「オルう！」

「ぐあああ！？」

イウが背後から押し倒したことで、左肩をかすめる程度で済んだ。

「あ、危ないよ。よそ見、しちゃダメじゃない」

「ご、ごめん」

オルはすぐに立ち上がり、ヒウラを注視する。

軽い火傷を負った左肩を庇い、オルは右手だけで長剣を持つ。

「お、オル……っ」

「と、父さん？」

水溜まりで横になっていたトルガが、おもむろに声を発した。

ヒユは目覚めたトルガに抱きついていてる。

「ま、迷うなあ！ 早く、早く、私達を……あの世に送れええええ

ええええっ！！」

「……っ！」

正気を取り戻したトルガが、ヒユを抱き締めて叫ぶ。

「なにをいつているの？ あなた！」

「イウ王女！」

振り返って怒鳴るヒウラを無視し、トルガはイウとオルのふたりをじっと見つめている。

「え………？」

「オルを、我が息子を……頼みます」

「……っ！」

父の戦友だったトルガの言葉に、イウは涙ながらに首を横に振る。

「わ、私、私は……あなたに、酷いことを」

「あなたの父、ノロハも苦しんでいる。さあ、オルにイウ王女！早く、引導を。いつまで持つかは……」

無言で、オルは剣に気流を込める。

「ほんとに、ごめんよ」

剣を振り被ったオルは、トルガの下へと駆け出した。

「あなた！ ヒユを、ヒユをはなしなさい！」

狂乱したヒウラが、トルガからヒユを奪い返す。

「うあああああああああああああああああつ！」

決意したオルは、迷わずに長剣を振り下ろす。

「そうだ。それで、いい」

オルが放った気刃は、トルガを粉々に葬った。

「はあ、はあ、はあ！」

オルは次にヒウラとヒユを見やる。

まだ気が残存しているうちにと、オルはふたりへ踏み込もうとした。

しかし、靴が泥にはまっており、思うように動けずにいる。

「あなたがいけないのよ。あなたがあああああああつ！」

ヒウラはヒユを投げ捨てて、トルガを失った痛みをオルにぶつける。

「俺が、分からないんだな。けどよ」

ようやく、ヒウラが自分を認識してくれた。そのことに微笑むオル。

「母さん、ヒユ。次は、次は……っ！」

オルは大粒の涙をこぼしていた。

自分の父親を屠ったことに、心が悲鳴をあげている。

「オル……」

「イウ。これで、俺も君と同じだ。人殺しだ」  
「え」

「まだ終わりじゃない。気を抜くなよ」  
火災が激しくなり、すでにあたりは紅蓮地獄と化している。

噴水がせき止められたことによる液状化現象も進行し、その周囲は泥の海となっていた。

「もう、いいかな」

「イウ？」

「オル。あの噴水を、さっきの技で壊して」

「あ、ああ。分かった」

ちらりと噴水を見やり、オルはそこへと近づこうとする。

が、泥に足を取られ、身動きが取れない。

「よそみなど、しているばあいかしら？」

「やあ！」

ヒウラが光線を放とうとした時、イウはフロンをヒウラの足下へと投じた。

氷のナイフは瞬間にヒウラの両足を凍結させ、彼女をその場に固定する。

「な、なんてことを」

怒りの形相で、ヒウラはイウをにらむ。

ふと、イウは半壊の家屋の中にあるものを見つけた。

「おっと」

フロンの効力は凄まじく、ヒウラの近くにいたオルまで足が凍りつきそうになる。

「こんなの、かぜできりきざむまでよ。“ウインド”」

光の次は、風の刃。

ヒウラは自傷行為に走り、その氷の枷かせから脱しようとしている。

「ま、マジかよ。そんな強引な方法で」

「オル。早くさっきの技で！」

イウも泥に足を取られ、動けずにいる。

「くつ。急がないと、危ないな」

オルは剣を振り被り、大きな気刃をヒウラへと放った。

「え、違う。噴水に」

「やだああああっ」

しかし、それはヒウラの前を羽ばたいていたヒユに命中した。

「な」

「あ」

ヒユが粉々に飛び散るのを目の当たりにし、イウとオルは左胸を手で押さえた。

溢れそうになる涙を、歯を食い縛ることでこらえるふたり。

「あ、あ、あああ……」

それを目前で見ってしまったヒウラは、感情を爆発させる。

「うああああああああああああああああああああっ！」  
トルガだけでなく、ヒユまでも。

ふたりを喪失した痛みが風となり光となり、ヒウラの全身から具現化する。

「ゆるさない。ゆるさなあい！」

風は火災による黒煙をヒウラの周囲に渦巻かせ、光はほたるのようにな彼女の近くを妖しく漂う。

それを目の当たりにしたふたりは、逃げようにも逃げられない。

「な、や、やばいぞ」

「う、こ、こうなったら……」

すでにふたりの足は、泥に埋まっている。

イウは靴を脱いで、半壊の家屋へと目指しながら声を上げた。

「オル、早く噴水を壊して！」

「そ、そうだった。俺は……」

オルは気刃を噴水へと放つが、威力が低くて破壊できない。

「あ、焦るな」

オルの気力はもう、尽きかけていた。

疲労を自覚して、オルは悔しさに歯噛みする。



「うおっと。や、やってくれたな……」

噴水を一発で粉碎した。

栓がなくなつたことにより、中から水が噴き出す。

「よしっ」

イウは、アンカーを射出したのだ。

対船舶用兵器、アンカー。

巨大な錨いかりを打ち込んで穴を開け、船舶を沈没させるフォジスの兵器。発案者はノロハである。

錨いかりに取りつけた複数の火薬を同時に燃焼させ、推力すいりょくを与えて射出するものだ。

火薬の威力が凄まじく、撃ち出す人は火傷防止に鉄製の盾を使うなり、防護服を着用しなくてはならない。

兵器として狙いは正確でないが、船舶などの対象物は大きいものなので、かすりさえすれば十分に沈没させられる。

また、射出されているのは錨いかりだけではない。巨大な鎖もあるのだ。その鎖だけでも、船舶を沈めることが可能。

本来は空中戦に用いる兵器ではないが、台は伸縮と固定が可能で、垂直に近い角度で撃ち出すこともできる。

「な、ひ、いやあああああああああああつ！」

上空から降り注ぐ雨。

オルは転がりながら離れて、凍結するヒウラを見守った。

一方、アルセスは山道に辿り着いていた。

その山道は、異様な姿へんぼうに変貌している。

山肌からのぞくのは、青黒い光沢の鉱物。

不自然に増している重力を体感し、アルセスは確信した。

「こいつは、浮遊石レウイタイトか。ここに大きな鉱脈があるたあ、知らなかつたぜ。小さな石とかは、この島でも少しは流通してたんだが……でっかいな」

この浮遊石は、小さなものがアンカーにも使われている。錨いかりに取りつけることでそれに浮遊力を与え、重量を変化させずに実質的に軽量化し、射出の際に邪魔となる重力を緩和しているのだ。そのため、アンカーは放物線を描くことなく、どの角度からでも直線の軌道で飛んでゆく。

「うん。ボクがこの島を欲していた、最大の理由のひとつ。壊さないよう、繊細せんさいにね」

山道の土砂崩れは、フィアリウが意図的に発生させていた。

それで地下通路の存在を知らない人間を閉じ込め、また城への通行を制限したのだ。

用意周到なフィアリウを前にして、アルセスは左手の黒刀を強く握り締める。

「のんびりと、食事がよ」

岩に腰かけて、サウザン野菜バーガーを頬張っているフィアリウ。ピクニック気分のフィアリウを前にし、アルセスは溜息をついた。「ドレッシングの発案者たるお前が、飯食ってるのは……もう見飽きたぜ」

「そうかい？ まあ、僕はこれが大好きなんでね」  
アルセスは掘削くわくを黙々とこなしている竜人りゅうじんを見やった。

「藍色のドラゴン？ しかも、ノロハが素材のユイフェヴか」

その竜人は右腕に銀槌を握り、ていねいな力加減で、山道を掘り起こしていた。

耳が藍竜あいらいりゅうの翼と化し、左腕は欠損している大男。

イグノとノロハが融合して生まれた、ユイフェヴだ。

それを前にし、アルセスはうつむいて右手で頭を押さえている。

「もうすぐこの島は浮き上がるんだ。ボクは、この島にユイフェヴの楽園を作りたいんだよ」

抜き身の黒刀を地面に突き立て、自身もユイフェヴ化するアルセス。  
ス。

耳は黒い翼に変化し、その黒羽くろうは風に散りゆく。



「どういっつもりだ？　ファイアリウ」

ノロハを警戒しながら、アルセスはファイアリウに真意を問う。

「知りたいのかい？」

「ファイアリウ。ユイフェヴの楽園を作ると言ったな。それは、オレへの罪滅ぼしか？」

「違うね。ボクはただ……ただ、実姉じっしを殺したいだけなんだよ」

ハンバーガーを完食して、ファイアリウは岩から下りた。

「姉、だと？　肉親を殺すことが、ユイフェヴとどう繋がるんだ」

目を白黒とさせていたアルセスは、黒刀の切っ先をファイアリウに向ける。

真剣な眼差しで、アルセスと刀を見つめているファイアリウは……静かに語り出した。

「ボクは、日本人の女の子だ。偽名はイノウラス・ファイアリウ。真の名を“夢代時乃ゆめしろときのみ”っていうの」

その告白を受けて、アルセスは刃先をわずかだが落としてしまった。

「どういう意味だ？　さっぱり解りやしねえ」

「言葉通りさ」

肩をすくめて、ファイアリウは首を左右に振る。

「ボクの姉は、“夢代時美ゆめしろときのみ”というんだ」

「だから、それがなんだって聞いてんだよっ！？」

ファイアリウが目線をそらさないことに、アルセスは苛立ちいらだを覚えていた。

迷いも曇りのないその瞳は、それが真実だと物語っているからだ。「だったら、てめえひとりで姉を殺せばいいだろうがあ！　オレらを巻き込んで、謝って済むと思うなよ！？」

「謝る？　ボクはその姉に、半殺しにされたんだよ？」

「な……ど、どういっつもりだ」

フィアリウが泣いていることに、アルセスは衝撃を受けた。それでも、フィアリウは目線を外そうとしない。

アルセスも、その純粋な眼差しから目を背けることができない。「姉は破壊神の力を、僕は創造神の力を与えられた。ボクらの絆を壊した、あの少女が許せないんだ」

「な、なんだ……と？」

「その胸に抱えた本のページを切り取り、不運と災難をばらまく。ボクはその少女を“ブック”と呼んでいる」

「“ブック”……？」

「そうさ。そいつが、ボクに創造の力を与えた。お姉ちゃんには、破壊の力をね」

深呼吸して、フィアリウは決意を表明した。

「ボクはお姉ちゃんを止めるために、殺す。今は破壊衝動が静まって、おとなしくしているけど……いつかまた、発狂する。本の少女も、この手で始末しなくてはならない。そのためにボクは、日本でふたりの少女を……異世界に追放した。“折笠華葉”と“虹理瑠璃”のふたりを、ね」

「な、なんだって……？」

「アルセス。いつか君は、その少女ふたりどちらかに仕えることになるよ。ボクはある女性から助言を受けて、そのふたりが……未来の扉を開くと確信を得た。何せボクはこの通り、扉を有しているからね」

肩をすくめて、フィアリウは竜人へと目線を向けた。

「お前には、未来が見えるのか……？」

「見えないよ。ボクはただ、扉を開くことしかできない」

憂鬱そうなその眼差しは、再びアルセスを射抜いた。

「ボクにできることは、この星を創造して……力を蓄えることだからね」

「この、星をお前が……だと？」

銅扉の首飾りに触れて、フィアリウはにっこりと微笑んだ。

## 第5話

『あっひゃひゃひゃっ！』

新体操に使うリボンを握り締めた少女は、回転しながら、それを優雅ゆうがに振り回していた。

ひらひらのリボンは壁の外に貫通して、体育倉庫にある分厚い金属の戸すらも、滑らかに切断する。

『う、うそでしょ……？』

『あ、あ……っ』

その壊れた少女の有様を目の当たりにした、ふたりの少女。

夢代時乃と、角沢深汐すみさわみしおだ。

震える手で竹刀を握り締める深汐は、体育倉庫内の跳び箱に腰を下ろした、本を抱える少女をにらみつける。

『あ、あなたは……時美に、何をしたのよっ！？』

竹刀の先端を向けて、深汐はその中に飛び込もうとしたが、彼女は足を止めて後ろに下がる。

『うふふっ』

上から、照明が落下したのだ。

そのレンズの破片を竹刀で打ち払い、深汐はリボンを片手に踊る時美を見やった。

『あっはははは』

その手に握るリボンは、七色に彩られていた。

不気味な彩りは光となって放たれ、それは周囲にあるものを貫き、粉碎してゆく。

『お、お姉ちゃん……っ！』

吹奏楽で使っていたシンバル一組を手にして、時乃は姉に接近する。

『と、止めなくちゃ』

『……ねえ、時乃』

時美は、よだれを垂らしながら笑っていた。

『お、姉ちゃんっ？』

『この力があれば、あればさあつ！ わたしたち、悪者退治ができるよおつ。えっへへへへへへへへえっ』

姉の狂気に間近で触れて、時乃はシンバルを落とし、左胸を両手で押さえた。

膝を崩した時乃は呼吸を乱しながら、涙目で姉を見つめている。

『双子の姉妹でしょう？ 通じ合う君も同じように、狂えばいい。

破壊は創造を、創造は破壊がなければ意味がないもの。だから……』

本の少女は、自身が持つ本のページをちぎってみせた。

それから少女は瞬く間に、時乃の眼前へと踏み込んだ。

『や、やめてええええええええっ！』

深汐の叫びも空しく、本の少女はちぎったページを時乃の左胸に押し当てた。

『あ、い、いつのまに……あ、ぐううああ、いやああああああああああああああああああああっっっ！？』

自分の心身に得体の知れない力を注入されて、時乃は絶叫している。

深汐はそれを止めさせるべく、竹刀で本の少女に殴りかかった。

『えっ！？』

深汐はまた、足を止めた。

『ぐ、な、なんだ……っ？ おまええっ！』

『見つけた……やっどー！』

深汐よりも早く、本の少女の胸に刃を突き立てている者がいたからだ。

それは上に白い装束をまとい、下は藍色の袴に足を通してている。

その両手には、鏡のように透き通った白銀の刀が握られていた。

童色の長髪を振り乱して、空色の眼で、巫女は本の少女を射すくめている。

『も、もう手遅れだ……よっ』

「　　っ」

周囲に粉雪をまとう巫女は、とっさに本の少女を蹴飛ばした。それから上半身を反らして、時美が放った七色の剣気けんきをかわす。

「時乃、ちゃん？」

無言でうづくまる時乃に駆け寄る深汐。

巫女は時美を一瞥するも、彼女がふたりを敵と見ていないと察し、本の少女へと踏み込んだ。

「絶望を振りまく根源よ。ここで朽ちるがいい！」

巫女の白銀の刃を、分厚い本で受け止める本の少女。

貫こうと力を込めるも、堅固なそれに阻まれて、巫女は歯噛みしている。

「君たちだって、勘違いして倭神わしんを葬り去ったじゃないか……っ！」  
「……………っ!？」

そう指摘されて、巫女の手元が狂う。

刀を握り直した巫女はその本を断ち切ろうと、青白い靈気れいきを刀身に注ぎ込んだ。

「何もかも奪った君たちのせいで、君たちのせいでええええええっ

！許せなくなっただんじやないかああ……」

「……………っ！」

巫女は刀を本から引き抜き、大きく後退した。

その眼前を、七色の光が通過する。

それは体育館の磨かれた床を黒色に焦がし、この場所を破壊してゆく。

「えっへへへへ。悪い人、退治しなくっちゃねえええええっ」

リボンを振り回しながら、時美は巫女へと襲いかかる。

時美に狙われた巫女は、たまらず声を張り上げた。

「蓮はすっつっ！」

本の少女の背後に、もうひとりの巫女が現れた。

新たな巫女はこの中にいる誰よりも背が低く、それでいて強烈な存在感を放っていた。

『 雷遁、白菊！』

『 ちいつ！？』

本の少女は、雷電がほとばしる巫女の右腕を跳んでかわした。長い茶髪を乱して、小さな巫女は目で本の少女を追いかける。その右腰に差してある刀の柄に左手を添えながら、その茶色の眼を見開いた。

『 さあ、終わり焉む者よ。……………全部を壊しちゃえ』

小声でつぶやいた後、本の少女は再びページを破り、上からそれを時美へと投じた。

『 させない！』

深汐は時美の前に立ち、そのページを竹刀で叩き落とそうとした。

が、それは竹刀を擦り抜ける。

『 あ、きやあああああああつ！？』

そのページは深汐の中に取り込まれてしまった。

四つん這いになった深汐は嘔吐して、自身の中にうごめく力を必死に抑えている。

『 ちつ。ま、いつか。今のままでも充分だし あ、ぐうっ』

宙にいた本の少女は、その胴体に深い切り傷を負わされた。

床に転がり落ちて、その身体から赤いものを垂れ流す。

『 な、んだ……………？ なにをしたあああああつ！？』

本の少女は、自分を斬り落とした者を目で探している。

『 蓮！ その子は本体じゃない！』

『 え？ みぞれ、それは』

どういう意味だと、問いかける前に。

紙くずと化した本の少女を目の当たりにして、蓮と呼ばれた巫女は驚愕していた。

『 必ず、取り返してやる……………っ』

その少女の脇にあった本が開かれて、それは燃え尽きるような形でなくなつた。

『自滅、したのかい……?』

『蓮。あの子は、まだ生きている。それよりも、こちらの少女達を  
つつ』

みぞれと呼ばれた巫女は、頭を引かれて背後を振り向く。

『くっ』

時美に髪をつかまれていることに気がついたみぞれは、躊躇なく自身の長髪を刀で切り離した。

『ちっ。でも』

『……っ!?!』

虹色のリボンが、みぞれの眼前へと迫っている。

『ぐうああああああっ!?!』

銅扉銅扉の盾と化したシンバルを持った時乃が、狂った姉の攻撃を防いでいた。

しかしリボンはその盾すらも貫き、時乃の胸を深くえぐっている。

『えっへへへ。死んじやいなよ……さあ、さあっ!』

時美は目の前にいる妹を、足蹴にする。

自分が妹を手にかけていることに、もはやためらいなどない。

『お、ねえちゃ……ぐああああああっ!?!』

『えっへへへへっ。壊れちゃえ、死んじやえよおおっ!』

見兼ねた蓮が、右目だけを動かした。

その瞬間、時美の左肩に大きな裂傷ができる。

『あ、ぐああああ……っ!?!』

血しぶきを上げて、全身に赤を浴びる時美。

あまりの激痛に耐えられず、時美はリボンから手を離して、ああむけに倒れた。

『あ、あ……時乃っ? わたし、いったい何を……』

正気を取り戻した時美は、横になったままで血にまみれた自分の両手を見つめていた。

『みぞれ、さっさとそいつを封じ込めろ!』

『ええ』

みぞれは時美の下へと走り、その胸に左手を差し込んだ。

『あ、ぐああああっ!?!』

のたうち回る時美を押さえながら、みぞれは全身から青白い光を発して、息を乱している。

『な、なにを……してるの』

力の胎動に悶え苦しんでいた深汐は、片膝をついてみぞれをにらんでいた。

『破壊衝動を、導術ようじゆつで抑え込んでいるのよ……っ!』

額から大量の汗をかいて、みぞれは時美の中で暴れる衝動を封じ込めていた。

『やばいね……この子、死にかけている』

一方、蓮は両手で印を結んで、とても強い輝きを手から紡ぎ出した。

それを時乃の胸に当てて、その命を繋ぎ止めている。

『ね、ねえっ。ふたりは、どうしちゃったの……?』

深汐の問いに、ふたりは答えない。

というより、答えられない。

その雰囲気を感じて、深汐は口を結んで、深呼吸を繰り返す。

『え……? う、後ろっ!』

『っ!?!』

深汐はみぞれのほうを向いて、大声を上げた。

みぞれはすでに時美から離れて、再び現れた本の少女をにらんでいる。

『大事なページを、壊さないでよっ!』

本の少女は分厚い書物を広げて、それに時美を取り込んだ。

『なっ!?!』

『と、時美……』

みぞれと深汐が声を出している間に、本の少女は忽然こじつぜんと姿を消していた。

火の粉舞う体育館の中には、生き抗う時乃の呼吸だけがこだまし



ていた。

「……………」

フィアリウの告白を受けて、アルセスは黒刀を構え直していた。

「何も言ってくれないんだね」

「姉と、その本の少女……………ふたりを殺害するために、お前はユイフエヴっていう生物兵器を創造したのか」

アルセスの問いにフィアリウは、掘削作業を続けるノロ八を見つめながら答えた。

それが気に入らないのか、アルセスは目を細めている。

「フェドウもね。まあ、あれは失敗作だけど……………十分な爆弾として使える」

「……………狂ってるな。お前」

「創造には、狂気が必要だよ。そうでなければ、あのふたりには勝てない」

肩をすくめて、フィアリウはその手で涙をぬぐった。

それからアルセスに向き直って、彼女は溜息をついている。

憂いうれの眼差しを向けながら、アルセスは全身から黒い気を現出させた。

「この星の創造主たるお前が、お前が……………いや、考えるのはよそう」

「黒マナか……………。本気で、ボクをやるつもりなんだね。けどさ……………」

ボクは、君たちを誕生させてよかったと思っている」

「戯言おれごとはよしな。要するにオレらは、お前にとっては生物兵器に過ぎないんだらう!？」

「ちがうっ!」

フィアリウの涙ながらの叫びに、アルセスは戸惑っていた。

一呼吸入れて、アルセスはノロ八を見やる。

「なら、ノロ八を解放してやれ。いつまで、人形遊びに付き合わせるつもりだ」

「……………」

静かな口調で、アルセスはフィアリウにそう頼んだ。

「あいつは酒飲まねえからさ。どんちゃん騒ぎした想い出はないけどよ。……ノロハは、オレにとっては大切な戦友のひとりだ。不死者にして、侮辱するのはもう止める」

歯を食い縛り、アルセスは心の中にある迷いを捨てた。

非情になりきれなければ、目の前にいる少女フィアリウには勝てない。

腹を括り、その覚悟を黒い刀身に宿した。

「それによ、何が違うってんだ？ 結局は、それも嘘じゃねえか。

姉と本の少女を殺すために、オレらが生み出された。星も、生物も、何もかも全てがな」

低い声でフィアリウを責めるアルセス。

その目にも、声にも、怒気が含まれていた。

少しずつ、刀身にまとう黒い気の密度が増してゆく。

「確かにね、最初は……そんな理由だったよ。けどね、アルセス」

「なんだ？」

「情が、移らないわけがないだろう？」

「……………」

右手を頭に置いて、アルセスは過去を振り返っていた。

「君の、ボクを打ち倒す気概きがいは買うよ。ボクを倒すことができなければ、お姉ちゃんとブックには敵わない」

一度目を閉じて、それからフィアリウを見つめ直すアルセス。

再び生じた迷いを、心の中から振り払った。

「つたくよ。お前が何を背負ってるのか知らないが……。お前ですらも、瀕死になるまで追い詰められたんだろう？」

「……………。ああ」

「そいつらを倒して、お前はどつするんだ？」

「……………」

「決めてないのか」

右手を刀の柄に戻して、アルセスは呼吸を一度止めた。

対するフィアリウは、潤んだ瞳で空を見上げている。

「お姉ちゃんも、次元を飛び越える力があるんだ。現に、次元を斬り裂く力だったよ。あれは……空間が歪んでいたもの」

「なんだって？」

斬りかかろうとしていた矢先に、フィアリウから奇妙な事実を告げられた。

アルセスは呼吸をし直して、耳を傾けている。

「ボクは、この扉の力で地球とここを行き来できる。この星の時間は、地球とは流れ方が違う。むしろ、こっちの世界のほうが早い。

時流の仕組みなんて、ボクには解読できそうにないけど……」

銅扉（トウヒ）の首飾りを握り締めて、伏し目がちにフィアリウは言葉を続ける。

「要するに、こっちの星にいれば……いろいろと作戦が立てやすいってのか？」

「だね。ボクはブックの目的が何なのか、詳しくは知らない。ただ、あのふたりは……いいや。ひとりは、何か知っているようだった」

肩をすくめて、アルセスは刃先を地面に落とした。

「まとまってねえから、よく解らないが……つまり。そいつらは、こっちの世界にもやってくる可能性があるって言いたいのか？」

「……………。その通りだよ」

深くうなづいて、フィアリウはノロハのほうに手をかざす。

ぼんやりと輝いたノロハはカードに変化し、フィアリウの手元に舞い飛ぶ。

頬を緩ませている彼女を見て、アルセスは切っ先を上げて警戒を強めていた。

「な、何の真似だ？」

「君が言い出したんだらう？ ほら、受け取りなよ」

フィアリウはもう一枚のカードを加えて、二枚のカードをアルセスへと投じた。

「……………。意外だな。お前が、素直に応じるなんて」

面食らっていたアルセスはその二枚を受け取り、ジーンズのポケットに突っ込んだ。

「お姉ちゃんが再び正気を失う前に、ブックが鳴りを潜めている間に……。ボクは、対抗しうる力を育まねばならない」

話を戻されて、アルセスは溜息をついた。

このままでは、いつまで経っても始まらない。

「そのブックつてのは、この世界も滅ぼす可能性があるっていうんだな？」

「うん。さて、悠長におしゃべりしている暇はなさそうだよ？ アルセス」

全身で感じる、この重み。

鈍く、じつくりと増す重力。

アルセスの額から、汗が一粒落ちた。

「そう、みたいだな……。お前との語らいも、ここまでか」

浮遊石の間近だということ、アルセスはすっかり忘れていた。

刃先をフィアリウへと向け直して、一呼吸入れる。

とうとう、決別の時なのか　アルセスは、昂揚を抑えられずにはいられなかった。

「さあ、ボクも本気でやるよ」

首飾りを引きちぎり、フィアリウは両腕に銅扉の盾を出現させた。それを装着して、軽く打ち鳴らしている。

「太陽が真上にあるなら、やりやすいもんだ」

手始めにアルセスは、耳の翼から黒羽を放った。

「なにっ？」

影に羽根を撃ち込まれたフィアリウは、足が動かないことに歯噛みする。

「いつくぜえ！」

フィアリウの足技を警戒するアルセスは、下段の構えで突っ込んでゆく。

「なあんてね」

その笑みを見た瞬間、アルセスは踏み込むのを思い留まった。

「羽根は、大量にサービスしたんだが……」

フィアリウは地面へと拳を振り下ろして、土煙つちけむりを起こした。

それで羽根を吹き飛ばした後、足が動くかどうか確かめている。

「よしっ」

「はったり、だったのか」

だまされたと確信したアルセスは、好機を逃したことに首を振る。

「さあ、場所を変えようか。アルセス」

「なんだって？」

「ここでやりあうと、浮遊石が壊れるんでね。それに、君は解っているだろう？」

「……………っ」

過去の出来事を思い出して、アルセスは浮遊石の鉱脈を振り返った。

「これは、黒マナの塊みたいなものだ。言うなれば、生きていない爆弾フェドゥに等しい」

「な、なるほどな……………」

冷や汗を流しながら、アルセスは黒い鉱脈から離れる。

フィアリウも、アルセスと同様に後ずさりしていた。

「さあ、城に向かうよ。ついてきて」

「……………解った」

一方、イウとオルはというと。

「く、息が……………っ」

「オル、無理しなくていいよ……………」

ふたりは泥土でいどを裸足で歩き、山のほうを目指していた。

噴水がもたらした雨により、火の勢いは一時弱まっている。

それでもふたりを取り囲む炎は、熱と黒煙をまき散らしながら迫っていた。

「うん」

「だ、だいじょうぶか？」

イウの手を引いていたオルは、一度足を止めて、彼女の前で屈む。

「う、うん」

「俺におぶされ。イウ」

「え……？ あ、うん」

ぼうつとした頭で、イウはオルの背中に身を預ける。

左腕の出血が酷く、右腕しか前に回せなかった。

「ば、バッグの中に救急箱があるの。そ、それを……」

「ああ。今は、ここから離れることを考えよう」

オルはイウを背負い、燃え盛る城下町を進んでいく。

「はあ、はあ、くう」

乾いた地面に辿り着いたオルは、周りに火の気がないことを確かめてから、物陰でイウを下ろした。

オルはイウの腰に巻きつけた鞆を外し、中から救急箱を取り出した。

消毒薬に包帯、ガーゼにテープと、必要なものを手にして、イウの左腕を処置する。

「あ、ありがとう」

「む、無理はするなよ」

「うん」

左腕の処置を終え、鞆の中に救急箱を収めた後。

再びオルは、イウに背中を向けた。

「な、なに？」

「乗れ。おぶってやるから」

「え、も、もういいよ」

「歩くのもつらいんだろ？ いいから、こついう時は俺を頼れ」

「うん……」

おずおずとイウは、再びオルの背中に身を預けた。

両腕を前に回して、落ちないように密着している。

「う」

「どしたの？」

「い、いや」

背中に感じるイウの温もりに、オルは気恥ずかしさにそっぽ向いた。

「よつと」

「あ、ぐ……っ」

立ち上がるうとした時、イウの身体を揺さぶってしまったらしい。

「ご、ごめん。傷に響いたよな」

「だ、だいじよぶ」

涙ぐんでいるイウ。

オルは申しわけない気持ちで、ゆっくりと立ち上がった。

それから後ろを向くも、イウの顔が近くにあって驚き、オルは前を見ながら歩き出す。

「痛くないよな？」

「平気、だよ」

耳元でのイウのささやきに、オルは心中穏やかではなかった。

「あ、アルセスさんのところへ急ごう」

「うん」

背後には、燃え盛る無人の町跡。

正面には、紅蓮に染まる森林。

青い空は黒い煙に彩られ、地上を照らす日の光が弱くなっていた。

「あのさ……」

「ん？」

ためらいながらも、イウはオルに今までの経緯いきわづらひを説明した。

「そう、だったのか」

ノロハを不死者にされ、それでフィアリウに脅されて。

イウは、オルを助けるために残酷なことをした。

「まあ、今となっちゃ俺も同罪だけどな。この手で、家族を  
言いながら、苦笑しているオル。」

イウはその背中に頭をうずめて、首を左右に振った。

「あの時ね、私とオルの運命の赤い糸は切れちゃったのかな。そう思ってたんだ」

「え？ 牢屋での、ことか」

「……うん」

一度足を止めていたオルは、遠くにある石壁を目指して、再び歩き出した。

「運命の赤い糸が切れたとしても、俺は何度でも結び直すよ。元々繋がってないとしても、強引にでも結んでやるさ」

「え」

その言葉の意味に気づいて、イウは赤面する。

「俺は、最低だな。大好きな女の子を、手にかけてようとしたなんて」

「だ、だ、だ、すつ？」

イウの動揺を間近に感じて、オルは頬を朱に染めていた。

「お、落ち着けよ。イウだって、俺に告白した　むぐ」

「わわわわ」

恥ずかしさのあまり、イウは片手でオルの口を塞いだ。

「ぶはあ。イウ、息を詰まらせるな。危ないだろ」

「い、ごめん」

後ろをちらりと見やり、オルは止めていた歩みを進め始める。

「いいさ。これからは、俺が守ってやる。心配するな、イウ」

「ん……」

その言葉に、イウは胸が高鳴ってしまふ。

「あ、あのさ」

「なんだ？」

「お、重い……よね？」

イウは恥ずかしさに耐えられず、そんなことをオルに聞いてしまった。

「自覚があるんなら、努力したらどうだ？」

「あーっ！ ひっどい、私そんなに太ってないよおっ！」



「おいおい。俺は、一言も重いなんて言っていないぞ」  
「うっ。じゃ、じゃあ……なにっ？」

頬をふくらませて、イウはオルをにらむ。  
「軽いから、だいじょうぶだ」

「……っ！」

イウが照れていると解つて、オルは微笑みをこらえきれない。  
ふと、焦げくさい臭いがふたりの鼻をついた。

「まだ、戦火の中だったな。油断は禁物だ」  
言いながら、オルは森林のほうを見た。

石壁の向こう側は赤く発光して、黒煙が空に立ち上っている。

「町も、森も、火の海だな。どうやって、ここから脱出すりゃいいんだろうな」

「あ」

森林火災を見て、イウは思い出した。

「イグノ、イグノは……」

「え？ あ」

オルも、ようやく思い出した。

ふたりは息を飲んで、空を見上げる。

「ぶ、無事だよ」

「ドラゴンが、炎ぐらいでくたばるはずがないさ」

「でも、姿を見せてないってことは……」

何かあったんだ。そう感じるふたり。

「だいじょうぶだよ。イグノは、強い。私は信じてる」

「なら、いいんだけどよ」

イウのことを許せても、イグノのことは別。

オルは父を焼き殺したイグノを恨んでいた。

「……オル？」

「なんだよ」

その横顔を見て、イウはオルの気持ちを察していた。

唇を噛み締めていたイウは、小声でつぶやく。

「イグノは、悪いドラゴンじゃないよ」

自分の感じたままに、イウはオルに話してみた。

「イグノは、私のパパと何かあったみたいなの。恩返しとか、言っ  
てたし。何かあったのかは詳しくは聞けなかったけど……」

「ノロ八王への、恩返し？」

「さあ……？」

ふたりして、首を傾げている。

オルは山道のほうを見やり、それから城をじっと見つめていた。

「その、オルが下げてる角。多分それ、イグノの欠けた左角だと思  
う」

ぎゅっと、オルはそれを強く握り締める。

「オル。イグノが、憎いの……？」

「……………」

「ねえ、オル」

「憎いさ。けど、んなこと言ったところで何も変わらない。できつ  
ることなら、真意を聞きたい。生きていればいいけど」

目を細めていたオルは、腰に差してある剣の柄に触れて、深呼吸  
をしていた。

「この気配。あっちか？」

オルは山道のほうを見やり、耳を澄ましている。

「アルセスさんとフィアリウ……ふたりが、城にいるな」

「え？」

ふたりの気配を感知しているオルを見て、イウは口があんぐりと  
なる。

「急が なっ！？」

オルが歩き出そうとした時、不意に地面が揺れた。

その地鳴りは、城下町を囲む石壁を少しずつだが崩してゆく。

「ま、まずいな。急いで、ここから離れたほうがよさそうだぞ」

「う、うん」

すでに地面には亀裂が走っており、平坦さは失われ、段差ができ

つつあった。

「山へと走るぞ。イウ、痛みは……」

「我慢できる。お願い」

裸足で軽快に走りゆくオル。

壊れていた石門を見つけて、形が崩れていた石壁とそれを階段に見立てて駆け上がり、ふたりは山道のほうへと降り立った。

十年前。高山地帯の森林にて。

『ほらよ』

ノロハは片腕で、ジャガイモの入った紙袋を洞窟の前に放り投げる。

『……………。何の真似だ？』

その中から顔を出したのは、藍色の飛竜。

息を乱しているイグノは、先日の戦闘の傷がまだ癒えていない。

それは、ノロハも同じであった。

『無事でよかったぜ』

『フッ』

たがいの顔色をうかがって、同時にふたりは笑う。

イグノは穴の中から顔だけを出して、その紙袋を凝視している。

『それは、儂の角か…………？』

『ああ。悪いな、勝手に彫ほらせてもらった』

首から下げたそれを見るなり、イグノは溜息をつく。

その返事にあきれている様子だった。

『構わん。どうせ、もうくつつきもしないし再生もしない。儂は老

体だからな』

『へっ。もうすぐ死ぬみたいな言い方はよせよ』

『……………』

無防備に、イグノの目の前であぐらをかくノロハ。

それに驚きさえするが、イグノも同じようにくつつるぐことにした。

「やっぱ、お前の仕業か」

「何がだ？」

「いいや。最近、妙にグリフィンを見ないなと思っていたら……イグノが捕食してたんだな」

イグノの脇にある、骨の一塊ひとかたまりを見つけたノロハ。

「肉だけだと腹を壊すぞ。たまには野菜を食え」

「……………」

「ああ。そいつは、俺の親友が精魂込めて作ったものだ。洗って持ってきてあるから、安心して食ってくれ」

「そのためだけに、ここを訪れたのか？」

目を見開いてイグノは、立ち上がるノロハに問いかけた。

「ん？ そうだけど、迷惑だったか？」

「いいや……。ありがたく、ちようだいしておこう」

「そうか。あまつてたんでな。残さず食ってくれよ」

手を振りながら、この場を立ち去るノロハ。

イグノは久方ぶりの菜食さいしょくに、胸を躍らせていた。

城の、吹き抜けの中庭に立つ、アルセスとフィアリのふたり。死臭とアルコール臭が漂うここは、羽虫と鳥が集っていた。

「……………」

「……………」

おたがいに無言で、視線を交わしたまま。

沈黙に耐え切れなくなったのは、アルセスのほうだった。

「なあ」

「ん？」

刀を正眼に構えて、アルセスはフィアリウに問いかける。

耳から生えた黒い翼。その羽根の毛が、逆立っていた。

「お前にとつて、オレらは……ユイフェヴは、お前の姉と、そのブツクに対抗しうる力なんだろ？」

「……ああ」

「お前でも勝てない相手に、オレらが敵うと本気で思っているのか？」

その質問を受けて、フィアリウはにこやかに笑ってみせた。

「勝てるさ」

自信に満ち溢れたその表情に、アルセスは驚きを禁じえなかった。「例えボクが勝てなくても、ボクが追放したあの少女ふたりが、アルセスをはじめとしたユイフェヴが……必ずや。何とかしてくれると信じている。ボクはそのためになら、どんな罪すらも背負う。あの雪女の受け売りだけどさ……どちらかを選ぶとするなら、世界が全滅するよりも、自分が汚名を着て半滅するほうを選択するってね。自らを犠牲にしてまで、何を救おうとしているのか。」

アルセスは、フィアリウの意志が何に支えられているのかを悟った。

「……お前は、間違っている」

「何がだい？」

「どうして、それを今まで隠していたあ！？」

「……」

アルセスの怒声を耳にして、フィアリウはうつむいた。

唇を震わせて、負けじと彼の瞳を見つめ返している。

「最初から言ってくれりゃ、オレだってお前に刃を向けることなんぞ……」

「言えると思っているのかい？ 実の姉を殺したいなんて、打ち明けられるとでも……？」

そう言われて、「確かにそうだな」と納得するアルセス。

右手で頭をかいてから、改めて刀を両手で握った。

「どんな理由であれ、ボクがなそうとしていることは間違いさ。けどさ、そのまま放置して……全てが滅ぶなんて、そっちのほうが好きだと思わない？」

「……」。お前は、オレと同じだな」

アルセスは片目を閉じて、涙をこらえていた。

「黒月鳥……ルナティフス。オレが不吉と呼ばれるゆえんは、いつもひとりなっちまうってことだからな。望まぬうちに、オレの周りにあるものは……いなくなっちまうんさ」

「それは、ボクのせいだつて」

首を左右に振って、アルセスはフィアリウの言わんとすることを否定した。

「違う。オレは、やっぱり仲間なんて作っちゃいけないんだ。だつてよ？ オレが大切だつて思ったものは……何をどう抗ったつて、全部……いなくなっちまうんだから、さ」

フィアリウは、思わずたじろいでしまった。

号泣するアルセスは、その涙で刀身を湿らせている。

「フィアリウ……いや、時乃。お前だつて、大切なものを必死で取り戻そうとして、繋ぎ止めようとして、それでもダメで……っ」

何も答えず、フィアリウは拳を上にかざした。

「それ以上は言っちゃダメだ……っ」

涙が止まるほどの殺気 魂までもが震わされる、凶気。

それを全身から発して、フィアリウはアルセスを見据える。

「お、お前……っ」

アルセスは黒刀を地面に突き刺し、膝の笑いを押さえるために歯を食い縛る。

ぼとぼと、中庭に小鳥が落ちてきた。

死臭に群がっていた羽虫も、動かなくなっている。

「確かに、姉は大切だよ……けどね。あのまま、感情を壊されたまままで放置して……もし。もしだよ？ 何もかもを破壊して、それから自分が壊したものを振り返ったりしたら、もう……お姉ちゃんは、自我を取り戻せなくなる。ボクは見たんだ。見させられたんだ。夢の中で、未来を……ね」

「み、未来？ どういうことなんだ」

「正確には、死の淵で見させられたつてのが正しいのかもね……」。

あの女性が、ボクをここまで導いてくれた。もう、後戻りはできない。するわけにもいかない。ボクがボクである理由は、あの日から定まったんだ」

フィアリウの言動を理解できないアルセス。

何本もの針が刺さったかのような、肌を感じる凶気に……彼は、呼吸を乱されていた。

額から出る冷や汗の量は尋常ではなく、対峙しているだけで疲弊してしまっている。

「こ、これが……お前の姉も、放つものなのか？」

「体感してはいないけど……おそらくは。そして、ブックも」

その事実を突きつけられ、アルセスの心は折れそうになっていた。

『ぼ、くは……』

『時乃ちゃん』

一命を取り留めた時乃は、深汐に抱きつかれていた。

『蓮。ご苦労様です』

『い、いいって……こと、よ』

語尾をはつきり発音できないほど、蓮は疲弊していた。

尻もちをついて、蓮は乾いた喉を唾で潤している。

みぞれもまた、立っていられないほど息を乱していた。

『それより、みぞれ』

『だいじょうぶです。この子の姉にあった衝動は、封じ込めることに成功しました。ですが……』

『それも、時間稼ぎに過ぎない？』

『ええ……。まだ、皆がそろっていないというのに……っ』

こつも早く、事態が動き始めていた。

それに焦りを感じていたふたりだが、目の前にいる時乃と深汐を見て、冷静さを取り戻す。

『な、なんなの？ あなたたちと、あの子は……時乃ちゃんと、時美をどうしたいのっ？』

深汐は、ふたりの巫女を前にしておびえている。

それと、自身の中に渦巻く力の奔流ほんりゅうに戸惑っていた。

『みぞれ。このふたりは……』

『今のうちに、抑えたほうがいいでしょう』

短くなった董の髪に一度触れてから、みぞれはふたりの胸に手を当てた。

『な、何を……？』

『ぐ、うう……』

『じつとしてなさい。あなた達も、あの女の子のようになりたいのですか？』

それを耳にして、時乃と深汐のふたりは抗うことを止めた。

『いつたい、これはなんなの……？』

『……。“記憶”です』

深汐の問いかけに、小さな声を返すみぞれ。

『眠りなさい』

ただ一言告げてから、みぞれはふたりに青白い光を放って気絶させた。

『随分と、乱暴な真似をするね』

倒れるふたりを見つめながら、蓮がつぶやく。

『意識がある状態では、制御がね……それに、ふたりには見てもらいたいものがあるから』

処置を終えて、みぞれはおもむろに立ち上がる。

『蓮。この場の始末は後にして、すぐに離れましょう』

『……だね』

人々が集まる前に、みぞれは時乃を、蓮は深汐を抱えて。体育館の外に飛び出し、いずこへと姿を消した。



「アルセスさん！」

城内に響くのは、オルの声。

フィアリウとアルセスは、この場にイウとオルが駆けつけたことに気がついた。

「お前ら……あの三人を、やったのか」

ふたりを振り返るアルセス。

イウとオルは、彼の耳から生えた黒い翼を見て、絶句していた。

「案ずるな。オレは、オレのままだ」

目線をフィアリウへと向けて、黒刀を構え直すアルセス。

それを見て、安堵したふたりは　ともにフィアリウを見据える。

「ゆ、許さないぞ、フィアリウ！」

「もう二度と、こんな悲劇を繰り返さないためにも……ここで、あなたを討つ」

オルはとつさに長剣を抜いて、イウもフランを左手に握り締めている。

アルセスは複雑な面持ちで、フィアリウを見つめていた。

「しょうがないね。君たちがやる気だというなら、相手をするしかない。いずれにしても、君たちがここにいと邪魔だからさ」

手始めに、両手の親指で空気の弾丸を　指弾を上空に撃って、

開始の合図を鳴らした。

塵ちりが視界を遮り、フィアリウの姿を隠してしまう。

アルセスは、フィアリウが本気じゃないと知って歯噛みしていた。

「オル、姫を連れて廊下に向かえ。屋内のほうが何かと都合がいい」  
中庭の半分は、小鳥や羽虫の死骸しかいで埋め尽くされていた。

足場の悪さは、回避行動に支障を来たす。

「は、はいっ！」

廊下に移動し、イウとオルは中庭にいるアルセスを見守る。

「さあ、お手並み拝見といこうか」

フィアリウは盾を前にして体当たりをする。

対するアルセスは横に飛んでかわしつつ、擦れ違いざまに柄の先

端でフィアリウの額を打った。

「ぐ、あああつ!?!」

意外な攻撃に動揺したフィアリウはバク転して、その勢いに任せ壁に足をつける。

アルセスは地に足をつけて、イウとオルがいる廊下へと歩を進めていた。

「やるね。正直、そんな攻撃が来ると思わなかった」

「……………」

壁を歩きながら、フィアリウは拳を振って壁に風穴を開ける。

圧倒的な力を見せつけて、フィアリウは再び凶気を放った。

「なっ!?!」

「う、ぐえええええっ」

オルは体勢を微かに乱すだけで済んだが、イウは膝を崩して嘔吐していた。

「だ、だいじよぶか……姫」

対峙するアルセスは、黒刀を強く握り締めて、その痛みで恐怖をぬぐっていた。

手から滴る鮮血は、蒸発して黒い気と化し、アルセスの身にまとわりつく。

新たに数羽、小鳥が中庭に落ちてくる。

飛び立とうとした羽虫も次々とそこに転がってゆき、中庭が黒いじゅうたんに敷き詰められてゆく。

黒ずんだ血痕と相まって、酒と混じった死臭もあり、そこは不気味な死によって彩られていた。

そんな光景を目の当たりにして、三人は言葉を発することができないでいる。

「どうしたんだい? こんなことじゃ、未来に襲ってくる“終焉”ジ・エンドに勝てはしないよ!」

足下の壁をくぼませて、フィアリウは右手を銀色に発光させた。

肉眼で目視できるほど気を圧縮して、フィアリウは眼下がなかのアルセ

スを見定める。

「……“ジ・エンド”……？」

フィアリウの言葉の意味を理解できていたのは、アルセスだけだった。

そのアルセスは刃先を向けながら、廊下へと後退している。

オルは調子を崩したイウを庇いながら、フィアリウを注視していた。

「ここにいるボクが、いつまでも本物だと思わないことだよ」

「来るぞっ！」

言い終えた後、フィアリウの姿がブレた。

すでにそこに影はなく、彼女の身と影は　　オルの背後にあった。

「ご愁傷様」

フィアリウの跳び蹴りが、オルに当たりそうに　　とっさの判断

でイウは、オルを突き飛ばした。

「うぐああああっ!？」

「なにっ？」

フィアリウの足技は、空振りした。

ふたりの間を抜けて着地するフィアリウは、追撃をしようとしたが　　アルセスに接近され、高く跳んで天井に足をつける。

「ちいっ！　逃がすかよ！」

アルセスとフィアリウがにらみ合っている間に、イウはオルに駆け寄っていた。

「くっ、な、なにすんだ……イウっ！」

「ごめん。フィアリウの足技は防御しちゃいけないって、アルセスの忠告を思い出したの」

オルとイウは、見てしまった。

まるでドリルで削られたような穴が開く、中庭にある石柱と石壁を。

しかし、その付近にある小鳥と羽虫は……微動だにしていない。

(あいつ、足に渦巻いた銀色を……まるで、ドリルを撃ち出してい

るみたいだったぞ)

考えていたオルは、打ち合っているふたりを見やった。アルセスの黒刀は、フィアリウの肩を捉えている。

しかし、フィアリウの表情は穏やかだ。

「どうしたんだい？ 黒い気を用いても、ボクには傷ひとつつけられないじゃないか」

「だ、だまれええええええっ！」

フィアリウを蹴飛ばし、すかさずアルセスは黒い気刃を飛ばす。

「そう何度も」

フィアリウは扉の盾で空間を歪ませ、そこに飛び込んだ。

「どっかから来るぞ！ 気いつけるよ！」

アルセスの叫びで、イウは確信を得た。

ついさっきの不意撃ちは、その扉の力によるものだったのだと。

「……………」

オルは目を閉じて、フィアリウの気配を探っていた。

イウはそれに気づいて、オルの背中に立って、彼を守っている。

アルセスは黒刀を片手に、ふたりの下に近づいていた。

「下だああっ！」

オルはそれに気づいて、背後のイウを蹴飛ばした。

直後、イウとオルのいた場所に大きな風穴ができる。

「ちい」

右腕を振り上げているフィアリウは、手応えがないことに舌打ちする。

その隙にアルセスは、フィアリウの右肩へと黒刀を突き立てた。

「あ、ぐああああああああああ……っ?」

「驚いたな」

つぶやいたアルセスは、刀から滴り落ちる血を見てぎょうてんしていた。

先刻までは傷つけることすらできなかった刃が、フィアリウの肩を貫いている。

「ぐ、こ、のお」

次元の穴に自身を飲み込ませて、フィアリウは三人から大きく距離を取った。

「斬ったのか？ そうか、やっぱそうなんだな」

オルは一連の攻防を目にして、確信を得ていた。

「あいつ、銀色を放つたらしばらくは防御が薄くなるみたいだぞ。

オーラで自身を保護していたみたいだし、それを利用した攻撃後がチャンスなんだ」

オルの自論に、アルセスは舌を巻いていた。

感心して、本当に舌を出して甘噛みしている。

「なるへそ。分析サンキュ、オル」

今のは相当効いたらしく、遠くに位置するフィアリウは、まだ攻める様子を見せていない。

オルの言う通り、フィアリウの防御は鉄壁ではなかった。

アルセスはそれを知って、刀を両手で構え直している。

「まさか、そこまで本気だとはね……ううっ」

使えなくなつた右腕から、多くの血が流れていても。

フィアリウはまだ、笑う余裕を見せている。

癒しの光を当てて、右腕の治癒を促しているからだ。

「オレは主殺し（しゅころし）、裏切りの使者（うらくりしや）という悪名（あくな）を持つてるんだ。長い付

き合いだからって、全てを知った気になるのは油断だぜえ。オレは、

まだお前にも見せていない奥の手があるんさ」

その言葉を受けて、フィアリウは目を丸くしていた。

傷が治らない。

正確には、治りが遅くなっている。

「これは なるほど、ね」

アルセスの発言の意味を悟って、フィアリウは右腕の治癒を諦めた。

「ふふふふっ。久々だよ、ボクが血を流したのは……二百年ぐらい前に、イグノレステから牙を受けて以来だ」

冷や汗だらけのその顔で、フィアリウは左腕を広げて、声を張り上げた。

「まあ、そのイグノレステムノロハと燃えている森で死闘を演じ、ともに灰燼かいじんに帰きしたから本望でしょう」

不気味な笑みを浮かべながらフィアリウは、イウとオルの反応をうかがっている。

動揺しているふたりを見て、彼女はおかしさに吹き出していた。

（嘘も方便というか。あくまでも、悪者を演じるのか……お前つてヤツは！）

やるせなさをどうすることもできず、アルセスはフィアリウに刃を向けるしかできない。

「な、そんな……っ」

「マジ、かよ」

イウはシヨックで、気を失いそうになる。

オルは彼女の背中に腕を回して支えていた。

「ボクも、調子に乗っちゃったね。そこまで早く活路を見出されるとは、予想外だ」

深呼吸を繰り返してから、フィアリウは左腕を伸ばして。

「もう、君たちを壊したくてしょうがないよ！」

その手の親指から、指弾を撃ち出した。

「伏せろおおおおおっ！」

アルセスの絶叫を耳にして、イウとオルが姿勢を低くした。

「あっひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃああああっ！」

回転しながら、フィアリウは指弾を乱射している。

と同時に、足先からも気弾を放り、あたり構わず破壊をまき散らしている。

石が割れ、塵が飛び、大気が震えてしまうほどの威力。

その中でアルセスは羽根を散らし、ふたりにおよぶ射撃を防いでいた。

「全方位、一斉射撃とは派手にやってくれぬぜ。おまけに、視界ま

で悪くして……休むつもりなのか？」

アルセスは目にゴミが入ることを恐れ、片手で黒刀を握りながら、腕を目の前に出してしまった。

不意に、地面が揺れ動く。

「なっ、地震か！」

屈んでいたため影響は微妙であったが、アルセスは立っていたから体勢を崩している。

塵埃じんあいの中から影がひとつ　フィアリウが飛び出してきた。

「しま　っ」

「さようなら、アルセス」

硬直しているアルセスめがけて、フィアリウは跳び蹴りを見舞った。

前に出ていた彼の腕に靴を密着させて、それから足先と身体を百八十度ひねる。

「ぐはあああああああああああああああああああああああ  
あっ!?!」

その瞬間、アルセスの断末魔が城内じやうに轟いた。

吐血して膝から崩れ落ち、アルセスはうつぶせに倒れ込んだ。

黒刀は彼の眼前に転がり落ちて、石畳に広がる鮮血を浴び、妖しげに輝いている。

イウとオルのふたりの目に焼きつくそれは、鮮烈な恐怖を心に植えつけた。

「ふふっ。これが、ボクの足技だよ」

石畳の上に軽やかに着地し、フィアリウは苦悶に喘ぐアルセスを見やる。

その彼を見るなり、最初は涙目で齒噛みしていたが　ふたりに気取られまいと、フィアリウは必死に感情を抑え込む。

それから愉快そうに嘲笑ちやうしょうを浮かべて、ふたりのほうを振り返った。

「あのオーラを渦巻かせた蹴りは、ドリルのように深くえぐらせるものだったんだな」

その原理に気づいているオルに驚き、フィアリウはほんの一瞬だけ、うれしそうな表情を見せた。

「察しが早いね。しかもそれは、相手が守るなりして筋肉を強張らせていれば……もしくは対象が堅固であればあるほど、痛手を増す。それが、防御砕破ガイドブレイクだよ」

オルの解説に付け足しをするフィアリウ。

遠くにあつた石壁が砕けた理由を、イウも理解した。

もしあの時、アルセスの忠告を守らずに防御していたら。

私は、間違いなく死んでいたよね……？

「しかも生物である場合、背骨や脊髄せきずいに損傷を負う可能性もある。アルセスはもう、息があつたとしても再起は不可能かもね」

自身に仕えていたアルセスを、情け容赦なく切り捨てて。

肩をすくめながら、フィアリウは皮肉な笑いを浮かべている。背筋が寒くなる畏怖いふを感じて、イウとオルは後ずさっていた。

アルセスを見捨てられない思いと、この場から逃げ出したい衝動せめぎ合つたふたつの感情に挟まれて、ふたりはそれでもフィアリウへと立ち向かおうとする。

「へえ……、その目はまだやる気なんだね」

立ち上がったふたりに刃先を向けられて、フィアリウは意外そうな顔をする。

「ふふつ。次は君たちの番だ。ボクに刃向かつた以上、長くは生かさなないよ」

正攻法は通じない。

ふたりは後ろへ下がりがりながら、あたりを見回している。

「くそ、正面からじゃダメだっ！」

このまま真っ向から挑んでも、勝算はないに等しい。

フィアリウのほうを向いたまま、ふたりは後退して逃げ道を探していた。



「おっと、そうはさせないよ」

「やらせるかつ！」

指弾が放たれたと知り、オルはそれに剣を合わせた。

「くっ」

その拍子に、長剣は折れてしまう。

「へえ。オーラが見えるだけでなく……動体視力、反応も追いついてるなんて」

「このお！」

「っ」

折れた剣の柄をフィアリウに投げつけ、オルはイウの手を引いて走り出す。

「危ないじゃないか。いきなり投げってくるなんて……まあ、いいよ。鬼ごっこも楽しめそうだし」

フィアリウの指弾乱射でできた風穴を通り抜け、イウとオルは適当な部屋に身を潜める。

ゆっくりと着実に、足音がふたりへと迫っていた。

「打開策、何か思いつかないか。イウ」

「そう言われたって、すぐには」

ふと、イウは鼻につく匂いでここがなんなのかを察した。

「ここって、まさか……」

大きな木のタルがいくつも置かれ、その脇にはボトルが何本も入った木箱がある。

「ふふっ。鬼ごっこはそこまでかなあ？」

「ここは、ワインセラー？」

パパはお酒飲めないから、これはきつと新しい王が運び入れたものに違いない。

「くそ、イウ。これ借りるぞ！」

「え、あつ！」

オルはイウからフランを奪い取って、部屋に入ってきたフィアリウと対峙する。

「ど、どうしよう」

イウはフィアリウを倒す手立てを閃いていた。しかし、それにはあるピースが必要になる。

オルが持つ、フランダ。

「火のナイフ、か。彼女の代わりにそれを握って、騎士を気取ってるのかい？」

フィアリウの気迫に恐れをなして、オルがたじろいでいる。

「うるせえっ！ イウには指一本も触れさせないぞ！」

それでもオルは、イウのためならばと己を奮い立たせる。

「オル、無茶しないで！」

物陰から声をかけるイウ。

何気にポケットに手を当てたら、イウはそこにあるものを思い出した。

火打石が、ふたつ。

鍛冶作業を終えてから、そのまま放置していたもの。

「でも、これだけじゃ」

火をつけるには、事足らない。

ふと、イウはひんやりと冷たい風があるのに気がついた。

「あれは、地下通路への出入口？」

風が来るほうを向いて、イウは視線の先に退路を発見する。

「気術ができる男の子。貴重な素材だ。でも、刃向かうのならアルセスのようにしちゃうよ」

「やってみるよ。やってみろって言うてんだよ！」

逃げる前に、フィアリウをどうにかしなくてはならない。

慌てていたイウは周りを見渡して、火をつけられるものを探す。

「やれやれ、降伏すればユイフェヴとして迎え入れようと考えていたのに」

「白旗だつて？ ふざけんなよ、俺の家族を奪っておいて……その言い草はなんだ！」

不快な金属音がした。

反射的にイウは物陰から顔を出し、ふたりの接近戦を見守っている。

お願い。何か、何かないのっ!?

急がないと、オルが危ないのに……っ。

「ボクに罪を被せないでよ。君の家族を殺つたの、イウなんだよ?」

「脅迫しておいて、自分は何もしてないって言い張る気か!？」

「威勢だけはよろしいね。でも、殺すには惜しいんだよ」

フィアリウは、オルの潜在能力を欲している。

それを悟ったイウは、その手にある火打石を強く握り締めた。

「オル、地下へ逃げよう!」

「い、イウ?」

それをフィアリウへと投じるも、左腕の盾によって弾かれてしまっ。

そしてそれは、間近にあったボトルを砕いた。

「フィアリウ。鬼ごっこはまだ終わりじゃない。私がいるのを忘れないで!」

「ふふふっ。こそこそと隠れて、石を投げるなんてね」

「やあああっ!」

火打石を片手に、イウはフィアリウへと突進する。

「まあ、長く楽しむのもいいけどね。でも、痛い目には遭ってもらうよ」

イウに気を取られていて動きが止まっていたオル。

その隙にフィアリウは、人差し指でオルの右腕を弾いた。

「うぐあああああっ!」

「お、オルっ?」

鈍く嫌な音がした。

フランは後方に弾き飛ばされ、ボトルの入った木箱にぶつかり、床に転がっている。

足を止めていたイウはオルが屈んだのを見て、フィアリウへと火打石を投げた。

「何度やれば気が済むんだ！」

またしても盾で弾かれてしまう。

それは酒さかダルにめり込んで、中の液体を少しずつ漏出もつしゅつさせている。

「邪魔だよ」

「ぐああっ!？」

軽々と蹴飛ばされたオル。

イウは彼を受け止めて、ともに後方の木箱まで転がされた。

「脆もろいよ、脆い。気術で防御する方法、ボクが直接教えてあげよっか？」

フィアリウは、まだ気づいていない。

イウは脇にあったフランを拾い上げて、不敵に笑っている。

「……………。なんだ、何がおかしいの？」

「オル、早く逃げよう」

「え、だ、だが」

「いいからっ！」

イウはオルの手を引いて、地下通路の入口へと走る。

しかし、その途中でふたりは転んでしまった。

「あっははははは。こぼれてた液体で滑って転ぶなんて……………もう、諦めたほうがいいよ？」

ふたりに近づく途中で、フィアリウは鼻につく異臭を感じ取った。

「……………? ここって」

フィアリウは冷静にあたりを見回して、ここがぶどう酒の貯蔵室であることを理解する。

気づかれた。

慌てたイウは、覚悟を決めてフランを振り被る。

「っ!？」

イウが何をしようとしているのか、オルも気がついた。

それより数刻遅れて、フィアリウもイウの狙いを理解する。

「一緒に、逝こうよ」

「な、だれが」

イウの投じた火のナイフは、フィアリウの盾が届かない、酒さかダルめがけて飛んでゆく。

しかしそれは、何者かの手によってつかまれてしまった。

「おや、君は……」

「な、母さんっ!？」

火のナイフを受け止めたのは　フクロウの翼を耳から生やした、ヒウラだった。

フィアリウを庇うように立つ彼女は、イウとオルを見て、不気味に笑っている。

「すっかりやられてたと思ったけど、まだ存在があっただね。さあ、あのふたりを……特にイウを、葬りたいだろっ?」

何も答えず、ヒウラはフランをイウの下へと投じた。

「な、何をしているんだ?　まさか」

ヒウラは油断しているフィアリウを羽交い絞めにした。

足を用いて彼女を転ばし、翼を使って鼻と口を塞ぎ、その腕は盾が急所を防がないようにしている。

フィアリウの拳動を全力で妨げているヒウラは、ふたりに向かって自分の覚悟を伝えた。

「さあ、早くとどめを刺しなさい!」

目を白黒とさせていたイウとオルは、ヒウラの想いを知って涙をにじませていた。

黒い血の涙を流しながら、ヒウラはフィアリウをpushさえつけている。

「オル、イウ王女!　どうか、お幸せに……」

ヒウラは、フィアリウと心中する気だ。

その想いを知ったふたりは、背を向けて地下通路へと走り出す。

「ごめん……ほんとに、ごめんなさい!」

イウは振り向きざまに、火のナイフ　フランを、近くにあった酒さかダルへと投じた。

ぶどう酒の貯蔵室は、瞬く間に火炎に包まれた。紅蓮に彩られるそこは、まさに煉獄と呼ぶに相応しい。

「うとうぐああああああああああつ!?」

中から聞こえたフィアリの声は、激しい燃焼によって起きる爆音にかき消される。

爆発が続き連なり、熱風が吹き荒れ、黒煙が溢れ出す。

猛火は周囲の石すらも赤く染め上げ、白い煙を生み出していた。

「く、くそっ」

「や、だっ」

背後から迫る爆風で体勢を崩すも、イウとオルはひたすらに走り続ける。

道中にハシゴを見つけたイウは、それを伝って城の一階に辿り着く。

右腕が骨折しているオルは、イウの補助もあって、どうにか上ることができた。

「とにかく今は、この島から出ることを考えないと」

左腕の傷口が開いたのか、イウは右手でそこを押さえている。

「でも、どうするんだよ……?」

おもむろに立ち上がるふたりは、ここが島の頂上付近であることを思い出す。

脱出するにも、道はない。

他にも地下通路はなかったか、イウは思い出そうとしている。

「身体が、妙に重いような……」

「い、急がないと。それにアルセスは……」

どうして、身を動かすのが億劫なのか。

浮遊石が島を丸ごと浮上させているためなのだが、ふたりには知る由もない。

「あし、おと?」

「ん? なっ」

誰かが近づいてくる気配がして、イウとオルは同時に後ろを振り向いた。

ふたりは思わず、両手で口元を押さえてしまう。

「あ、アルセス……さん」

「はあ……へえ……ちつ。ここに、いたんだな」

右腕が力なく垂れ、左手に握る刀を杖代わりにして、ようやく立つて歩行できる状態。

瀕死のアルセスを見つけ、イウとオルは重い足を動かして、彼の傍に駆け寄った。

「な、あ、アルセス……さん」

「だ、だいじょうぶなのっ？」

息も絶え絶えなアルセスは、うつろな声でふたりにこう指示する。

「わかりが、ズボンのポケットに……あるものを、中庭で解放しろ」

「な、何を言ってるの？」

「いそげ、え……っ」

必死の形相で訴えるアルセスを前にして、イウは言われた通りにポケットから、二枚のカードを手に入れた。

「それだ、それを……がほっ！」

「あ、アルセスっ？」

「アルセスさん……」

吐血しながらも、アルセスはふたりにこう告げた。

「その二枚を、中庭で解放して……せいほくせい西北西に向かつて飛べっ！ 灯台があるほうとは、逆の方向だ……っ」

「灯台とは、逆？ わ、解ったよ。アルセスさん」

イウは、そのカードを見て目を見開いていた。

これは、パパ……じゃない、イグノ？

それに、“ユイフェヴ・レベル3”っていったい……？

「オレの……知り合いのバアさんが、そこにいるはずだ。だから、はやく……ぐほっ！」

重力に耐えられず、片膝をつくアルセス。

それでも騎士を気取りながら、彼はイウをあおぎ見ていた。

「イウ姫、オル。最期の……頼みだ」

「さ、さいごだなんて……いわないでよっ！」

「そうだ。アルセスさん……俺は、まだあなたに恩も返せていないのに」

イウとオルの顔を一瞥して、アルセスは安心していた。

同時に、悲哀をこらえられずに涙している。

「いいから、きけ。オレが……姫にやった虹の羽根は、オレの……亡き妻のモンだ。それを提示すれば、オレの知り合いの、黒いクソガキのバアさんが……力を貸してくれるはずさ」

アルセスが結婚していたことを知り、イウとオルは驚いている。

「後な、そこにいるであろう……オレの、子孫に……こう伝えたい  
てくれねえか」

子供までいる事実を耳にして、ふたりは同時にアルセスの手に触れている。

アルセスの手は、ふたりの涙によって輝いていた。

「お、おまえらの、ち……ちおやは、りっぱな……剣士だったってな」

「わかった、わかったから……もう、しゃべっちゃダメ」

「アルセスさん……俺らと一緒に、ここを」

イウとオルはアルセスを連れ出そうと、その手を引いて中庭に向かおうとする。

しかしアルセスは、その手と想いを拒んでいた。

「オレはもう、飛竜にしがみつくほど……の体力はな、い……っ」

その瞳からはもう、生気がほとんど感じられない。

気力だけで、アルセスは意識を保っていた。

「この島はもう浮き上がってる。浮遊石、その影響で……重力が増している、んざ。気づかないうちに……体力を奪われるから、さっさと脱出、しろ……っ」

イウとオルは涙ながらに、静かにうなづいた。



「へっ、泣くんじゃねえよ」

涙目のふたりを前にして、アルセスは笑っている。それは強がりだと、ふたりは解っていた。

「な、ないてなんか……」

「き、きのせいっすよ」

「へへっ。死ぬ間際に泣かれるなんて、オレも……生きててよかったぜ」

自重に耐えられず、アルセスはその場にあぐらをかいた。

「オル、イウ姫。死んで喜ばれるような人間にだけは、なるなよ……」

アルセスに名を呼ばれたふたりは、中庭へと駆け出した。

「さっさと、こっから……ごほ、ぐふっ！　ながいしていたら、じゅつりよくにおしつぶされっぞ……っ！」

アルセスの悲痛な叫びが、城内に響き渡る。

身体を張って道標を示してくれたアルセスの声を、ふたりは背中越しに聞いて、泣きだした。

ぶどう酒の貯蔵室が爆発した影響が、拡大していた。

城内の石壁が、爆発と乱れた重力によって崩壊を始めている。

「ええいっ……」

アルセスの指示通り、イウは二枚のカードを空へとかざした。

すると、まばゆい光の中から　藍色の飛竜、イグノが現れる。

「ぬあ……っ！」

ふたりは思わず後ずさってしまった。

その二枚のカードから、本当にイグノが現れると思わなかったからだ。

「話は、カードでいた時から大体は聞いていたぞ……。西北西へと飛べばいいのだな？」

そのイグノは転げるように地を這い、イウとオルの姿を見て微笑

んでいる。

「パパ……じゃない？」

カードに描かれていたのは、間違いなくノロ八だった。

「気にするな。今は、さつさとここを脱するほうが先決だ」

イグノはイウたちに背を向けようとしたが、身体を思うように動かせない。

それでも言葉で、早く乗るよう促している。

「まったく、泣き腫<sup>は</sup>らした顔を、ふたりしてさらしおって……さつさと意を決さぬと、どうなるか知らんぞ……」

イグノの言葉を耳にして、イウとオルは吹き出していた。

ふと、イウは提げていた鞆の中から救急箱を取り出し、オルが携えている剣の鞘を借りた。

「な、なんだ？」

「いいから、じつとしてて」

オルの右腕を処置するイウを見て、イグノはおかしいのか大口を開けて笑っている。

「手当て、している場合か？」

「ごめん、イグノ。オルの右腕が……折れちゃってるから」

革製の鞘を腕に当てて、その上から包帯で巻いてゆく。

「うっ、ご、ごめんな。こんな役立たずで……」

「オル、それを言ったら私だって……」

鞘が添え木の役目を果たしている。

手早く処置を終えたイウの手並みに感心しながら、オルは彼女の手を引き、イグノの背中に回った。

「さあ、ゆこう」

「ああ」

イウが先にイグノの背中に乗り、そこからオルを引っ張り上げる。後は、ひもで

イウは自身とオルの腰にそれを巻きつけ、離れ離れにならないようしっかりと固定する。

どうにか、飛び立つ準備は整った。

「随分と、長い準備だな……」

イグノの声が弱々しいと、ふたりは気づいていた。

しかし今は、それについて追及している時ではない。

「もう、いいんだな？」

「うん」

「ああ」

不安を胸に抱えたまま、イウとオルはイグノに飛翔を許可する。

「ならば、空の旅へ……儂が案内してやろうぞ！」

翼を羽ばたかせて、イウとオルはこの島にさよならをした。

## エピソード

空を翔るイグノの背に乗る、イウとオルのふたりは。浮き上がる島を目の当たりにして、息を飲んでた。

「マジかよ。本当に島が浮いてやがる」

「ええ。浮遊石、だっけ？ アルセスの言っただ通りだよ……」  
島全体を持ち上げるほど、浮遊石の力は強大だった。  
すでに海から離れた島は、真下に船の残骸や樹木、土に石壁を落としながら高度を上げている。

「こつちで、合っているのか？」

「ああ。このまま進んでくれれば」

イウとオルは風圧で吹き飛ばされないよう、身を屈めていた。

ふたりして片腕しか使えないため、革製のひもとたがいの手だけが頼りである。

「………………。小娘、僕からも頼みがひとつある」

「え、なにっ？」

「僕が死んだら、僕の素材で…………墓標代わりとなろう、武器を創れその言葉の意味を、ふたりは同時に察した。

また、イグノが羽ばたくのを止めて、滑空かっくうしていることに気がついた。

「遺言みたいに、言わないで…………っ。アルセスとイグノのなんて、同時に背負いたくないよおっ！」

「戯たわけるなよ！ これが、これが生きるという事だ。生半可な覚悟で、これから生きようものなら…………あの島で潰つぶえた、数多くの生命を冒瀆するのと同義だぞ」

思わず、ひもを強くつかむふたり。

「もう…………長く、ないの？」

「残されたのは、俺らだけなのかよ…………そんなのって、ありがよ」  
ふたりの嘆きを耳にして、イグノは安堵していた。

「さあ、な……。だが、許してくれよ」

許す、その一言でイウは思い出した。

「それが、儂にできる……。ふたりへの愛情表現だと思ってくれないか」

嫌、だよ。

大切な人を、失ってばかりなのは嫌だよっ！

なんで、こんなことになっちゃうの……？

「短い付き合いだったが、儂の亡骸で武具を創れなどと……このように思わせてくれる職人に出逢えて、儂は幸せだったぞ」

「イグノレステ……。だよ、ね？」

「ああ、それが儂の名前だ」

「わかった。イグノの素材で、私は剣を創るよっ！」

イグノが生きた証。

あなたの名に恥じない剣を、私は必ず創ってみせるよ。

「ありがたい……。ものだ。小娘、儂の墓標には……。紫のチューリップでも、添えてくれないか」

チューリップの花言葉は、博愛と思いやり。

色によっても、特別な意味がある。

赤は愛の告白、紫は永遠の愛。

黄は望みなき愛、白は失恋。

「やっぱり、知ってたんだ……」

それを知ってなお、イウはイグノとのさよならが近いことを嘆いた。

「そうしてできあがった武器は、小僧に振るってもらいものだ」

「お、俺がっ？」

「ああ、儂の骨や鱗で完成した武具を……。小僧がそれを用いて、活躍する姿を想像すると……。実に、ワクワクするぞ」

オルもまた、イグノとのさよならを嘆いていた。

家族を奪った事実は覆らない。

しかし、今こうして自分はイグノに救われている。

「頼むぞ、小娘と小僧……いや」

小声だけど、ふたりの耳にははっきりと聞こえた。

「イウとオル、たくましく生きるのだぞ」

最後に、イグノがふたりの名前を呼ぶのを。

「お、おいっ！ このままじゃ、やばいぞ……」

遠くに島が見える。

森が生い茂るその島に墜落するように、イグノは突っ込んだ。

「う、うわあああああっ！」

「きゃああああああっ！」

その頃、浮き上がる島に存在する城の中では。

「………………。やっぱ、生きてやがったか」

重力に抗うことができず、横になって意識を繋ぎ止めているアルセス。

その彼の下に、フィアリウが寄り添っていた。

「さすがに、危なかったけどね……」

フィアリウの着ていた服は半分が焦げていた。

靴はなく裸足で、髪も短くなっている。

火傷の跡もちらほらと確認できるが、フィアリウにとって最大の

痛手は、アルセスからもらったあの一撃だった。

「ったく……ワインセラ―に火気は、厳禁だよ」

そのつぶやきを耳にして、虫の息のアルセスは納得した。

ああ、なるへそ。

ノロハは酒を飲まないから、後任が持ち込んだんだな。

「うれしそうだね、アルセス」

燃え尽きた外套の切れ端を投げ捨てて、フィアリウはアルセスの

近くに腰を下ろした。

「へっ。死にかけの、男に……なんのようがある」

フィアリウはアルセスの目を見て、溜息をついていた。

「とどめを、させよ……」

「本当に君は、自分勝手だね。君は、何も悪くないのに」

「……………。オレが招き寄せる不吉で、くたばらなかつたのは……唯一、お前だけなのかもな」

「じゃあ今度は、ボクが招き寄せるであろう……片割れであるお姉ちゃんが、君にとどめを刺すかもね」

「ばか、いうなよ……？」

目を閉じて、アルセスは意識を落とそうと考えた。

「させないよ。君は、瑠璃が華葉のどちらかの力とならねばならぬ。だから」

不意に、浮遊感に襲われるアルセス。

目を開けるとそこは、青い空が広がる海岸で。

「ひどいケガ。あの、だいじょうぶですか？　ねえ、あ……よ、よかつたあ」

視界の横に、黒い刀身が輝いている。

その漆黒の刀に、自分ではない誰かの顔が映っていた。

「お、まえは……？」

自分を助けようとするひとりの女性に、目を奪われたアルセス。まだ悪運は尽きていないことを確信し、大きな溜息をついた。

森林に墜落したイグノから、転げ落ちてしまったイウとオル。

「あいたたたたたつ」

「だ、だいじょうぶか？」

「う、うん。平気だよ」

草木が生い茂る場所に落下したため、軽傷で済んでいた。

ふたりで葉や枝を払い、それからひもをほどき。

えぐれた地面を辿って、イウとオルはイグノの下に向かう。

「……………まさか、死んでるのか？」

「そ、そんな……………」

あんな大木が突き刺さつて、生きているはずがない

「い、イグノっ？ イグノおおっ！」

その傍に駆け寄り、号泣するイウ。

頭を揺さぶつても、もう何も反応がない。

「……………。イウ、泣くなよ」

「だって、だつええええええええっ！」

泣きじゃくるイウを左腕だけで後ろから抱き締めて、オルはイグノの顔を見る。

「……………」

言葉を失うほど、呼吸を忘れてしまうほど。

その顔ひとつに、立派なドラゴンの雄姿<sup>ゆうし</sup>、生き様が見えた。

「イウ、しっかり見ろよ。イグノの、寝顔を」

「え…………っ？」

そこには、笑いながら眠っている。

「イグノ……………」

「ありがとな、イグノ」

誇り高き藍色のドラゴンが、いた。

「何事じゃ!？」

「これは、いったい…………？」

声がして、イウとオルは後ろを振り返った。

そこには弓を携えた、三つ編みの銀髪が目立つひとりの女性と。

青黒いロッドを握り締めて浮遊する、見た目が黒く幼い魔女がいた。



## カードリスト

これはただのカードリストです。小説ではありません。

ここに記された以外の情報については、総合ルールを参照してください。

サヴァントの略記された能力は『702・<sup>キーワード</sup>略記能力』を見ると理解できます。

( ) 内で注釈文を書こうとすると……ページ数がやばいことになるので、割愛します。

マークは、\* (プレイ)、! (起動)、? (誘発)、 (永続)、  
E (装備)、 (ルール)、の能力を示しています。  
「」はコスト、【】はタイミングを示す。  
コスト内にある( ) は、マナコストです。

サヴァントの下部の記述はこういう意味がある。

パワータイプ || <sup>パワー</sup>POW? / <sup>スピード</sup>SPD? / <sup>ライフ</sup>LIF?。

数値の後にFとある場合、それは効果によつては上下しない。固定値を示す。

パワータイプには、A (ATTACK。戦闘ダメージ)、M (MAGIC。効果ダメージ)、S (SPIRIT。精神ダメージ)、がある。

これ以上の情報は開示しません。

解らなくても、質問してきても、公開を求めても。

特定の条件を満たさない限り、私は応じません。あしからず。

《サヴァント》 (SERVANT)

黒月鳥のユイフェヴ、アルセス。（こくげつちょうのユイフェヴ、アルセス）

カラー黒。（闇属性）

サイズS。

伝説の天使のサヴァント。

：名称 「鳥翼のユイフェヴ」

\* - 「（2 + 黒2）」【あなたの使用不可にカード5枚以上】

ディフェンス。

チーム：ジャンプを得る。

- 【敵軍HEXに存在】：+2 +2 +2を得る。

- 【「黒のレイポイント」に存在】：+2 +2 +2とプロテクト

II 青と白を得る。

A II POW3 / SPD3 / LIF3。

フクロウ鳥のユイフェヴ、ヒウラ。（フクロウちょうのユイフェヴ、ヒウラ）

カラー青。（水属性）

サイズS。

伝説の天使のサヴァント。

：名称 「鳥翼のユイフェヴ」

\* - 「（2 + 青2）」

ディフェンス。

! - 「（5）P」：あなたのデッキから\*のコストが「合計（2）

」以下のマジック1枚を選び、それをプレイする。

! - 「（3 + 青3）A」：他のサヴァント全てをデッキに送る。

M II POW2 / SPD3 / LIF3。

グリフィン鳥のユイフェヴ、トルガ。(グリフィンちょうのユイフェヴ、トルガ)

カラー白。(光属性)

サイズS。

伝説の天使のサヴァント。

：名称 「鳥翼のユイフェヴ」

\* - 「(2 + 白2)」

オフエンス。

ブロッカー2。

離脱。

A || POW 4 / SPD 3 / LIF 3。

カナリア鳥のユイフェヴ、ヒユ。(カナリアちょうのユイフェヴ、ヒユ)

カラー白。(音属性)

サイズS。

伝説の天使のサヴァント。

：名称 「鳥翼のユイフェヴ」

\* - 「(1 + 白1)」

! - 「(4)P」：あなたは白のマナコインを2つ得る。

! - 「(1 + 白1)A」：アーティクルがマジックかセットカード1枚を対象とし、それを破壊する。

M || POW 1 / SPD 4 / LIF 2。

藍王竜のユイフェヴ、ノロハ。(あいおつりゆうのユイフェヴ、ノロハ)

カラー無。(無属性)

サイズS。

伝説の天使のサヴァント。

：名称 「竜翼のユイフェヴ」

\* - 「(5)」【あなたの使用不可にカード5枚以上】  
オフエンス。

A 11 P O W 1 0 / S P D 0 / L I F 4。

《アーティクル》 (ARTICLE)

金属 - チタニウム。(メタル - チタニウム)

カラー黄。(金属性)

効果のアーティクル。

：名称 「金属」、変化 エレメントx。

金属 - グリアンド鋼。(メタル - グリアンドこう)

カラー赤。(火属性)

効果のアーティクル。

：名称 「金属」

ブリスト。

? - 【使用不可に送られた】：あなたのデッキから依存のマジック  
1枚を選び、それを公開して手札に加える。

金属 - フィナンス銀。(メタル - フィナンスぎん)

カラー紫。(氷属性)

効果のアーティクル。

：名称 「金属」

ブースト。

? - 【使用不可に送られた】：あなたのデッキから装備のマジック1枚を選び、それを公開して手札に加える。

### 《マジック》 (MAGIC)

ヒール。(HEAL)

カラー橙。(命属性)

効果のマジック。

：名称「トリート」

\* - 「(2)」：1HEXを対象とし、その全てを4点回復する。

\* - 「(2)」：1HEXを対象とし、その不死と霊体のサヴァント全てにダメージ4点を与える。

不治癒・アン・ヒール。(UN HEALING・UN HEAL)

カラー橙。(命、始源属性)

効果のマジック。

：名称「不治癒」「トリート」、プレイ 無効x。

\* - 「「ヒール」&(2) or (2+橙3)」：《1HEXを対象とし、その全てにダメージ3点を与える》

《内はカードの効果を無視する。》

リカバー。(RECOVER)

カラー橙。(命属性)

効果のマジック。

：名称「トリート」

\* - 「(橙2)」：味方全てを3点回復する。  
\* - 「(橙2)」：不死と霊体のサヴァント全てにダメージ3点を与える。

不治癒・アン・リカバー。(UN HEALING・UN REC OVER)

カラー橙。(命、始源属性)  
効果のマジック。

：名称 「不治癒」「トリート」、プレイ 無効x。

\* - 「リカバー」&(橙2) or (橙5)：《敵全てにダメージ2点を与える》

《》内はカードの効果を無視する。

フォトン。(PHOTON)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(1+白1)」：1方向を選ぶ。その直線2HEX上の全てにダメージ2点を与える。

ウインド。(WIND)

カラー緑。(風属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*：1HEXを対象とし、そのの全てにダメージ1点を与える。

ユイフェヴ・レベル3。(YOIFEV LEVEL3)

カラー無。(無、未知属性)

効果のマジック。

：名称 「サモン」、プレイ 無効x。

\* - 「(4)」：《あなたのサイドから「ユイフェヴレベル3」1

枚を選び、それをプレイする。(コストと条件は要する)

このカードをサイドに送る《

《内はカードの効果を無視する。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9301s/>

---

ほんとにごめんね

2011年8月11日03時26分発行